

## セルギイ伝 (2)

— 中世ロシア文学図書館 (XXVI) —

三浦 清美

〔はじめに〕

『エクフラシス』9号に掲載された『セルギイ伝 (1)』の続篇で、本篇をもって『セルギイ伝』は完結する。翻訳にあたったのは、三浦清美である。出典としたのは、以下の書である。

出典：Житие Сергия Радонежского // Библиотека литературы Древней Руси. Т. 6. СПб., 1999, С. 254-411, 555-564.

〔『ラドネジのセルギイ伝』翻訳テキストの改版に寄せて〕

『マタイによる福音書』25章に「タラントンの喩え話」というものがある。粗筋は以下のとおりである。ある裕福な人が僕に金を預けて旅に出た。僕のある者たちは主人が返ってくるまでに、この金（タラントン）を元手に商売をして儲けを出し、主人に誉められた。これに対して、臆病な僕は主人が「預けないものを取り立て、蒔かないものを刈り取る厳しい方」だと知っていたので、地面に穴を掘って金を埋めておいた。この僕は帰ってきた主人の不興を買った。主人はこう言った。「なぜ私の金を銀行に預けなかったのか。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きでそれを受け取れたのに。… この役に立たない僕を暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」『ルカによる福音書』19章では、貨幣の単位がタラントンではなくムナであるが、粗筋はまったく同じである。

2022年2月24日にはじまったロシア軍によるウクライナ侵攻は、文字通り世界を震撼させたが、このような傍若無人な行動をロシアが取るのは、歴史の中では実は決してはじめてのことではない。外国人にとっては不可思議きわまりないロシアの行動にも、ある種の内的な必然性が含まれており、しかしながら、それを理解するには、ピョートルの西欧化改革以後の歴史を振り返るだけでは不十分である。ロシアの不思議さに一つの見通しをつけるためには、キリスト教の受容以前にも遡って伝えられる東スラヴ人（のちにロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人となる）の事績を、現代に通じる一貫性のなかで見ることが必要だと私は信じている。

2009年からその当時勤務先であった電気通信大学の紀要で筆者が『中世ロシア文学図書館』シリーズをはじめたとき、上のような目的意識が明確にあったかどうかはあまり定かではないのだが、それでも、2003年に講談社メチエ叢書で刊行し、一般的にはわりと読まれたが、中世ロシアの専門家からは決して好評と言えなかった拙著『ロシアの源流』で自分が書いた内容を、実際の中世ロシア語のテキストに当たって検証してみたいという気持ちがあったのは確かである。開始から14年を経た現在、『ロシアの源流』も電子書籍として読み継がれ、シリーズ自体

は25集まで及んでいる。基本的に原典となるテキストは、ロシア科学アカデミーロシア文学研究所の中世ロシア文学部門が監修している『中世ロシア文学文庫』(Библиотека литературы Древней Руси)のテキストに拠っている。

サンクト・ペテルブルグのネヴァ川の岸边にあるロシア科学アカデミーロシア文学研究所は、いまではいつ再訪できるかわからない遠い場所になってしまったが、1992年から93年にかけてのサンクト・ペテルブルグ大学留学以来、毎年とは言えないまでも、3年空けた年がなかったくらいよく通った。研究員の先生方とも旧知の仲で、この翻訳シリーズの企画もよく話題にのぼった。翻訳の抜き刷りのいくつかは寄贈している。翻訳の対象となった作品の著者は、はるか昔中世ロシアに生きた人々だったこともあり、著作権のような細かい話は一度も話題にさえならなかった。まさに主人のタラントンはしっかり運用しなくてはならないという共通の理解があったのだと思う。

『中世ロシア文学図書館』15集(『エクフラシス』9号、2019)、19集(『エクフラシス』10号、2020)で掲載した『ラドネジのセルギイ伝』の翻訳の原典は、この『中世ロシア文学文庫』シリーズに拠るものではなく、「Patrologia Slavica」シリーズの第3集としてブリュッセルで刊行されたアレクサンドラ・ドゥハーニナ校訂テキストにもとづいて翻訳をおこなったのだが、この翻訳を刊行した直後にコロナ禍が世界を襲い、現地での研究活動はまったくできなくなった。そこで、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号19K00467「民衆文化としてのロシア修道聖人伝の史的展開に関する研究—ロシア人の死生観への展望」の研究費の使途を、現在まで蓄積してきた翻訳の書籍化に切り替えることにした。科研費を管理している早稲田大学の理解も得ることができ、腕のたしかな編集者のいる松籟社が刊行の引受け先に決まり、著作権の問題を解決するために、ロシア科学アカデミーロシア文学研究所の中世ロシア文学部門長、ナタリア・ポヌイルコ氏に連絡をした。ポヌイルコ氏からは、刊行のために『中世ロシア文学文庫』のテキストを利用することは大いに歓迎するが、「Patrologia Slavica」シリーズのテキストの使用については、ドゥハーニナ氏に問い合わせしてほしいと言われた。そのときに伝えられたドゥハーニナ氏のメールアドレスに連絡をしたが、1度だけ返事をもらえたものの、応諾の返事をいただく前に連絡が途絶えてしまった。このため、『ラドネジのセルギイ伝』の書籍化ばかりではなく、研究のために刊行した翻訳テキストの公開についても見直しが迫られることになった。中世ルネサンス研究所の『エクフラシス』編集部との相談のうえ、『エクフラシス』9号、10号での翻訳テキストの公開を停止した。

その代わりに書籍化されたのが、『中世ロシアのキリスト教雄弁文学(説教と書簡)』松籟社、2022年である。ここに収められた中世ロシアの12人の修士たちの著作は、すべて『中世ロシア文学文庫』のテキストに拠っている。この本の出版準備をしながら、しかしながら、筆者には、『ラドネジのセルギイ伝』というタラントンをどうしても世に出したいという思いが断ち切れなかった。そこで、『中世ロシア文学文庫』に収められたドミートリイ・ブラーニン校訂テキストとドゥハーニナ校訂テキストを子細に比較してみると、ほとんど9割の部分が同一であることが判明し

た。大きく異なっているのは、最後の1割で、ドゥハーニナ版のパホーミイ・セルブによるテキストでは、聖セルギイの死後の奇跡が扱われているのに対し、ブラーニン版では、エピファーニイ・プレムードルイによる聖セルギイへの頌詞に変わっている。しかも、ブラーニンのテキストは、1885年に掌院レオニードによって刊行された書<sup>1</sup>から採録されたものであることが分かった。

上記のように、『中世ロシア文学文庫』所収の『ラドネジのセルギイ伝』を原典テキストとすれば、『ラドネジのセルギイ伝』というタラントンが世に出るということを確かめたのは、『中世ロシアのキリスト教雄弁文学（説教と書簡）』の刊行準備が完了した2022年の2月ころのことで、ただちに残りの部分の翻訳に取りかかった。しかし改訂訳ができあがったときには、すでに『エクフラシス』12号の締め切りを過ぎていたため、編集部からは次号での掲載を打診された。応諾したことは言うまでもない。

このことによって、書籍化の計画も息を吹き返すことになった。『ラドネジのセルギイ伝』を含む『中世ロシアの聖者伝（一）—モスクワ勃興期編』は2023年1月松籟社より刊行された。この本に収められた翻訳テキストは、ここで公表された翻訳テキストに基づくものだが、校正というのは魔力をもっているもので、その後修正すべき箇所、付け加えるべき注が相当の量におよび、翻訳テキストもかなり様変わりしたようである。筆者による『ラドネジのセルギイ伝』の決定版翻訳テキストは、『中世ロシアの聖者伝（一）—モスクワ勃興期編』所収のものとしたい。

## 〔解説〕

14世紀終わりから15世紀前半にかけての文学作品には、人間の心理的な生活に特別な関心を払い、感情の繊細なニュアンスを伝えようとする志向をもつという特徴がある。リハチョフの表現によれば、この時代の文学の弁別の特徴は、独特の「抽象的な」心理主義である。この時代のロシア文化の特性は、いわゆる「第2次南スラヴの影響」という用語によって説明される。この時代、南スラヴではロシアの作家に特徴的である雄弁文学の文体が広範に広まっており、人間の内的生活への関心は、作家たちの言葉を条件づけていた。特定の形容表現の多用、一つの語根を持つ複数の言葉の結合、すなわちネオロギズムへの愛 (*figura etymologica*) は、人間の内的生活への関心によって説明される。作家の言葉はときおり意味的機能を失ってしまうかのようで、類音と頭韻によって結合されている。ふつう「言葉の網細工」と呼ばれているこの文体は、エピファーニイ・プレムードルイの著作に明瞭に現われている。

エピファーニイの生涯について私たちが入手できる数少ない情報は、彼の著作から汲みとられたものである。その代表的なものは、彼の師であるペルミのステファンとラドネジのセルギイの聖者伝である。『セルギイへの賞讃の辞』におけるいくつかの表現は、エピファーニイがビザン

<sup>1</sup> 『神に似たる神宿したる我らが師父、奇跡成就者セルギイの聖者伝と彼への賞讃の辞、これは彼の弟子であるエピファーニイ・プレムードルイによって一五世紀に書かれた。掌院レオニードがこれを伝えた』『中世の文献と芸術』五八号、サンクト・ペテルブルグ、一八五五年。

ツにいたと推定する根拠を与えてくれる。エピファーニイがこの地でギリシア語を習得していたことは明らかで、その痕跡は彼の著作に明らかに認められる。この作家はその晩年を三位一体大修道院で過ごし、1418年から1422年にかけて亡くなった。彼の人生の晩年に（1417年から1418年にかけて）書かれた『ラドネジのセルギイ伝』は、14世紀のロシア人のなかでもっとも面白い人物についてのものである。ラドネジのセルギイは中世ロシアの歴史で突出した役割を果たした人物である。ラドネジのセルギイは、ロシアで最大の修道院である三位一体大修道院の創建者であり、共住制の原則に則って修道士個人による所有を排除した修道生活における変革者であり、あらゆる世代の修道院長たちを育成した人でもあった。彼の弟子たちは、アンドロニコフ修道院、シーモノフ修道院、ストロジェヴォのサツヴァ修道院などのちに有名になった多くの修道院を創建した。また、セルギイは、教会の大活動家であるばかりではなく、政治家でもあった。セルギイは意識的に、中央集権化を強く志向するモスクワ諸公に献身的に協力して、非常にデリケートな状況のなかでモスクワ大公を苦境から救い出した。とりわけスーズダリに分領公ボリス・コンスタンチーノヴィチやリャザンの分領公オレーク・イワノヴィチを屈服させたことは特筆に値する。クリコヴォでの戦いを目前に控えたドミートリイ・ドンスコイは、彼から祝福を授かるために彼のもとに赴いた。セルギイは、彼を自分の後継者にしようとした府主教アレクシイをして「大公国の筆頭のご主人たちから下々の者たちに到るまで、そなたを望んでいる」と言わしめた。セルギイが大公権と結びついていたことを指摘しつつも、エピファーニイは自分の師と完全に政治的プログラムを共有していたわけではなかった。ロストフにおけるモスクワ人たちの無軌道な振舞いについて詳述しているがゆえに、研究者たちはエピファーニイがモスクワ生まれではないと考えている。

残念ながら『ラドネジのセルギイ伝』は、エピファーニイの筆になる最初のかたちのまま現代まで伝わっているわけではない。最初のかたちは、公式的な聖者伝作者であるパホーミイ・ロゴフェットによって改変されている。パホーミイは、セルギイの「遺骸が発見された」1422年に降に筆を起したが、その主たる関心は、この聖人の柩の周りで起こった「さまざまな奇跡」に向かっている。パホーミイはかなり長かったエピファーニイによる聖者伝を、教会生活にとって都合のよいものになるように、思い切って切り詰め、新しい頌詞文学の文体で聖人に対する賛辞の要素を強めている。また、望ましくない政治的な灰めかしを排除した。パホーミイは『ラドネジのセルギイ伝』に祝祭的な形態を備えさせているが、これは注文者の要求にこたえたものである。

『ラドネジのセルギイ伝』の作者たちは、非凡な教養、素養をもっていた。この聖者伝では、聖書や福音書の言葉が幾たびも引用され、パラフレーズされている。ある場合には、聖書からの引用が独特のモンタージュを作る。たとえば、剃髪のとくにセルギイが祈りを捧げる場面では、その祈りは詩篇 26、83、92 の小さめの断片から成り立っている。ビザンツの聖者伝文学の作品も、『ラドネジのセルギイ伝』の作者のよく知るころであった。セルギイの生誕にともなう奇跡も、聖者伝のなかでギリシアのさまざまな聖人たちの物語と比較対照されている。ここでは、府主教

キプリアンによって書かれた『ロシアの府主教ピョートル伝』の一節も引用されている。研究者たちは、『ラドネジのセルギイ伝』のさまざまなエピソードに、大アントニオス、エデッサのテオドロスそのほかの聖人たちの聖者伝とのパラレリズムを見出している。

『ラドネジのセルギイ伝』は私たちの時代までにいくつかの版で伝わっている。それぞれの版でパホーミイ・ロゴフェットによって被った改変の度合いをどう評価するかは、学者によってかなり異なっている。この翻訳の原典となった版は、15世紀の写本では伝存されていない。この版は明らかに、ほかのいくつかの版を基盤に16世紀に編纂された複合的なものであるが、ここにこの版を使用する意義がある。この複合作業のおかげで、エピファニーによるテキストが多く保存されることになった。

この翻訳の原典テキストは、『中世ロシア文学文庫』のものであるが、それは以下の書から再録したものである。『神に似たる神宿したる我らが師父、奇跡成就者セルギイの聖者伝と彼への賞讃の辞、これは彼の弟子である至賢のエピファニーによって15世紀に書かれた。掌院レオニードがこれを伝えた』『中世の文献と芸術』58号、サンクト・ペテルブルグ、1855年。この書は、以下の写本に拠っている。ロシア国立図書館（モスクワ）所蔵写本Φ. 304. 三位一体大修道院集成698番1-139葉裏、156裏-182裏、同663番539-553裏（「ゴルトヴィノ修道院について」から「聖なる人の逝去」までの章）。

## 〔翻訳〕

### 聖なる人の両親の移住について

さきに述べてきたこの神の僕キリルは、かつてはロストフの国に広大な所領をもつ大貴族であった。栄えある名にし負う大貴族の一員であり、大きな財を所有していたのであるが、人生が終わりに差しかかり老年になって貧しくなり零落したのである。どのようになぜキリルが貧しくなったかについて、以下に物語ろう。それは公とともに頻繁に金帳汗国へと旅行したからであり、ルーシへのタタールの攻撃が度重なったからであり、タタール使節が何度も訪れたからであり、金帳による重い貢税徴収が頻繁にあったためであり、穀物の不足による飢饉がしばしば起こったためであるが、しかしながら、こうしたことすべてを上回るものが起きたのである。フェドルチュクとトゥラルイク<sup>2</sup>を頭とするタタールの大規模な攻撃があったとき、この攻撃のあとその一年後に弾圧<sup>3</sup>がはじまったとき、すなわち、イワン・ダニロヴィチ大公<sup>4</sup>が大公位を我がものとし、同時にロストフ公位がモスクワに帰属することになったとき<sup>5</sup>、なんという辛いことであるか、ロ

<sup>2</sup> 1327年のトヴェーリへの遠征軍に参加した、タタール軍の万人長。

<sup>3</sup> 翻訳は、イワン・カリターの統治を「弾圧」と捉えている、反モスクワの気分が感じられる写本に拠っている。

<sup>4</sup> 1283頃 - 1341。1325年にモスクワ公、1328年にウラジーミル大公、1328年から1337年にかけてノヴゴロド公。敬虔なる者としてモスクワの地方聖人の一人に加えられている。モスクワ、トウーラの教会では、3月31日（新暦4月13日）に追善がおこなわれている。

<sup>5</sup> イワン・カリターが大公位を授受したのは1328年のことであったが、全権をもった大公になるのはもっと

ストフの町と、それ以上にその公たちの身の上に不幸と悲しみが襲ったのである。なぜなら、彼らからは統治権と公位、財産、尊厳、榮譽、そのほかのすべてのものが奪われ、それらがすべてモスクワの手に帰したからである。

大公の命令によってロストフ公が退去したとき、モスクワからロストフへと、コチェヴァという通り名でワシーリイという名の、ある貴顕で軍司令官である者が派遣されてやってきた。この者とともにはミナがいた。彼らはロストフの町に入ると、町とそこに住むすべての住人たちに大いなる困窮をもたらした。迫害の度が日毎に増した。多くのロストフの住人たちがモスクワ人たちに自分の財産を嫌々ながら引き渡したが、それに対して自身はこのために罵詈雑言とともに自らの身体に傷を被り、手には何も持たずに町を立ち去ったが、その姿はまさしく極度の困窮そのものであった。なぜなら、財産を失ったばかりか、身体に傷を受け、打擲の跡を悲哀の情とともに自分の身体に引き受け、じっとこれに耐えていたからである。これ以上、何を多く語る必要があるか。ロストフに対して、その尊厳をむしり取る無慈悲な行為さえおこなったのである。アヴェルキイという名のロストフの最も身分の高い貴顕<sup>6</sup>は、逆さ吊りにされたうえ、両手を引っ張り上げられて、罵倒されるに任せられた。ロストフだけではなく、ロストフの周辺の地域においても、これを聞いた人々、見た人々を大いなる恐怖が捕らえた。

この迫害のために、神の僕キリルは、先に述べたロストフの村から出て、家財と家族全員を引き連れてロストフを立出してラドネジに移り住んだ<sup>7</sup>。ラドネジに到着すると、キリストの聖なる降誕の名のもとに命名された教会の周りに居を定めたが、今に到るまでこの教会は建っている。ここに彼は自分の家族とともに住みなした。ロストフからラドネジに移り住んだのは、キリルだけではなく、彼とともにほかに多くの人々が移住した。彼らは見知らぬ土地に移住した者たちであったが<sup>8</sup>、そのなかに長司祭の息子ゲオルギイが自らの家族とともに、トルモソフ家のイオアンとフェオドル、その岳父のデュデニが自らの家族とともに、その叔父オニシムがいたが、オニシムはのちに輔祭となった。このオニシムについては、千人長プロタシイ<sup>9</sup>といっしょに来たと言われている。ラドネジという名前前の集落は、大公が年少の息子アンドレイ<sup>10</sup>に贈与したものであったが、アンドレイはチェレンチイ・ルティシュを代官として人々にさまざまな免税をほどこし、同様に諸税を大幅に減額することを約束した。この免除措置によって多くの者たちが集まってきた

---

遅く、共同統治者であるスーズダリ公アレクサンドルが死んだ1332年である。明らかに、この時になってイワン・カリターはロストフの半分を領有した。

<sup>6</sup> 大貴族アヴェルキイは、ロストフ公コンスタンチン・ワシーリエヴィチ（1312-1365）の代官か、あるいは、ほかの異本では、ロストフの千人長であったと考えられる。

<sup>7</sup> キリルが家族とともにラドネジに移住の年代には統一した見解がない。1329年（ゴルビンスキイ）、1332年（クチキン）、1334年ころ（クロス）、1337年（ブレイチェンコ）、1341年（アヴェリヤノフ）など、諸説ある。

<sup>8</sup> 『使徒言行録』7章6節。

<sup>9</sup> ロストフ公国出身のモスクワの千人長で、1330年代にモスクワに勤務替えした。

<sup>10</sup> セルプホフ公アンドレイ・イワノヴィチ(1327-1353)、イワン・カリターと最初の公妃エレーナとのあいだの年少の息子。1341年から1351年にかけて、セルプホフ、ポロフスキイの初代分領公となった。

た。というのも、ロストフの迫害と貧困から多くの者たちが四散したからである。

いま話を進めているこの少年はいと善良なる者であり、いと善良なる父親の息子であり、高貴で敬虔な両親から生い出た、永遠に記憶するに値する功業者であった。なぜなら、善良な根の原初の像と合致しつつ、善良な根からは善良な若枝が生い育つからである。それは幼子のころから果樹園の様相を呈し、豊かな果実を実らす木々のように花開き、美しくその性質が素晴らしい少年だったからである。齢を重ねるにつれてこの少年は、ますます善行に励むようになり、生活の美を何の価値あるものとも思わず、世俗のあらゆる空虚を埃のように踏みつけにしたのだ。こう言ってもよい。存在そのものを軽蔑し、低め、超越したいと思い、このゆえに「私が朽ち果てなくてはならぬときに、私の血に何の益があるでしょう<sup>11</sup>」というダビデの言葉を何度も何度も呟いたのである。夜も昼もこの少年は、功業をはじめたばかりの者が救済されることを助けてくださる神に祈ることをやめなかった。どうやって私は、静かさ、親しみ、寡黙、謙抑、決して怒らぬこと、狡さのない素朴さといった、そのほかのこの少年の善行を物語ったらよいのだろうか。この少年は、しかしながら、すべての人々を等しく愛し、憤怒、誘惑、侮辱、柔弱、高笑いに耽ったりはしなかった。微笑もうとする（そうしなければならぬことがあったのだが）ときでさえ、彼はそれを大いなる貞潔と慎み深さとともにおこなった。悲しみに沈むかのように、いつも嘆きつつ歩き、さらにたびたび泣きぬれ、しばしば彼の目から涙が頬を伝わって啼泣と悲しみに満ちた暮しのさまを呈し、『詩篇』の言葉が彼の口から消えることはなかった。少年はつねに抑制に飾られ、身体の疲労困憊を喜び、情熱をもって衣服の貧しさを受けいれ、麦酒や蜜酒をけって口にせず、口にもっていったことも匂いを嗅いだこともなかった。齋戒の生活に励みながら、こうしたものすべては人間の存在には必要のないものだと考えていたのである。

キリルの息子たち、ステファンとピョートルは結婚した。もう一人の子、至福なる若者ヴァルフオロメイは結婚したがらず、修道士の生活を非常に望んだ。このことについて彼は父親に何度も何度も懇願してこう言った。「一家の主よ、あなたのお言葉とご祝福のとおり私を去らせ<sup>12</sup>、私が修道士の生活を始めることを許してください。」しかし、彼の両親は彼にこう言った。

子よ。もう少し待ってくれ。私たちのために辛抱してくれ。ご覧のとおり、私たちは年老いているし、貧しいし、病身であるし、誰にも面倒を見てもらえないんだよ。というのも、おまえの兄弟たちは結婚して妻たちに気に入られることしか眼中にないんだからね。結婚していないお前は、いかにして神のお気に召されるかに心を砕いている。おまえはよいほうを選んだ。それは取り去られることはない<sup>13</sup>。だが、もう少し私たちの面倒を見てくれないか。私たちを、おまえの両親を柩まで見送ったら、おまえは自分の考えを実行に移すがいい。私

<sup>11</sup> 『詩篇』30 篇10 節参照。

<sup>12</sup> 『ルカによる福音書』2 章29 節。

<sup>13</sup> 『ルカによる福音書』10 章42 節。

たちを柩に納め、土をかけて葬ったあとに、おまえの望みをかなえるがよい。

この奇跡の若者は喜びをもってその生涯の終わりまで彼らに仕えることを約束し、その日から毎日すべてのことで両親の気に入るように努めた。彼らが彼のために祈り、祝福を与えてくれるようにするためである。彼は、その両親が剃髪を受け、それぞれが時を得て自分の修道院に入る<sup>14</sup>までのある時間のあいだ、精魂こめ清らかな良心とともに自分の両親に仕え、彼らを喜ばせながら暮らした。そして、数年暮らしたのち、彼らは修道士としてこの世の生から神の御もとに旅立った。自分の息子、至福なる若者ヴァルフォロメイを毎日、息を引き取る最後の最後まで多くの祝福の言葉で祝福した。この至福の若者は自分の両親を柩に納めるまで見送り、彼らにたいして埋葬の祈禱歌を歌い上げ、彼らの遺骸をくるみ、大いなる敬虔の念をもって遺骸に接吻し、まるで何かたいへんな価値のある宝物であるかのように、涙に暮れながら柩を送り出し、土を被せた<sup>15</sup>。涙とともに彼は死んだ父と母をパニヒダで敬い、聖なる儀礼歌、祈り、貧者への喜捨、乞食たちのための食卓で自らの両親の記憶を飾った。彼は四〇日の日まで両親の記憶のために暮らした。

ヴァルフォロメイは自らの家にもどると、精神の富で満ちた、何か高価な宝を見つけたかのように魂と心で喜びに浸った。この神に似たる少年その人が修道士としての生活を始めることを大いに望んだのである。彼は自らの両親の逝去のあと家に入り、この世の生活の煩わしさから逃れはじめた。家と家にある生活必需品は彼にとってどうでもいいものとなり、心のなかで「この世の生は多くのため息と悲しみで満ちている<sup>16</sup>」と言っている聖なる書物を思い出していた。預言者は言った。「彼らのさなかから出よ。立ち去れ。汚れたものに触れるな<sup>17</sup>。」ほかの預言者は言った。「地を捨てよ。天に昇れ<sup>18</sup>。」ダビデは言った。「私の魂はあなたにつき従い、あなたは右の御手で私を支えてくださいます<sup>19</sup>。」さらにこう言われている。「私は遠くに逃れ、荒れ野を住処とします。私は私を救いたまう神に望みをつなぎます<sup>20</sup>。」また、主は福音書のなかでこう言った。「私のあとにつき従いたい者は、この世にあるすべてのものを断ち切らないのであれば、それは私の弟子になることはできない<sup>21</sup>」と。少年はこれらの言葉で魂と肉体を強くしながら、自らの

<sup>14</sup> キリルの剃髪場所は、ホチコヴォ神の御母庇護修道院であったが、マリアの剃髪場所は知られていない。

<sup>15</sup> 聖セルギイの両親はホチコヴォ神の御母の庇護修道院に葬られたが、その死がいつであったかはいまだに議論が続いている。ロシア正教会による公的な『セルギイ伝』では、彼の両親が死んだのは1337年であるが、歴史学の著作では1342年となっている。

<sup>16</sup> 出典不明。

<sup>17</sup> 『イザヤ書』52章11節; 『コリントの信徒への手紙二』6章17節。

<sup>18</sup> 出典不明。

<sup>19</sup> 『詩篇』63章9節。

<sup>20</sup> 『詩篇』63篇9節。

<sup>21</sup> 『ルカによる福音書』14章26, 33節に拠る。

肉においての弟のピョートルを呼び寄せ、父の遺産と家にあつた生活に必要なものをすべてそっくり彼に残した。「キリストを得るために私はすべてをゴミだと思いません」と言った神のごとき使徒に倣って、彼その人は何も取らなかった。

生まれのうえの兄であるステファンは、しばらく妻と暮らしたが、その妻は二人の息子、クリメント、イオアンを産んでから死んだ。このイオアンがのちにシーモノフのフェオドル<sup>22</sup>となるのである。ステファンはまもなく現世と別れを告げ、ホチコヴォの聖なる神の御母庇護修道院で修道士となった<sup>23</sup>。聖なる若者ヴァルフォロメイは彼のもとに来て、ステファンが自分とともに荒野の場所を探しに出かけてくれるように頼んだ。ステファンは聖なる人の言葉にしたがひ、旅に出た。

彼らは森中のたくさんの場所を経めぐり、ついにある荒野の場所、水のある森の茂みに行き当たった<sup>24</sup>。彼らはその場所の周囲を歩き回り、その場所が好きになった。何よりもまず神が彼らをその場所に導いたのである。彼らは祈りを奉げ終えると、自分たちの手で木々を切りはじめ、丸太を自分の肩に担いでその場所に運んできた。はじめに彼らは自分たちのために粗末な小屋を建てて屋根を葺き、そのあとで一つの僧坊を定めてごく小さな教会を定礎し、木で教会を建立した。教会の建設がすべて終わり、外装も完成し、教会を聖別するよき時が来たとき、至福の若者はステファンに言った。

兄さんは、生まれと肉による私の兄だけれど、ことに霊においても兄であるのだから、私は兄さんを父親代わりとするべきです。それから、いまや私にとって万事につけ兄さん以外にもものを尋ねることのできる人はいません。だから、私はあなたに懇願しお尋ねします。ご覧の通り教会が建てられ、最終的に完成に至りました。教会を聖別する時が来ました。私に教えてください。どの祝日の名のもとにこの教会の名前がつけられることになるのでしょうか。どの聖人の名のもとに教会は聖別されることになるのでしょうか。

ステファンは彼に答えてこう言った。

<sup>22</sup> スモレンスクのフェオドル、ロストフ大主教。『セルギイ伝』解題と翻訳(1) 脚注10 参照。

<sup>23</sup> モスクワの北東、三位一体セルギイ大修道院からほど遠くないところにある、ホチコヴォの神の御母庇護修道院の縁起の歴史は、議論になる一連の問題を含んでいる。この修道院が誰によっていつ建立されたかについては、統一見解がない。伝統的な見解にしたがえば、その建立は1308年にさかのぼる。別の見解によれば、この修道院は、1334年から1342年のあいだ（クロス）、あるいは、1341年に、セルギイの父キリルによって建立された一家の修道院である。クチキンの見解によれば、ホチコヴォにはもともと教会があって、15世紀の後半に修道院に整備されていった。修道院は最初、男子修道院と女子修道院が併設されていたが、16世紀の初めに女子修道院となった。1610年から1764年のあいだ、この修道院は三位一体セルギイ修道院に登録されていたが、そのあと、独立修道院のステイタスを得た。1922年に閉鎖され、1992年に復活した。現在は、モスクワ州セルギエフ・ポサド地区ホチコヴォ市、聖なる神の御母の庇護のための女子修道院である。

<sup>24</sup> 修道院は、その南端がコンチュラ川に接しているマコヴェツ丘に建立された。

お前は私に何を尋ねるのか。どうして私を試し、私を苛むのか。私に劣らずわかっているのは、自分自身ではないのか。なぜなら、父と母、わたしたちの両親は何度も何度もわたしたちがいるまえでおまえにこう語っていたではないか。いわく「自分を大切にすることがよい。そなたはわたしたちの子ではなく、神の賜物なのだから。なぜなら、神はまだ母親の子宮にいるときにお前をお選びになり、徴をお示しになったのだ。聖なる教会儀礼が歌われているときに、おまえはお腹のなかで3度も教会じゅうに響きわたる声で泣いたのだ。そこに立って泣き声を聞いた人たちはみな驚きに包まれ、恐怖のあまり驚愕してこう言ったものだ。「いったいこの赤子はどんな人になるのだろうか。」しかし、聖職者たち、長老たち、聖なる男たちははっきりとおまえについてある見極めをし、これを解釈してこう言ったのだ。「この赤子に3という数字が現れたのだから、これは、この子がいつの日か聖三位一体の弟子になるということの徴である。自分自身が敬虔に聖三位一体を信仰するばかりではなく、ほかにも多くの人々を教え導き、聖三位一体を信仰するように教えるようになるだろう。」このようなわけだから、おまえはこの教会を何をおいても聖三位一体の名において聖別するがよい。それはわたしたちの思いつきではなく、神の思し召しであり、神の徴の顕れであり、神の選択である。神はそのようにお望みになったのだ。主の御名がとこしえに讃えられますように、と。

ステファンがこう言い終わると、至福の者は心の奥底からため息をつき、こう言った。

主の人よ、兄さんは大胆にも真実を言っただけました。このことは私にも好ましく思えますし、私自身もそう望み、そう考えていました。私の魂は、聖三位一体の名において教会を建立し、それを聖別することを望んでいたのですが、謙抑の気持ちから私は兄さんに伺いを立てたのです。そしてこのとおり、主なる神が私をお見捨てにならず、私の心の望みを叶えてくださり<sup>25</sup>、私の願いを私から奪わなかったのです<sup>26</sup>。

こう言うと、彼らは司祭のところで祝福を受け、聖別のために必要なものをもってきた。町の府主教テオグノストス<sup>27</sup>のところから司祭たちがやってきて聖具、アンチミンス<sup>28</sup>、聖なる殉教者たちの遺骸、それから、教会の聖別のために必要なすべてのものを持ち寄った。かくのごとくし

<sup>25</sup> 『詩篇』38章22節参照。

<sup>26</sup> 『詩篇』21篇3節参照。

<sup>27</sup> 1353年3月11日没。キエフならびに全ルーシ府主教座在位は1328-1353年。ギリシア人。モスクワ、ブリャンスク、ヴォルニニ聖公会において聖人で記念日は3月14日（新暦27日）である。

<sup>28</sup> ギリシア語で「聖卓に代わる物」を表す語で、教会儀礼をおこなう際に用いられる長方形の板のこと。この板は、主教によって署名され聖別され、特別な図柄が描かれ、聖骸の一部が納められている。

て、聖なる三位一体の名において、至聖なる大主教、キエフならびに全ルーシ府主教テオグノストスの祝福を受けて、大公シメオン・イワノヴィチ<sup>29</sup>の治世に教会は聖別されたのである。私が考えるところでは、彼が大公であった最初のころのことである<sup>30</sup>。この教会が聖三位一体の名においてその名称を受けたことは、真実に叶うことだった。なぜなら、この教会は父なる神の恩寵、子なる神の慈悲、聖霊の伴なる御働きによって建立されたからである。

ステファンは教会を建立し聖別してしまうと、少しのあいだだけ自らの弟とともに荒野に住み、荒野に踏みとどまることがいかに困難であるか、それが悲しみに満ちた、厳しい暮らしであること、すべてにおいて窮乏があり、すべてにおいて欠如があることを悟った。彼らはどこからも食べ物も、飲み物も、必要なその他のすべてのものを得ることができなかった。というのも、誰も訪ねてくる者はいなかったし、どこからも何ももってきてもらえなかったからである。なぜなら、荒野の周辺には集落も、家もなく、そこに住む人々もおらず、人がそこに至るために通る道もなく、通行人もおらず、訪問者もなく、その辺り一帯は四方が森であり、ただ荒野だけが広がっていたからである。ステファンはこういうことがわかると意気消沈し、荒野と、それとともに自らの血のつながった弟、いと神に似たる荒野を愛する者、荒野に住む者をあとに残してそこからモスクワに立ち去ったのである。

町に到着すると、ステファンは聖なる神の顕現修道院<sup>31</sup>に居を定め、そこに自分のための僧庵を見つけて住み、熱心に善なる振る舞いに励んだ。なぜなら、困難の多い生活を愛していたからである。彼は自らの僧坊で、齋戒と祈りに没入する厳しい生活を暮らし、すべてにおいて欲を抑え、ビールを飲まず、みすばらしい衣服を身に着けていた。その当時、この修道院には、まだ府主教位に即いていなかった、のちの府主教アレクシイ<sup>32</sup>が住んでいて、すでに敬虔に修道士の暮らしを送っていた。ステファンは彼とともに二人いっしょに魂の生活を送った。それどころか、教会の合唱隊で二人はともに並びたって儀礼歌を歌っていた。同様に、有名で栄えある長老であったゲロンチイなる人物がこの修道院に暮らしていた。大公シメオンはステファンとその善行に満ちた生活を知ると、府主教テオグノストスに命じてステファンを司祭に叙聖し、司祭の位に即けた

<sup>29</sup> 1340年から1353年までモスクワ公にしてウラジーミル大公、1346年から1353年までノヴゴロド公。イワン・カリター公とその最初の公妃エレナの長男。

<sup>30</sup> 教会の建立がシメオン傲慢公の治世とされてはいるが、修道院の建立と教会の聖別は、1330年代なかばから1340年代なかばまでのあいだであると考えられる。神に似たるセルギイの誕生年と剃髪年齢を考える際にも、このことは関係してくる。ロシア正教会が認めているのは1337年であるが、歴史家たちはこれらの事件を1341年以降、ことに1342年（クチキン）、1345年（ブレイチェンコ、アヴェリヤノフ）と考えている。

<sup>31</sup> モスクワの市場裏、あるいは、古着横丁裏の神の顕現男子修道院のこと。1296年に敬虔なる大公ダニール・アレクサンドロヴィチによって創建され、1929年に閉鎖されたが、1991年からは主聖堂が教区教会となった。

<sup>32</sup> 高位聖職者モスクワのアレクシイ（1304?-1378年2月12日）、キエフならびに全ルーシ府主教、国家の為政者、外交官。将来の府主教アレクシイが府主教テオグノストスの代理に任ぜられるのは、1344年以降である。記念日は、2月12日（新暦25日）、5月20日（新暦6月2日、遺骸の発見）、10月5日（18日、モスクワの5人の高位聖職者——ピョートル、アレクシイ、ヨナ、フィリップ、ゲルモゲン——の日）ウラジーミル、モスクワ、サマール教会の聖人。府主教アレクシイについては、『セルギイ伝』において一度ならず登場する。

あとで、この修道院の修道院長の位を授けるように命じ、ステファンを自らの導父とした。すると、千人長ワシーリイ<sup>33</sup>も同様にこない、その弟フェオドル<sup>34</sup>も、そのほかの名だたる大貴族たちも次々と同じように振る舞った。

あらゆる善に恵まれたこの至福の信仰深い若者のことに戻ろう。この若者は、ステファンと同じ母親から生まれた血を分けた弟であった。同じ父親から生まれたとしても、同じ子宮がこの世へと生を授けたにもかかわらず、この若者はステファンと同じ性向をもつ者ではなかった。彼らは生まれの同じ兄弟ではないのか？彼らは心を同じくしてあの場所に暮らす決意したのではなかったか？彼らは二人いっしょに心同じくあの侘しい荒野に居を定めると同意したのではなかったか？いかにして突然彼らは互いに別離したのか？一人はあることを望んだが、もう一人は別のことを望んだのだ。一方は町の修道院で功業に励むことを選び、もう一方は荒野を町のように変貌させたのである。

どうか私の粗野を責めないでほしい。というのも私は、あの方が幼児であった頃、子どもであった頃、修道士になるまえの修練の時代、あの方が世俗に暮らした頃のこと全般について長々と書き、言葉を継いできたからである。けれども、あの方は世俗で暮らしていたとはいえ、魂と願望は神に向かっていたのだ。あの方の生涯を読む者たち、聞く者たちに、あの方がどのような人であったか、あの方が幼年時代、子供の頃から、信仰と清らかな生活とあらゆる善良な事柄で飾られていたことを、私は示したいのだ。それこそが、あの方の事績であり、あの方の歩みだったのだから。そのころ、この福なる賞賛に値する少年は世俗の生活を送っていたが、にもかかわらず神は天から彼のことを見守っていたのであり、彼に自らの恩寵を授け、彼を守り、自らの聖なる天使たちを楯としながら、あの方がどこに行こうと、あらゆる場所、すべての道中で彼をお守りたまっていたのである。なぜなら神は人間の心を知りたまい、ただお一方、心のうちに隠されたものをご存知で、ただお一方、秘せられたものを知りたまい、あの方の身に起こることを予見され、あの方の心に多くの善なる振る舞いが存在すること、愛を激しく求めていることを知りたまい、あの方が神の福で善なる御意志にしたがって選ばれたる器になること、数多くの兄弟たちの修道院長になること、多くの修道院の父になることを予見されていたからである。しかしこのとき、あの方は修道士の位階を受けることを切実に望み、修道士の生活を送り、齋戒と沈黙のなかで暮らすことを痛切に願っていたのである。

#### 修道生活の始まりとなった聖なる方の剃髪について

我らの神に似たる師父ご自身は、修道士としてのもろもろの所作、修道規則、修道士に要求されるすべてのことを学び終えるまで、天使の姿かたち<sup>35</sup>をあえて取らなかった。つねにいついか

<sup>33</sup> 最後のモスクワ千人長ワシーリイ・ワシーリエヴィチ・ヴェリミヤノフのこと。

<sup>34</sup> フョードル・ワシリエヴィチ・ヴォロネツのこと。

<sup>35</sup> 修道士であること。

なるときにも、大いなる熱心さと願望とともに涙を流しながら、天使の姿かたちを取るにふさわしい者になれるように、修道生活を送る人々の仲間に入れるようにと、神に祈りを捧げていた。そして、あの方は先ほど述べた荒野の自分の住まいへと、司祭の位階に飾られ、長司祭の恩寵によって敬われ、修道院長位にあったミトロファンという名の、とある魂の長老を呼び招き、この者に命じ、と同時に地につく深いお辞儀をして懇願し、彼の前で喜びとともに自らの頭を垂れて、この人が自分を剃髪して修道士にしてくれるように願っていた。あの方はこの人にこう言ったものだった。

父よ、憐れみを垂れたまえ。私を剃髪して修道士にしてください。なぜなら、私は幼年時代から、すでに長いあいだ、このことを非常に欲していたのだけれど、両親の面倒を見なければならなかったために、自分の願望を我慢していたからです。いま私はこうしたすべてのことから解放されて、鹿が泉の水に駆け寄るように、私の魂は修道士としての荒野の生活を望んでいるのです<sup>36</sup>。

修道士たちの長はすぐさま教会に入り、彼を剃髪して修道士の位階を授けた。一〇月七日、聖なる殉教者セルギウスとバクスの記念日のことであった。あの方の修道士としての名は、セルギウスと名づけられた。というのも、この当時、世俗の名前とは関係なく、剃髪の受ける者がどの聖人の日に剃髪されたかによって、その聖人の名前がつけられる習慣だったからである。聖なるこの人が剃髪を受けたとき、彼は23歳だった。私が述べたこの教会、セルギイご自身が創建し、聖三位一体の名において名づけた前述のこの教会において、あの修道院長は剃髪とともに神の儀礼をも執り行った。たったいま剃髪を受けたばかりの、頭を剃った至福のセルギイは、我らが主、イエス・キリストのいと清らかなる身体と血による聖なる秘跡に与り、それにふさわしい者としてこのような聖なる儀礼を受けた。この聖なる聖体礼儀のあと、あるいは、聖なる聖体礼儀のさなか、聖霊の恩寵と賜物が彼のうえに降りてそこに根を下ろした。どこからそれが知られたのか。ここにはそのときある人々、すなわち、ほんものの真実の目撃者がたまたまそこにおいて、セルギイが秘跡に与ったとき、教会じゅうに突然、芳香が満ちたことを証言したからである。教会だけではなく、教会の周りでも、よい匂いの芳香が感じられたのである。芳香が立つのを見、かつその芳香を感じた者はみな、自らのお気に入りの者たちを讃えた神を讃えた<sup>37</sup>。

あの方は、その教会とその荒野で剃髪を受けた最初の修道士であり、創業のなかの最初の者でなおかつ思慮において最終の者、数え上げると最初の者でありながらその働きにおいては最後の者であった。つまり、最初の者でありなおかつ最後の者であったと言うべきである。なぜなら、この教会で多くの者たちが剃髪を受けたが、その誰一人として、彼ほどの完成の程度に到達はし

<sup>36</sup> 『詩篇』42章2節。

<sup>37</sup> 『サムエル記上』2章30節。

なかったからであり、同じように功業をはじめはしたが、すべての者がこのような終わりを迎えたわけではなかったからであり、その後、この場所で多くの者たちが彼の存命中、そして彼の亡きあと、彼のもとで修道士として暮らし、真実に彼らはみな善行に励みはしたが、あの方と比肩することのできる者はいなかったからである。あの方はこの場所で最初の修道士であり、まったく最初の功業者であり、ここで暮らすそのほかのすべての修道士たちの手本であった。というのも、彼が剃髪を受けたとき、自らの頭の髪の毛を剃ったばかりではなく、知覚のない髪の毛を失うとともに肉の欲望をすべて切り捨てたのであり、彼が世俗に衣服を脱ぎ捨てたと同時に、衣服とともに肉の欲望も切り捨てたからである。彼こそは、古い人間を脱ぎ捨てて遠ざけ、新しい人間を身に着けた者であり<sup>38</sup>、勇気をもって精神の功業をはじめめる覚悟を固めて自らの腰帯を固く締め、この世をあとにして、この世とこの世にあるすべてのもの、財産、豊かな生活のためのすべての恩恵と絶縁したのである。簡潔に言えば、彼は世俗生活のすべての絆を引きちぎった。鷹が軽やかな翼を真っ直ぐに伸ばし、虚空を高めへと舞い上がるように、神に似たるこの者はこの世とこの世にあるすべてのものを捨て去り、ほかのすべての生活上の恩恵から逃れて、太古の父祖アブラハムのように<sup>39</sup>、自らの家族とすべての近親者と親類縁者、家、祖国を捨てたのである。

至福の人は七日間教会にいて、修道士たちの長の手からもらった聖パン以外何も食わず、すべてのものから遠ざかり、齋戒と祈りに邁進し、唇にはつねにダビデの歌、『詩篇』の言葉を口ずさみ、その言葉で自らを慰め、その言葉で神に感謝を捧げ、沈黙しながら歌い、神に感謝してこう言ったものだった。

主よ。あなたのいます家の美、あなたの栄光の宿るところを私は慕います<sup>40</sup>。主よ、あなたの神殿は、日の続くかぎり、聖所としてふさわしい<sup>41</sup>。万軍の主よ、あなたのいますところは、どれほど愛されていることでしょうか。主の庭を慕って、私の魂は絶え入りそうです。生きてる神に向かって、私の身も心も喜びにあふれます。なぜなら、鳥は住み処を、ツバメは巣を見出しておのが雛を置いています。いかに幸いなことでしょうか。あなたの家に住むことができるなら。まして、永遠にあなたを賛美することができるなら<sup>42</sup>。あなたの庭で過ごす一日は千日にまさる恵みです。主に逆らう者の天幕で長らえるよりは、私の神の門口に立っているのを選びます<sup>43</sup>。

<sup>38</sup> 『エフェソの信徒への手紙』4章22, 24節; 『コロサイの信徒への手紙』3章9-10節参照。

<sup>39</sup> 『創世記』12章1節。「主はアブラハムに言われた。『あなたは生まれ故郷、父の家を離れて私が示す地に行きなさい。』」

<sup>40</sup> 『詩篇』26篇8節。

<sup>41</sup> 『詩篇』93篇5節。

<sup>42</sup> 『詩篇』84篇2-4節。

<sup>43</sup> 『詩篇』84篇5節。

彼を剃髪した修道士たちの長を見送るとき、篤い敬虔の念とともにセルギイはその修道士たちの長にこう言った。

父よ、そなたはいま、謙抑なる私を、私の望み通りたった一人残して、この荒野から立ち去ろうとしておられます。しかし、私は長いあいだ、私の思慮のすべてを傾けて、私の願望をもって、この荒野で私たった一人で、誰一人ほかの人間もなしで暮らすことを望んできたのです。というのは、私はずっとまえから、このことを神に願いをかけ、つねに預言者が叫ぶ声を聞き、預言者のことを思い出しながらこのことを祈っていたのです。預言者はこう仰せでした。「私ははるかに遠く逃れてこの荒野に来た。私は、私を狭量と嵐から救いたまうた神に望みをかけた<sup>44</sup>。」「そして、このゆえに神は私の祈る声に耳を傾け、聞き入れてくださいました。神は祝福すべきかな。神は私の祈りを退けることなく、慈しみを拒まれませんでした<sup>45</sup>。」

そしていま、私の望みとおりの荒野でたった一人暮らすこと、まったくの孤絶のなかにあること、沈黙の行を貫くことを叶えてくださった神に、私はこのゆえに感謝を捧げるのです。父よ、そなたはこの場所からいま立ち去られますが、それに際し謙抑なる私を祝福し、私の孤住のために祈りを捧げてください。そして、この荒野で私がどうしたら一人生きることができるか、どのように神に祈ったらよいか、どうしたら罪なくして生きられるか、悪魔とその傲慢なる思いつきにどう抗ったらよいか、私にお示しください。というのも、私はあらたに我が身を捧げた、剃髪を受けたばかりの駆け出しの修道士であり、このゆえにそなたに相談をしなくてはならないのです。

修道士たちの長はあたかも恐怖に打たれたかのように驚いてこう答えた。

そなたは、そなたがわたしたちに劣らず存じおられることを、私に尋ねておられる。威厳に満ちた頭よ。なんとなれば、そなたはつねにそのように謙抑の手本を我々にお示しになることに慣れておられる。しかし、いま私は言うことにしよう。祈りの言葉で答えるのがいいだろう。その言葉とは、このようなことである。「かつてそなたを選びたいし主なる神が、そなたを憐れみ、そなたを教え諭し、そなたを教え導き、そなたを魂の喜びで満たしてください<sup>46</sup>。」

少しばかり魂のことを彼と話したあとで、この長老は立ち去ろうとした。けれども、神に似たる

<sup>44</sup> 『詩篇』55 篇8-9 節。

<sup>45</sup> 『詩篇』66 篇19-20 節。

<sup>46</sup> 『典礼書（トレブニク）』の聖餐式次第第3 祈祷参照。

セルギイはこの長老は、地につくまで深いお辞儀をして言った。「父よ、私のために神に祈ってください。私が肉の誘惑と悪魔の奸計と獣の襲来と荒野の労働に耐え抜くことを、神がお助けくださいますように。」と。修道士たちの長は答えて言った。「使徒パウロは仰せである。『私たちに力以上の試練をお与えにならない主なる神に栄えあれ<sup>47</sup>。』また、こうも仰せである。『私を強めてくださる神のおかげで私はすべてが可能<sup>48</sup>です。』」このようにしてこの修道士たちの長はあの方を神にお委ねになり、すぐに立ち去った。沈黙の業に励み、孤絶のなかを生きるように、この人一人を荒野に残した。

セルギイは修道士たちの長を見送りながら、いま一度彼から祝福と祈りを乞うた。修道士たちの長は神に似たるセルギイに言った。

私はここから立ち去り、そなたを神に委ね奉る。主なる神は自らの聖なるものを朽ち果てるままにさせておかれ<sup>49</sup>ない。主なる神は、主に従う人に割りあてられた土地に、主に逆らう者の笏が置かれることを許さない<sup>50</sup>。主なる神は、私たちを敵の餌食になさらない<sup>51</sup>。なぜなら、主なる神は正義の人を愛され、主の慈しみに生きる人を見捨てることなく、とこしえに見守られるからである<sup>52</sup>。主なる神は、あなたが出で立つのも帰るのも見守ってください<sup>53</sup>。アーメン。

こう言うと、修道士たちの長は祈りを捧げてあの方を祝福し、彼のもとを立ち去り、もと来た方に帰っていった。

聖者伝を読む者たちに知ってもらいたいことは以下のことである。神に似たるあの方は何歳で剃髪を受けたのかといえば、見た目の年齢は二十歳を超えたくらいではあったが、知恵の鋭さでは百歳を超えていた。なぜなら、彼は身体の年齢では若かったが、魂の知恵においては年経り、神の恩寵によって完全の域に達していたからである。修道士たちの長が立ち去ると、神に似たるセルギイは荒野において一人で功業をはじめ、伴なる人間を一人も伴わずに生きた。彼の労働を誰が物語ることができるだろうか。彼の功業を誰が十分に語るすることができるだろうか。荒野で一人生きることを、あの方がいかに耐え抜いたのか、どれほどの魂の患いととも<sup>54</sup>に生きたのかも、それはわたしたちには物語る事が不可能である。多くの思い煩いを背負って、彼は孤絶の暮らしを一からはじめたのであり、かくも長い時間、かくも長きの歳月にわたり、彼は勇気をもって

<sup>47</sup> 『コリントの信徒への手紙一』10章3節。

<sup>48</sup> 『フィリピの信徒への手紙』4章13節。

<sup>49</sup> 『詩篇』16篇10節; 『使徒言行録』2章27節; 13章35節。

<sup>50</sup> 『詩篇』125篇3節。

<sup>51</sup> 『詩篇』124篇6節。

<sup>52</sup> 『詩篇』37篇28節。

<sup>53</sup> 『詩篇』121篇8節。

この荒野の森のなかで暮らしたのである。彼の堅固なる聖なる魂は、人間の顔というものから隔絶したこの場所で、満たされながら粘り強く耐え、修道生活の規則を咎なく揺るぎなく後ろ指指されることなく守り抜いたのである。

どのような知が思い描くことができるだろう。どのような舌が物語ることができるだろう。あるいは、どのように完璧に描きうるのだろうか。その情熱を、創業の熱意を、その神への愛を、その善行の隠れた功業を、その孤絶を、その果敢なる精神を、その呻きを、神につねに捧げている常なる祈りを、熱い涙を、魂の嘆きを、心からのため息を、徹夜祷を、熱心な祈祷の歌を、絶え間ない祈りを、休みのない起立の祈りを、心をこめた朗唱を、頻繁な跪きを、飢えを、渴きを、大地への倒れ伏しを、魂の飢えを、あらゆることにおける欠乏を、あらゆることにおける不足を。なんと名づけようと、何物もなかったのだ。こういうあらゆることに加えて、悪霊たちとの戦いがあった。見える戦闘、見えざる戦闘、闘いのなかでの取っ組み合い、悪霊たちの恫喝、悪魔たちの誑かし、荒野の怪物、予見できぬ災厄への備え、獣たちとの遭遇と獣たちの悍猛な攻撃。これらすべてを超えることがこれらのあとに起こったのであるが、にもかかわらず、彼の魂は恐怖を知らず、彼の心は怖れを知らなかったし、その知もこのような悪魔の罟や無慈悲な試練や謀に怯えはしなかった。なぜなら、その当時多くの獣たち、吼えたりうなったりする狼の群れ、ときには熊たちが夜となく昼となく彼のもとにやってきた。神に似たるセルギイは、あらゆる人間の例に漏れず少しは恐れたけれども、しかしながら神に熱心に祈りを捧げ、何よりもその祈りによって自らを武装させた。かくのごとくして、神のお慈悲によって、獣たちに危害を加えられずに済んだ。獣たちはあの方から遠ざかり、彼にいかなる危害も加えなかった。なぜなら、この場所を暮らしのできるように整備していたときには、神に似たるセルギイは、悪霊たち、獣たち、蛇カエルの類によって多くの苦難、苦しみを受けていたが、そのどれもが彼に触ることができず、何の害も及ぼすことができなかったからである。なぜなら、神の恩寵が彼を守っていたからである。誰もこのことには驚かない。なぜなら、神が人間において生きておられるとき、聖霊がその人間のうえに安らっているとき、太古において主の戒めを破るまでのアダムがそうであったように、あらゆるものがその人間に従うことを知っているから。まだこの方が荒野でたった一人で住んでいたときのことである。

聖なる人の祈祷によって悪魔たちが追い出されたことについて

こうした日々のなかのある日、神に似たるセルギイが朝課を歌うために真夜中に教会に入った。この人が歌を歌いはじめると、突然、教会の壁が割れて、するとどうだろう、悪魔が大勢の悪霊の軍勢を引き連れて乱入してくるのがはっきりと目に見えた。悪魔はまさに「強盗か盗賊のように扉からは入ってこない<sup>54</sup>」のである。悪魔たちはこの人に、リトアニア人の服装をしてリトアニア人の先の尖った帽子をかぶっているという出で立ちで現れた。彼らはこの至福の人のところ

<sup>54</sup> 『ヨハネによる福音書』10章1節。

に突進し、教会とその場所をその基礎部分に到るまで壊そうとし、至福の人に向かって歯を軋らせながら彼を脅し、彼を恐ろしからせ、彼を殺そうとしてこう言った。

逃げるがよい。ここから立ち去るがよい。これからは、ここ、この場所に住むことは叶うまい。というのは、攻撃を仕掛けたのは俺たちではなく、おまえのほうが決めた領域を侵犯したのだから。お前がここから逃げないというのなら、俺たちがおまえを引き裂くだろう。おまえは俺たちの手のなかで死に、これ以上生きていくことはできないだろう。

というのは、悪魔とその傲慢には、このような習性があるからである。すなわち、誰かに自分の力を自慢したり、誰かを脅したりするときには、大地を殲滅するだの、海を干上がらせるだのと言うものだが、そのくせ自分は豚を思い通りに動かすことさえできないのである。

神に似たるセルギイは神への祈りで身を守りながら、こう言いはじめた。「神よ。誰がそなたに似ているというのでしょうか。沈黙しないでください。黙っていないでください、神よ。ご覧ください。そなたの敵が騒ぎ立っています<sup>55</sup>。」さらにこうも言った。

神は立ち上がり、敵を散らされる。神を憎む者は御前から逃げ去る。煙は吹き払われようとしており、必ず吹き払われだろう。蠟は火のまえに溶けるだろう。神に逆らう者は必ず神の御前にて滅び去る。神にしたがう者は誇らかに喜び歌う<sup>56</sup>。

かくのごとくして、セルギイは三位一体の名において、聖なる神の御母を援助者にして庇護者として仰ぎながら、武器のかわりに神聖なキリストの十字架を掲げながら、ダビデがゴリアテを打ち破ったように、悪魔を打ち負かしたのである。するとたちまち、悪魔は配下の悪霊たちとともに見えなくなって、みんな消えてしまい、なんの痕跡も残さなかった。神に似たる人は、自分を悪魔の奸計から救い出された神に大いなる感謝を捧げた。

多くの日数が経たぬうち、至福の人が自分の小屋でたった一人で休む暇なく徹夜禱をおこなっていると、突然、騒音と、どよめきと、強い唸り声と、轟きと、恐怖を催させる物音が鳴り響いた。それは眠りのなかではなく、現（うつ）で起こったのである。すると、夥しい悪霊たちがふたたび至福の人に群れなして襲いかかり、むやみやたらに喚き立てながら、威嚇してこう言った。

立ち去れ。この場から立ち去るがよい。何を求めて、おまえはこの荒野に足を踏み入れたのか。この場所で何も見つけ出そうというのか。この森のなかに座って何を求めているのか。おまえはここで暮らしはじめようともいうのか。何のために、おまえはここに居を定める

<sup>55</sup> 『詩篇』83 篇2-3 節。

<sup>56</sup> 『詩篇』68 篇2-4 節。

のか。ここに住もうなどとゆめ思うな。なぜなら、おまえは一刻たりともここに留まることはできないからだ。見よ、おまえが見ているとおり、ここはなにもない荒野果てた地、生活の便などまったくない場所なのだから。どちらを向いても人里を遠く離れ、ここを訪れる人間とてまったくない。おまえはほんとうにここで餓死することが怖くないのか。魂を殺す盗賊たちがおまえを見つけて殺すのが怖くないのか。この荒野には、多くの肉食の獣たちが生息している。猛々しい狼たちが吠え、群れになってここにやってくる。多くの悪霊たちがここでは悪さをする。多くの化物や夥しいケダモノがここには現われ、その数は知れない。この場所は太古の昔から荒野のままだ。しかも不便きわまりない。おまえにどんな必要があるというのだ。獣たちがここで襲いかかっておまえを食べてしまったら。そのほかにも、おまえは不慮の恐ろしい無益な死に方をするかもしれない。一刻の猶予もなく立ち上がり、何も考えず、何も疑いをもたず、振り向かず、あたりを見回さず、ここから逃げ去るがよい。俺たちがおまえをもっと手早く追い出したり、殺したりしないで済むように。

神に似たる人は、神への堅い信仰、愛、希望をもっていたので、涙にむせびながら、このような悪霊の奸計から自分を救ってほしいと、敵なる悪魔たちを調伏するための熱心な祈りを捧げた。人間を愛するすばやい助け手、いついかなる時にも憐れみを下さる恵み深い神は、自らの僕が一生懸命に戦いを続け、執拗な攻撃を受けるままにさせてはおかなかった。私が思うに、一時間も経たないうちだと私は思うが、神は自らの憐れみをお示しになった。それは、悪魔たちと悪霊たちがこのことで辱めをこうむるためであり、このことをとおして、神の助けというものがじっさいにあること、それに比して、自分というものは弱いものということ、霊において堅固なるこの神に似たる人は、見ると見えざるとにかかわらず悪霊たちと戦い、しかもその勝利者となったことが、人々の知るところとなるためであった。まもなくなにか突然の天の力が彼を守った。その力は狡猾な霊をすべて、たちどころにして追い散らし、完全にその痕跡をさえ絶ち、この神に似たる人を慰め、何か神々しい歓喜で彼を満たし、彼の心をその魂の甘さで甘くした。この人は、ただちにすばやい援助と憐れみが自分に授けられたこと、神の恩寵があったことを悟り、神にたいして感謝の称賛を捧げてこう言った。

神よ、そなたに感謝します。そなたは私を打ち捨てるままにされなかった。私の声をすばやく聞きつけ、私をお憐れみくださいました。福のためにより徴を私に顕してください。それを見て、私を憎む者は恥に落とされるでしょう。主よ、あなたは私をお助けになり、私を慰められた<sup>57</sup>。主よ、あなたの右の手は力によって輝く。あなたの右の手は敵を、悪霊たちを打ち砕く<sup>58</sup>。あなたの守りの力は、敵たちを最後の最後まで滅ぼされる。

<sup>57</sup> 『詩篇』86 篇17 節。

<sup>58</sup> 『出エジプト記』15 章6 節。

理性をもっているすべての者が、これが狡猾な悪魔の仕業であり、この邪悪な者、信仰の敵対者、悪を引き起こす張本人の企てであることを理解し、自覚するがよい。というのは、悪魔は私たちが救われるのが羨ましくなって、神に似たるセルギイをこの場所から追い立てようとした。また、この神に似たる人が神の恩寵をもってこの荒涼とした場所を高め、修道院を建立することを恐れていた。彼の忍耐、努力、熱心さによって、この荒涼とした場所が一つの村のようになって、多くの人々が住むようになり、一つの街ができるかのように、一つの聖なる修道院がそびえ上がり、神を讃えその称賛を歌う修道士たちのための住処となることを恐れていたのである。キリストの恩寵によってそのとおりのことが起こり、私たちが今日見る姿になったのである。かの神に似たる人は、この大修道院（ラヴラ）のような偉大な修道院をラドネジに建立したばかりではなく、ほかのさまざまな修道院を定礎し、父祖たちの習慣と伝承にしたがって、そのなかに大勢の修道士たちを集めた。

かなり長い時間にわたって、悪魔はさまざまな姿かたちを取って現れては、至福の人と戦いを繰り広げた。配下の悪霊どもと骨を折ったが、すべて無駄だった。悪魔はたくさんのさまざまな幻惑を見せつけたが、にもかかわらず、この魂において堅固な、勇敢な功業者を恐怖に陥れることはできなかった。その後、さまざまな幻惑と恐ろしい夢見のあとで、神に似たるセルギイはもっと勇敢に霊の守りを固め、悪霊たちに戦いを挑み、神の助けを待ち望みながら彼らを大胆に待ち受けて、神の恩寵によって守護され、無傷で生き残った。ときには悪魔の奸計にも威嚇にも邂逅したし、ときとして獣たちの攻撃にも遭遇した。なぜなら、すでに述べたとおり、その当時この荒野には多くの獣たちが生息していたからである。吠え声、叫び声とともに群れをなして徘徊する者もいれば、群れをなさず、二頭、三頭、あるいは、一頭だけで走りすぎる者もいた。遠く離れたところに留まっている者もいれば、至福の人の近くによってきて彼を取り囲み、その匂いを嗅いだりした者もあった。

そうした獣たちのなかでアルクダという名前の一頭の動物がいた。この名前は熊を指す言葉である。この動物は、つねに神に似たる人の傍に近寄る習慣があった。神に似たる人は、この獣が悪意をもって自分のもとに来るのではないことに気づくと、食べ物の中から僅かなものを熊のために取り出すようにした。神に似たる人は、自らの小屋からパンの小さな塊をもってきて、それを熊のまえに置いたり、切り株や丸太のうえに置き、いつものように熊がやってきたら、この獣が自分のために食べ物を見つけ、それを自分の口に入れてから、立ち去ることができるようにしてやった。もしもパンが十分になく、獣がいつものようにやってきて、自分のために用意されたいつもの一切れを見つけないときには、熊はいつまでも立ち去らず、あたりを見回しながら、自分の借金を取り立てようとする容赦ない借金取りか何かのように、じっと待っているのだった。たった一切れしかパンがなく、それが神に似たる人にも必要だった場合には、神に似たる人はその一切れを二つに分け、一つを自分のために取り、もう一つをこの獣に与えるのである。というのは、この当時、荒野にいるセルギイはいろいろな食物はもっておらず、ただパ

ンとそこにあつた泉の水があるだけで、それもごく僅かしかなかったからである。一日分のパンもないこともしばしばであった。そんなときには、二人は、つまり、セルギイ自身と熊とは二人ながら、飢えたままであるのである。聖なる人が自分のことには構わず、自分自身は腹が減ったままであることもときどきあつた。彼のもとには一切れのパンしかなくても、その一切れのパンを彼は獣に投げ与えてしまうのである。自分は食べ物がなくとも、獣をがっかりさせて食べ物を与えずに返すよりも、その日一日飢えたままであることのほうがよかつたのだ。この獣がセルギイのもとに来るのは一度や二度のことではなく、すっかり習慣になっていたが、それは長い間にわたり毎日、何年ものあいだ、こんなことをやってきたのである。

至福の人は、我が身に起こつた誘惑をすべて喜びの念とともに耐え、あらゆることにたいして神に感謝し、苛立ったり、悲しみに打ち沈んだりしなかつた。というのは、この至福の人は、理性と、神への偉大なる信仰を有していたからである。神への信仰によって彼は、敵のすべての燃える矢を消すことができ<sup>59</sup>、その信仰の助けによって神の理性に逆らうあらゆる高慢を打ち倒す<sup>60</sup>ことができ、悪魔によって拵えあげられた奸計を恐れることがなかつた。というのは、「神に従う人は、ライオンのように望みに満ちて歩き、信仰ゆえに大胆に事に挑む<sup>61</sup>」と書かれているからである。神を試すことなく、神に望みをかけていた。まことに「主に依り頼む人は、シオンの山。揺らぐことなく、とこしえに座る<sup>62</sup>」のである。

この至福の人のように、真実に揺らぐことなく主に望みをかける人は、勇敢な兵士ごとくである。霊の力で武装し霊の力を身にまとつた、力あふれる戦士ようになるだろう。彼は神へのつね変わらぬ情熱をもつたのだから、神はこのような人のことを次のように言っているのである。「私は、彼が苦難に襲われるときとともにいて助け、彼に名誉を与えよう。生涯、彼を満ちたらせ、私の救いを彼に見せよう<sup>63</sup>。」弱く怠惰なる者はそのような望みをもつことができない。しかし、自らの偉業のなかでつねに神とともにいる者は、自らの事業の美のおかげで神に近づき、預言者ダビデが「神を待ち望むあまり、目は衰えてしまいました<sup>64</sup>」と言つたように、豊かに揺らぐことなく、自らの心のなかに神の慈愛を湛えるのだ。

神に似たるセルギイは、このような望みを抱き、このような果敢な精神をもって敢然とこの荒野に到り、たった一人孤絶のなかで暮らし、沈黙の行を重ねた。沈黙の神々しい甘さを味わい、この甘さから逸脱したり、この甘さから離れることを望まなかつた。この者は、獣の襲来も、悪霊たちのあやかしも恐れなかつた。それは、「夜、脅かすものをも、昼、飛んでくる矢をも、病をも、闇のなかで襲ってくる災難をも、不幸をも、真昼の悪霊をも、真夜中の悪霊をもそなたは恐れな

<sup>59</sup> 『エフェソの信徒への手紙』6章16節。

<sup>60</sup> 『コリントの信徒への手紙二』10章4-5節。

<sup>61</sup> 『箴言』8章1節。

<sup>62</sup> 『詩篇』125篇1節。

<sup>63</sup> 『詩篇』91篇15-16節。

<sup>64</sup> 『詩篇』69篇4節。

い<sup>65</sup>」とあるとおりである。彼は、森林の恐怖にたいして、『階梯』<sup>66</sup>で次のように言われているとおり、祈りでもって武装した。

そなたが恐れる場所では、祈りなしで通り過ぎて、怠惰に過ごしてはならぬ。祈りで身を堅めるがよい。両手を差し伸ばし、イエスの御名をもって祈り敵を撃て。我らが祈りへとすばやく立ち上がれば、そのときたちまち、福に満ちた我らが守護天使がやってきて、祈りを捧げてくださるのだから。

このように神に似たる者は自らの重荷を主に委ね<sup>67</sup>、神に望みをかけて、高きにおられる神を宿るところに選び<sup>68</sup>、恐ろしきものを見ても恐怖を抱かず、損失を被らず、害を受けずに過ごした。なぜなら、神は人間を愛し、福をもたらす方であり、自らの僕たちにすばやく確かな慰めを与えるからである。聖なる書物が言っているとおり、神はつねに自らのお気に入りの者に恩恵を与え、守護される。主は、自らの天使たちに命じて守らせてくださるのであるが<sup>69</sup>、このようにこの場所で神は、自らの慈愛と恩寵をセルギイにお授けになり、見えるもの、見えざるもの、あらゆる深淵から彼をお守りくださるように、彼をお助けになった。神に似たる者は、神が自らの恩寵によって自分をお守りになっているのを見ると、昼も夜も神を讃え、主に従う人に割り当てられた地に、主に逆らう者の笏が置かれるようにはなさない神<sup>70</sup>、私たちに私たちの力を超えた試練をお与えになることがない神<sup>71</sup>に感謝の称賛を捧げた。

しばしば彼は、あらゆる徳を授かるために聖なる書物を読み、秘められた思いで自らの理性を目覚めさせて、永遠の福を授かりたいという望みを喚起させ、やがて福の宝庫を授かることができると期待に胸はずませるに到った。さらに驚くべきことは、彼の過酷な功業に励む秘められた生活のことは、ひとり神以外の誰も知らなかったことである。神お一方だけがまことに秘められたものをご覧になるだけでなく、秘められたものをお試しになり、隠されたものを眼前に明らかにされ、沈黙の騒乱から離れた生活を望むがゆえにこの人が何を失わなければならなかったかをよくご存知であった。彼には、ただ一方なる神と差し向かいで、頻繁で熱心な秘められた祈りを捧げること、ただお一方なる神と対話すること、遍在される至高の神を熱誠をもって自らのものとする、ただお一方なる神に近づくこと、神から恩寵によって返照されることが、ただひたすらに好ましいことのように思われた。この人は、自分の功業が望まれ、非の打ちどころの

<sup>65</sup> 『詩篇』91 篇5-6 節。

<sup>66</sup> 『神への上昇の階梯』のこと。キリスト教神学者、シナイ修道院の修道院長、シナイのヨハネス（6-7世紀）による禁欲主義的、教導的論文。

<sup>67</sup> 『詩篇』55 篇23 節。

<sup>68</sup> 『詩篇』91 篇1 節。

<sup>69</sup> 『詩篇』91 篇11 節。

<sup>70</sup> 『詩篇』125 篇3 節。

<sup>71</sup> 『コリントの信徒への手紙一』10 章13 節。

ないものであることを願って、このような思いにわが身を委ねたのであり、このために来る日も来る日も真夜中の徹夜禱に情熱をこめて邁進したのであり、たび重なる祈りをつねかわらず神に捧げていたのである。神は、この方の祈りを一度たりとも蔑ろにしたことはなく、慈悲の心もち、際限のないもの惜しみなさで報いた。なぜなら神は、自らを畏れ、自らのご意志をおこなう者たちの祈りを蔑ろにすることは決してなさらないからである。いくばくかの時が過ぎた。それは、あの方が荒野で一人隔絶のなかで暮らしはじめてから二年か、それ以上かそれ以下は私はわからないが、とにかく神のみはご存知である。

この年月のあと、神は彼の大いなる信仰と大いなる忍耐をご覧になって、彼に憐れみを垂れたまい、彼の荒野での労働を楽にしてあげようとなさって、何人かの、神を恐れることを知っている兄弟たちの心に欲求を芽生えさせ、彼らがあの方のもとに来るようになさった。このようなことは、万能の慈悲深い主なる神のお計らいとご叡慮によって起こったのであるが、それは神がこの荒野でセルギイただ一人が生きていくのではなく、数多くの兄弟たちとともにであることをお望みになったからである。それは使徒パウロが次のように述べているとおりである。「私も、人々を救うために、自分の益ではなく多くの人の益を求めている<sup>72</sup>。」こうも言うことができる。神がこの場所とこの荒野を誉れ高いものにするようにお望みになった、修道院が建てられるようにお計らいになり、多くの兄弟たちをお集めになったのである、と。神がお赦しになったので、修道士たちが彼のもとを訪れはじめた。はじめは一人ずつであったが、やがてときには二人ずつとなり、それがときとして三人ずつとなり、あの方に跪拝して頼みこんでこう言った。「父よ、私たちを受け入れてください。私たちはこの場所であなたとともに生き、自分の魂を救いたいです。」

しかしながら、神に似たる人は彼らを受け入れなかったばかりではなく、彼らに反駁してこう言った。「あなたたちは、この場所で暮らすことはできない。飢えと乾き、苦しみ、不便、貧困、欠乏、そういった荒野の重荷を耐えることができない。」彼らは言った。「私たちはこの場所の重荷を耐えていきたいと思っていますのです。もしも神がお望みになるなら、私たちはできるでしょう。」神に似たる人はもう一度、重ねて彼らに訊ねて言った。「あなた達は、この場所での重荷を耐えることができるのか。飢え、乾き、そのほかのあらゆる欠乏を。」彼らは言った。

はい、敬虔なる父よ。私たちはそれをしたいし、できます。神が私たちをお助けくださいます。あなたの祈りが私たちを支えてくださいます。ただ一つだけ、私たちは神に似たるそなたにお願い申し上げます。「あなたの御前から私たちを退けないでください。この望まれた場所から私たちを追い立てないでください。」

神に似たるセルギイは、彼らの信仰と熱心さを見ると、彼らに驚き、彼らに言った。

<sup>72</sup> 『コリントの信徒への手紙一』10章33節。

私はあなた達を追い立てません。それは、私たちの救世主がこう仰せられているからです。私のもとに来る人を、私は決して追い出さない<sup>73</sup>。また、こうも仰せられている。二人または三人が私の名によって集まるところには、私もそのなかにいる<sup>74</sup>。そして、ダビデは言った。「見よ、兄弟がともに座っている。何という喜び、何という恵み<sup>75</sup>。」実のところ、私はこの荒野でひとり暮らし、このままこの場所で生を終えたいのだ。もしも神がそうお望みになるなら、この場所に修道院が建ち、多くの兄弟たちがそこで暮らすようになることを、神がお気に召すなら、主のご意志が実現することだろう。私は喜びの念をもってあなた達を受け入れることにしよう。ただ自分で自分の僧坊を建てるために、めいめいが労働に打ち込むがよい。そのとき、あなた達にはこのことが明らかになるだろう。もしもこの荒野に暮らすために来たのなら、私とこの場所で暮らしたいと望むなら、そなたたちが神に仕えるために来たというのなら、苦しみ、災厄、煩い、あらゆる重労働、困窮、欠乏、無所有、睡眠の恒常的不足に慣れる覚悟が必要である。もしもそなたたちが神に仕えることを欲してここに来たのなら、あらゆる誘惑、あらゆる苦患と悲しみに耐えるために、そなたたちの心を食べ物、飲み物、平安、安全に砕いてはならない。労働、齋戒、魂の功業多くの悲しみに直面することを覚悟しなさい。なぜなら、「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない<sup>76</sup>。」「永遠の生に到る道は狭く、悲しみに満ちている。それを見出す者は多くはない<sup>77</sup>。」「天の王国は力づくで奪われようとしており、激しく襲うものがそれを奪おうとしている<sup>78</sup>。」「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない<sup>79</sup>。」なぜなら、救われる者は少なく、このゆえにキリストの群れは規模が小さいからである。主は福音書でこう仰せられている。「小さな私の群れよ、畏れるな。私の父は、そなたたちに天の王国を与えるように仰せられている。」

至福のセルギイは彼らにこれを言い終わると、喜びと熱意をもって約束してこう言った。「そなたがおおじになったすべてのことを、私たちはやり遂げます。どんなことであろうと、そなたには背きません。」

そして、彼らはおのおの自分のために自分の僧坊を建て、神に似たるセルギイの生活を見、自分の力に依じて彼にまねびながら、神とともに暮らした。神に似たるセルギイは、兄弟たちと暮らしながら、多くの重労働を耐え、大いなる功業をおこない、齋戒の生活を送りつつ汗を流した。彼は厳しい齋戒の生活を生きた。彼の徳とは、以下のものであった。飢え、渇き、徹夜禱、煮炊

<sup>73</sup> 『ヨハネによる福音書』6章37節。

<sup>74</sup> 『マタイによる福音書』18章20節。

<sup>75</sup> 『詩篇』133篇1節。

<sup>76</sup> 『使徒言行録』14章22節。

<sup>77</sup> 『マタイによる福音書』7章14節。

<sup>78</sup> 『マタイによる福音書』11章12節。

<sup>79</sup> 『マタイによる福音書』22章14節。

きしないものを食べることに、地面の上で寝ること、体と魂の清浄さ、口の沈黙、肉体の欲望を徹底的に殺しぬくこと、肉体労働、嘘偽りのない謙遜、絶え間ない祈り、熟慮された分別、完全な愛、衣服の粗末さ、死を覚えること、静けさと穏和さ、神へのつね変わらぬ畏れ、である。なぜなら、「知恵のはじめは、主を恐れること<sup>80</sup>」だからである。それは、花があらゆる漿果とあらゆる果実のはじめであるごとく、あらゆる徳のはじめは神を畏れる心なのである。彼は自らのなかに神への畏れを深く根を下ろさせ、それによって主の掟を守り、「昼も夜も主の教えに学び、水の流れのそばに植えられた果樹のように、己の時が到れば、己が実をつけたのである<sup>81</sup>。」

彼は若く、肉体も頑健だった。彼の体には、二人分の力がみなぎっていたからである。悪魔は欲望の矢を放って彼を打ち負かそうとした。この神に似たる人は、悪魔の攻撃を予感すると、身体を飼いならし、齋戒によって抑えこんで自らの奴隷とし、神の恩寵によって救われたのだった。なぜなら、悪魔の攻撃に武装して身構えることを、彼は覚えこんでいたからである。悪霊が罪の矢を放とうとすると、神に似たる人は、「闇のなかから心の真っ直ぐな人を射ようとする<sup>82</sup>」悪霊たちに向けて清浄の矢を放ったのである。

このように兄弟たちと暮らしていたが、司祭には叙聖されなかった。それでも、司祭たちとともに神の教会のために献身し、毎日兄弟たちとともに教会で、真夜中の祈り、早朝の祈り、3時、6時、9時の時祷、晩の祈り、メフィモン<sup>83</sup>の歌を歌った。それは、「日に7度あなたを賛美します。あなたの正しい裁きゆえに<sup>84</sup>」とあるとおりであった。祈禱と祈禱とのあいだにも、彼は頻繁に祈りを捧げた。なぜなら、教会でも、僧坊でも、絶え間なく神に祈りを捧げるために彼は世俗を去ったからである。それは、パウロの言ったことにならなっていた。「絶えず神に祈りなさい<sup>85</sup>。」けれども、昼の祈りを務めるときには、司祭位にある者、修道院長職にある長老僧など、誰かを傍らから呼び、その人を招き入れて彼に聖なる聖体儀礼を執り行うことを頼むのだった。セルギイ自身ははじめ、大いなる完璧な謙遜の念ゆえに、修道院長職を引き受けることも、司祭に叙聖されることも望まなかった。なぜなら、この人は大いなる柔和さと偉大な真実なる謙遜とを併せもっていたからである。彼はいつも、すべての点において、自らをまねび、自らのあとに続きたいと思う者に、模倣の手本として自らを捧げた、自らの君主にして我らが主、イエス・キリストをまねぼうとしていた。イエス・キリストは、こう言っている。「疲れた者、重荷を負う者は、誰でも私のもとに来なさい。休ませてあげよう。私は柔和で謙遜な者だから、私の軛を背負い、私に

<sup>80</sup> 『詩篇』111 篇10 節; 『箴言』1 篇7 節; 9 篇10 節。

<sup>81</sup> 『詩篇』1 篇2-3 節。

<sup>82</sup> 『詩篇』11 篇2 節。

<sup>83</sup> 原語はギリシア語の「エシモン（私たちとともに）」で、晩の祈り（晩禱）あの、大齋期の最初の週におこなわれる、教会の儀礼。そのあとに、クレタのアンドレイのいわゆる大カノン（カノンの最初の言葉からこう名付けられる）が読まれることになっている。

<sup>84</sup> 『詩篇』119 篇164 節。

<sup>85</sup> 『テサロニケの信徒への手紙一』5 章17 節。

学びなさい<sup>86</sup>。」このような謙遜が原因となって、セルギイは司祭に叙聖されることも、修道院長職を引き受けることも望まなかったのである。というのも、彼はつね日頃、名誉欲のはじまりとその根っこは、修道院長職を望むという位欲しさの気持ちであると言っていたからである。

集まってきた修道士たちは、それほど多いとは言えなかった。その数は12を超えないぐらいだった。彼らのなかには、長老僧ワシーリイ、そのあだ名はスホイ（干からびた）がいた。彼は、ほかの場所から、つまり、ドゥブナ川上流地方から移ってきた人々のなかの一人であった。もう一人はヤコフという名で、通称ヤクト、使節のような役割をしていた。彼は、それなしでは済ませられない、のっぴきならない大切な用事でしばしば使いに出されていた。もう一人は、オニーシイという名で、エリセイという名の輔祭の父親で、同様に司祭であった。僧坊が建てられ、あまり広範囲ではない垣根がめぐらされて、ここに暮らす者のなかから門に門番が据えられた。セルギイ自身も自分の手で僧坊を3つ、4つ建てたうえで、兄弟たちに必要な修道院の仕事もすべてこなした。森から丸太を肩に載せて運び、割ったり、切ったりして薪を作り、それを僧坊ごとに運ぶこともときどきあった。しかしながら、薪の話で、私は何を思い出そうというのだろうか。真に驚くべきことは、その当時、彼らの目のまえにどんな光景が開けていたか、ということである。私たちが見てきたとおり、彼らからほど遠くないところに森があった。すでに建てられていた僧坊のわきに、次々と僧坊が建てられることになるこの場所、いくつかのその僧坊のうえには、その僧坊を取り囲んでごわめきながら、木々が立っていたのである。教会の周りには、到るところにたくさんの丸太や切り株があり、そこに菜園の植物を育てるためにさまざまな種が蒔かれた。しかし、もう一度、まえにはじめた話に戻って、神に似たるセルギイの功業について、すなわち、彼が買われた奴隷のように倦むことなく、兄弟たちのために仕えたことについて話すことにしよう。すでに話してきたように、彼はみんなのための薪を割り、穀粒を搗き、碾き臼で挽き、パンを焼き、食べ物を煮炊きし、兄弟たちに必要な食事を用意した。靴や衣服を裁断し、縫った。そこにあった泉から二つのバケツで水を汲み、両肩に乗せて丘まで運び、僧坊のそれぞれの修道士のもとに配った。

夜には、かの人は眠りもせず祈りを捧げた。パンと水しか口に入れなかったし、そのパンと水もわずかで、暇な時間を一刻たりともつくらなかった。このように彼は厳しい節制と大いなる労働によって、自らの身体を疲れ果てさせた。自らの身体の中の肉の欲求は、まったく気にしないで過ごした。そしてふたたび、この功業にさらに大きな功業を増し加え、この場所で暮らす人々のために奔走したが、自分の労働が神に気に入られることだけを望んでいた。彼は何をするのであろうと、詩篇をつねに口ずさんでいた。その詩篇には、「私はつねに主に相對しています。主は右にいまし、私は揺らぐことがありません<sup>87</sup>」と言われているからである。このように彼は祈祷と労働のなかにあり、自らの肉を憔悴させ、すっかり干からびさせ、天の町の市民になりたい、よ

<sup>86</sup> 『マタイによる福音書』11章28-29節。

<sup>87</sup> 『詩篇』16篇8節。

り高いエルサレムの住人になりたいと望んでいた。

一年が経ち、至福のセルギイを剃髪した、先に名前を出した修道院長は病気になり、しばらく病の床についたのち、この世から去り、主のもとに旅立った。神に似たるセルギイはひどく悲しみ、神に祈った。神がこの場所に、教導者であり父であり統括者である修道院長を、安らぎに満ちた生の魂の船を、悪しき霊に苛まれた波間へと難破することから守りながら、救済の船着き場へ導いてくれる修道院長を与えてくださいますようにという切なる祈りを捧げた。そして、セルギイが神に祈りを捧げ、修道院長を、真実の統括者をこの場に与えてくださいと願うと、「主は自らのお気に入りの者の願いを聞き入れ、主はその願いを聞き届けてくださった<sup>88</sup>。」「主を畏れる人々の望みをかなえ、彼らの祈りを聞き入れ、彼らをお救いくださいます」と言ったダビデを嘘つきにしないためである。主は、修道院長を求めたその求める人を、正しき統括者、修道院長として与えることをお望みになった。セルギイが望んだように、セルギイは受けとり、見出し、この場所を統括することができる、正しき統括者を真実に手に入れたのである。ただし、セルギイは自分自身を求めたのではなかった。神が望むほかの誰かを求めたのだった。すべてを見そなわす神が未来を見通し、この場所を高め、この場所をめたく調べ、褒め称えることをお望みになったとき、彼よりもよい人がほかに誰もいなかった。まさに望んだ人その人をお与えになった。というのは、自らの聖なる御名の誉れのなかで、セルギイがこの修道院を統括することができると神はご存知だったからである。

それでは、どのように、どんなふうセルギイの修道院長時代がはじまったのだろうか。神は、セルギイを頂上の長に任じようとする欲求を彼の兄弟たちの心に吹きこまれた。ある思慮が兄弟たちの心に入り、彼らは集まってははじめに自分たちで、互いに話し合う場をもった。そして、そのあと、揺るぎない信仰に支えられて彼らはいっしょに神に似たるセルギイのもとに行き、こう言った。

父よ。わたしたちは修道院長なしに生きることはできません。そしていま、私たちはあなたのもとを訪れ、私たちの考えと願望を明かします。あなたに私たちの修道院長にして、私たちの魂と身体の教導者になっていただくことを、私たちは心から望みます。それは、私たちが自分の罪を告悔するために悔い改めの気持ちとともにあなたのもとに行くことができるようにするためです。それは、私たちが毎日、あなたから赦しと祝福と祈りを授かり、あなたが毎日聖なる聖体礼儀をおこなうことを見るためです。それは、その度ごとにそなたの敬虔なる手から、いと清らかなる秘跡、聖体を授かることができるためです。

神に似たるセルギイは魂の奥底からため息をつき、彼らに言った。「私には、修道院長になりたいと望む気持ちがまったくないのだ。私の魂はこの場所でこのまま一人の修道士として最期を

<sup>88</sup> 『詩篇』6 篇10 節。

迎えることを望むだけだ。しかるに、そなたたちは私に無理強いをしないでほしい。私は神に委ねてほしいのだ。神は私の身について、神がお望みになることをなさる。」彼らは言った。「父よ、私たちはあなたが私たちの修道院長になることを望みました。しかるに、そなたはお断りになった。私たちはあなたに申し上げます。ご自身が修道院長になるか、それとも、主教のところへ赴き、私たちのために修道院長を与えてくださるように願い出てください。もしもあなたがそのようなならなかったら、私たちは困窮のためにこの場所から四散してしまいます。」神に似たるセルギイはふたたび心の底からひどく呻きながら、こう言った。「それではいまは解散して、めいめいが自分の僧坊に戻るがよい。みなが熱誠こめて神に祈ろう。神が我らに何をなすべきか、示したまうように。」彼らはめいめいが自分の僧坊に戻った。

何日かが経ったあと、兄弟たちはふたたび神に似たるセルギイのもとを訪れてこう言った。

父よ、私たちがこの場所に来たのは、あなたについて、あなたの栄えある功業のはじまりである、あなたご自身の手で聖三位一体の恩寵を得てお建てになった教会の定礎についての風聞に接し、私たちは三位一体のもとに駆けつけ、あなたのご指導のもとで三位一体に私たちの希望と望みをかけてきたのです。ですから、いまこのときから、あなたは私たちの父であり、修道院長になってください。あなたは聖三位一体の玉座のまえに立ち、セラフィムのいと聖なる歌を神に捧げ、無血の務めをなさり、御自らの手で私たちに我らが主イエス・キリストのいと聖なる身体と神の血をお授けになり、私たちの老齢をお慰めになり、私たちを柩へと引き渡してください。

師父セルギイは長いあいだ拒みつけ、これを望まず、彼らを慰め、懇願し、こう言った。

我が師父にして我が主人たちよ、私を赦してください。天使たちが恐れと恐怖を抱いて触れることさえできなかったものを、敢えて手に入れてしまうとは、私は一体何者なのでしょう。それにふさわしくない私は、そのような際に達することさえできないのに、そんなに厚かましくなれるというのでしょうか。私は、修道規則と修道生活の始まりにさえたどり着いていません。それなのに、どうやって私はこのような聖なる地位に昇ることが、いや、それに触れることができるのでしょうか。私にできることは、自分の罪を泣き、あなた達の祈りによって、私が若い頃から到達しようと望んでいた国にたどり着くという恵みに与ることだけです。

このことと、ほかの多くのことを彼らに言って、彼は自分の僧坊に立ち去った。

めでたき長老僧たちは何日かあとに再びやってきて彼と話しはじめ、すでに何度も言ってきたこととほかの多くのことを話したあと、こう言った。

魂の父よ、私たちはもう何ごともあなたと言い争うことはいたしません。神がお導きくださったので、私たちはこの場所のそなたのもとに参りました。そなたの生活とめでたき徳とをまねびたかったのです。未来の福によって心楽しむことを心から期待していたのです。もしもそなたが私たちの魂のことに心を砕いてくださらず、言葉の羊である私たちの牧者になってくださらないなら、私たちはこの場所から、聖三位一体の聖堂から立ち去り、心ならずも私たちの誓いを破りましょう。私たちは牧者をもたぬ羊の群れのように、傲慢の山、分かれ道に迷い、愚かな考えに身を任せ、思いの獣、すなわち、悪魔に打ち負かされるでしょう。そなたは、公平無比の裁き手である全能の神のまえで返答をすることになるでしょう。

兄弟たちはこのように言い、懲罰で恐ろしがらせ、威嚇で脅した。というのは、これ以前に何日にもわたって何度も兄弟たちは彼に懇願してきた。謙遜によって、柔和によって、懐柔によって、ときには脅しによって、残酷な言葉によって無理強いしながら、憤りながら脅しつけた。だが、魂において堅固なる、信仰において揺るぎなく、知において謙遜なる彼は、懐柔に身を任せることなく、脅しに畏れることなく、威嚇よりより高き男であった。

長いあいだ、兄弟たちは彼に修道院長職を受けてくれるように無理強いしたが、理性において謙遜な彼は修道院長職を受けようとせず、子供の頃から彼の持ち前の性格であった神に見習う謙遜を捨て去ろうとはしなかった。自分のことを罪深くそれにふさわしくないと呼びながら、彼は彼らの懇願をはねつけ、極めつけに次のように言った。

私の言葉はあなた方の言葉とは、交わることはない。なぜなら、あなた方はあまりにも頑強に私に修道院長職を受けるように無理強いしてきたし、私は私であまりにも頑強にそれを拒みつづけている。なぜなら、私自身が教えを乞いたい、他者を教えるよりも学びたいと思っているし、私は他者にたいして君臨し、指導するよりも、他者に服従したいと望んでいるからだ。だが、私は神の裁きを畏れる。もしも、そなたたちが私に命じることを神がお望みならば、主の御心がおこなわれますように<sup>89</sup>。

しかしながら、自らの仁慈あふれる兄弟愛、自らの熱誠と努力に負けるかたちで、彼はようやく彼らの懇願を聞き入れ、彼らの望みを実行に移すことを約束した。彼らの意志に、いやもつと正確に言えば、神の意志に屈服したのである。そして、これらすべてのことのあとに、神に似たるセルギイは心の奥底から呻きを発し、すべての思いと望みをすべてを統べる神に預け、魂の謙遜とともに彼らに言った。「父たちと兄弟たちよ。あなた達に歯向かうようなことを一切言いません。主の意志に従いましょう。なぜなら、神は人々の心と考えをご存知なのだから。町の主教のところに行きましょう。」

<sup>89</sup> 『使徒言行録』21章14節。

全ルーシ府主教アレクシイは、そのとき、ツァリグラードにおり、ペレヤスラヴリの町に自分の代わりにヴォルイニ主教アフナーシイ<sup>90</sup>を残していた。神に似たる我が師父セルギイは、自分とともに二人の長老僧を連れて、アフナーシイのもとにやってきて、中にはいと主教のまえで跪拝をした。主教アフナーシエフはそれを見ると、彼を祝福してその名前を聞いた。彼は自分の名前をセルギイであると名乗った。アフナーシイはこれを聞いて喜び、キリスト教徒の慣習にしたがって接吻した。なぜなら、彼は以前からこの人について、栄えある彼の功業のはじまりについて、教会の建立について、修道院の創設について、神のお気に召したすべての所業、兄弟への愛と彼らへの献身について、多くの善行について耳にしていたからである。そして、主教はセルギイと魂のさまざまなことについて会話を交わした。彼らが談笑を終えると、至福の我が師父セルギイはふたたび主教のまえで跪拝した。

我が至福の師父セルギイは、この高位聖職者が修道院長を、彼らの魂の教導者を授けるように頼んだ。神に似たるアフナーシイは聖霊に満たされてこう言った。

いと愛されたる者よ。神は聖霊によりダビデの口を通してこう言われた。「私は彼を民のなかから選んで高く上げた<sup>91</sup>。」また、「私の手は彼を固く支え、私の腕は彼に勇気を与えるであろう<sup>92</sup>。」使徒パウロはこう言った。「この光栄ある任務を誰も自分で得るのではなく、神から召されて受けるのです<sup>93</sup>。」息子にして兄弟よ、神はそなたが母の子宮にいるときにそなたを呼ばれた。それは多くに人々からそなたについて私が聞いたことだ。いまからそなたは、三位一体修道院において神に選ばれたる兄弟たちの父にして修道院長になるがよい。

神に選ばれたるセルギイが固辞して自分が修道院長職にふさわしくないことを縷縷と述べているあいだ、聖霊の恩寵が降りてアフナーシイはこう言った。「いと愛されたる者よ。そなたはすべてを持ち合わせている。それなのに、言うことを聞こうとしない。」我が師父セルギイは跪拝して答えた。「主は与え、主は奪う。主の御名は褒め称えられんことを<sup>94</sup>。」みなは言った。「アーメン」と。

間髪をいれず聖なる主教アフナーシイが聖職者たちに聖なる祭壇に入るように命じ、その人

<sup>90</sup> 府主教アレクシイは、1353年から54年にかけてコンスタンティノーブルに滞在してそこで府主教の叙聖を受けた。モスクワ府主教座の諸業務を統括していたのは、1328年に主教の叙聖を受けた、ヴォルイニのウラジーミル主教アフナーシイであった（1362年没）。このことから、セルギイの修道院長への叙聖は、1353年から1354年にかけてであったことがわかる。この点は疑う余地がないが、細かい点で諸研究者の見解は異なっている。クチキンが1353年の夏から秋にかけて、ブレイチェンコは1353年の秋、アヴェリヤノフは1354年春から秋にかけて、クロス、ボリソフは1354年のこととしている。

<sup>91</sup> 『詩篇』89篇20節。

<sup>92</sup> 『詩篇』89篇22節。

<sup>93</sup> 『ヘブライ人への手紙』5章4節。

<sup>94</sup> 『ヨブ記』1章21節。

自身がセルギイの手を取って聖なる教会に入ることを急いだ。アフナーシーは高位聖職者の祭服を着ると、至福のセルギイの手を取ってセルギイに、「我、唯一なる神を信ず」にはじまる聖なる信仰箇条を述べるように命じた。それが終わったあと、セルギイは頭を垂れ、祭司は彼に十字を切り、聖職への叙聖の祈りを捧げ、彼をまず副輔祭に任じ、そのあと輔祭に任じ、聖体礼儀をおこない、それとともに彼らは我らが主イエス・キリストの神々しき身体と血に与った。翌日主教はセルギイを司祭の位に叙聖し、そのあとセルギイに聖なる聖体儀礼を執り行い、自分の手で無血の捧げものをおこなうように命じた。神に似たる師父セルギイは、自分に命ぜられたことを恐怖と魂の喜びに満たされて執り行った。

主教アフナーシーは彼一人の手を取り、使徒の規則と、魂の救済と矯正のために必要な教父の教えについて彼と会話を交わしてこう言った。

いと愛されたる者よ、使徒にしたがえば、「強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。各々善行をおこなって隣人を喜ばせるべきです<sup>95</sup>。」そして、テモテへの手紙のなかで、使徒はこう書いています。「ほかの人々にも教えることができる忠実な人たちに委ねなさい<sup>96</sup>。」また、さらにこう言っています。「たがいに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです<sup>97</sup>。」「これをしさえすれば、あなたは自分自身と、あなたとともにいる人々を救うことになります<sup>98</sup>。」

こう言うと、主教は魂の賜物をセルギイに贈り、キリスト教徒の慣例にしたがって彼に接吻し、彼を、真実の修道院長を、牧者を、見張りを、魂の兄弟団の医師を行かせた。

これは神に愛されたその気性にかかわらずにおこなわれたことではなく、神のご配慮なしに起こったでもなかった。というのは、セルギイは自分の意志によらずに修道院長職を受けたからである。人々の長たる立場は、神によって任されたものであった。というのも、彼はそうした地位を入れようと奔走したことはなく、誰からもその地位を奪い取ったわけでもなく、この地位のために空約束をしたこともなく、位を欲しがらる人々がよくやるように、聖書もわからないのに、あっちこっちの人々のあいだをくるくる飛び回って、賄賂をわたしたこともなかった。聖書にはこう書かれている。『それは、人の意志や努力ではなく、神の憐れみによるのです<sup>99</sup>。』『よい贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父からくるのです<sup>100</sup>。』であるから、神の軍勢の総司令官の地位は、勇敢な魂の軍勢のような数多くの修道士たちを、みなのご主人さまであ

<sup>95</sup> 『ローマの信徒への手紙』15章1-2節。

<sup>96</sup> 『テモテへの手紙二』2章2節。

<sup>97</sup> 『ガラテアの信徒への手紙』6章2節。

<sup>98</sup> 『テモテへの手紙一』4章16節。

<sup>99</sup> 『ローマ人の信徒への手紙』9章16節。

<sup>100</sup> 『ヤコブの手紙』1章17節。

る神のためにセルギイが率いなければならなかったここ、この場所で、セルギイに委ねられたのである。自らの生活の清らかさゆえに、彼はこのような恩寵にふさわしいのだから、彼は修道院長の地位にふさわしく、信徒たち、言葉の羊たちの群れの牧者にふさわしく、聖なる修道院長となったのである。なぜなら、神が自らのお気に入りの者を修道院長位に導かれたからである。

#### 聖なる人の修道院長時代の始まりについて

神に似たる我が父セルギイは、自らの修道院、聖三位一体の住処に到着した。兄弟たちは彼を出迎え、彼に向かって地に着くほど深いお辞儀をして喜びに満たされた。彼の人は教会に入ると倒れて地面に顔を伏せ、涙にむせびながら目には見えぬ天帝へと祈りを捧げ、聖三位一体のイコンの方を見て、助けを求めて聖なる神の御母の御名を呼び、イエス・キリストの天なる力の玉座の奉仕者である先駆者洗礼者ヨハネ、賢き使徒たち、彼らとともに最初の聖職者たち、大ワシレオス、神学者グレゴリオス、金口ヨハネスとすべての聖者たちに呼びかけた。セルギイ尊師は全能者の右手に、全能者が彼らの祈りによって、生命の源なる三位一体の誉れの玉座において立ち上がり、両手で神の子羊、平和のために刺し貫かれた神の御子なるキリストに触れる不動の勇気を与えてくださることを願ったのである。

至福の人は主の言葉をもって兄弟たちに話しはじめた。

兄弟たちよ、狭き門から入るように励むがよい<sup>101</sup>。天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている<sup>102</sup>。パウロはガラテヤの信徒たちに言っております。「霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、柔和、節制です<sup>103</sup>。」ダビデは言いました。「子らよ、私に聞き従え。主を畏れることを教えよう。」

そして、セルギイは兄弟たちを祝福し、彼らに言った。

兄弟たちよ、私のために祈ってください。なぜなら、私は無知と無理解ではち切れそうだからです。私は高き天の皇帝よりタラントンを受け取りました。このタラントンのために私は、言葉の羊の群れのために働くという約束を天帝にしなくてはならない。危惧の念が私を恐怖に陥れるのです。それは主によって述べられたお言葉です。「私を信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首にかけられて深い海に沈められたほうがましである<sup>104</sup>。」自らの無理解により多くの魂を溺れさせる者は、そのような者よりもはるかに悪いでしょう。思い切って私はこう言うことができるでしょうか。「主よ、これが私と主

<sup>101</sup> 『ルカによる福音書』13章24節；『マタイによる福音書』7章13節。

<sup>102</sup> 『マタイによる福音書』11章12節。

<sup>103</sup> 『ガラテヤの信徒への手紙』5章22-23節。

<sup>104</sup> 『マタイによる福音書』18章6節。

が私に委ねられた子らです<sup>105</sup>」と。私は、天上の者たちと下界の者たちの牧者、偉大なる主のこの神々しい御声を聞いているのでしょうか。その声は慈悲深くこうおっしゃっているのです。「忠実なよい僕よ、自らの主の喜びのなかに入るがよい<sup>106</sup>。」と。

彼はこう言い終えると、心のなかで、この地上に肉において生きながら天使の生活を送った偉大なる巨星たち、すなわち、大アントニオス、大エウフィミオス、聖化されたサツヴァ、天使に等しいパコミオス、共住修道制の創始者、テオドシオス、そのほかの者たちのことを考えた。至福の人は、彼らの生涯とその暮らしぶりに驚いていた。彼らは肉の生まれでありながら、肉体のかたちを取らぬ悪魔たちに勝利し、天使たちにそっくりとなり、悪魔を恐ろしがらせた。皇帝たちも人々も彼らのところにやってきては驚きを覚え、病人たちをさまざまな病気から療治した。彼らは災厄のなかにあつて熱心な治癒者であり、死からのすばやい守り手であり、陸においても海においても道中を樂にし、欠乏する者たちに豊かに与え、乞食を養い、寡婦や孤児にとっては枯渴することのない宝物庫であったが、それは神の如き使徒が「私たちは無一文ですが、すべてを所有しています<sup>107</sup>」と言っているのと符合していた。彼らの暮らしぶりを心のなかで思い浮かべながら、至福の人は聖三位一体に祈りを捧げ、これらの神に似たる師父たちの足跡を脇道にそれることなくたどることを誓った。

毎日彼は神の聖体礼儀を執り行い、全世界が平穩無事であること、聖なる教会が揺るぎないことを願い、正教の皇帝たちと公たち、あらゆる正教のキリスト教徒たちについて、朝の祈祷、晩の祈祷を何の困難もなく勤めあげた。彼は兄弟たちにこう言った。

偉大なる功業が私たちを待ち構えています。私たちは目に見えない悪魔たちと戦わなくてはなりません。なぜなら、悪魔は、吠え立てるライオンが歩き回るように、一人ひとりの人間を一呑みにしようとしています<sup>108</sup>。

彼は少ない言葉を言って兄弟たちを教え導いたが、自身が自らの行動によって手本を示すことのほうがはるかに多かった。

誰が彼の生涯の善行を、彼の魂のなかで花開いた恩寵を、真実のとおり物語ることができようか。彼は聖三位一体の力によって強められながら、もっと力強く自らを武装して敵なる悪魔の力と闘ったのである。何度も悪魔は彼を恐ろしがらせようと、獣たちや蛇に姿を変えた。そして、僧坊のなかであろうと、至福の人が森のなかで修道院で使用する薪を集めているときであろうと、悪魔は突然さまざまな邪悪な姿を取って彼の目の前にありありと現れて、彼の考えを祈りやその

<sup>105</sup> 『イザヤ書』8章18節。

<sup>106</sup> 『マタイによる福音書』25章21, 23節。

<sup>107</sup> 『コリントの信徒への手紙二』6章10節。

<sup>108</sup> 『ペトロの手紙一』5章8節。

善なる労働から逸らせようとやっきになるのである。神を宿したる我が父セルギイは十字架の力によって武装しながら、悪魔の誘惑と罠をまるで煙を吹き払うように吹き払い、まるで蜘蛛の巣を引きちぎるように引きちぎってしまうのだが、心のなかには主によって述べられた福音書の言葉があった。「見るがよい。私はあなたがたに、蛇、サソリ、あらゆる悪魔の力を踏みつけにする威力を授けた<sup>109</sup>。」

この方が修道士たちの長となった当初、兄弟たちは一三人目の修道院長を含めず、一二人の修道士たちであった。そして、この数一二は彼らにおいて変わらなかった。その当時、二年か三年かこのように暮らしていたが、その数は増えもしなかったし、減りもしなかった。彼らのうちの誰かが死んだり、修道院から出たりすると、ほかの兄弟がふたたびやってきて、その数は減ずることはなかった。しかしながら、彼らは変わることなく一二人という数であったために、このことについてある人々はこんなことを言ったものである。

これは何を意味するのか<sup>110</sup>。あるいは、この場所で修道士がつねに一二人であるというのは、一二人の使徒と何か関係があるのではないか。なぜなら、こう書かれているからである。主は自らの弟子たちを呼んでそのなかから一二人を選び、使徒と名づけた<sup>111</sup>。あるいは、イスラエル一二氏族と関係するのかもしれないし、一二の泉<sup>112</sup>と関わりがあるのかもしれない。あるいは、アロンの祭司の祭服にあった選びぬかれた一二の宝石の数によるのかもしれない<sup>113</sup>。

彼らのもとをスモレンスクの掌院シモン<sup>114</sup>が訪れるまで、彼らはこのように暮らし、一二という数は崩れはしなかった。シモンが来る頃から、シモンが来たその日から、兄弟たちはますます増えていき、すでに一二人よりはるかに多い数になっていった。

ここで名前を挙げたシモンについて私たちはここで短く言及したが、怠けることなくこの人についてもっと詳しく物語ることにしよう。彼についての記憶が消えてしまわない限りは、彼についての物語は彼を有名にするだろうから。彼の善行についてはもう少し後で明らかにすることにしよう。

この驚くべき男シモンは、経験豊かな栄えある名のある、こう言ったほうがよいのだが、善行

<sup>109</sup> 『ルカによる福音書』10章19節。

<sup>110</sup> 『使徒言行録』5章24節。

<sup>111</sup> 『ルカによる福音書』6章13節。

<sup>112</sup> 『出エジプト記』15章27節。

<sup>113</sup> 『出エジプト記』28章15-21節; 39章8-14節。

<sup>114</sup> スモレンスク、スミヤドゥイニのボリス、グレーブ修道院の掌院シモンのことと考えられる。クチキンによれば、彼が三位一体修道院にやってきたのは、静謐な環境のなかで生涯の最後の日々を送りたいと考えたからである。その当時、スモレンスクはリトアニアの攻撃を受けて情勢は不穏であった。シモンは、セルギイが神の幻視を経験したとき、その場に居合わせた。

を積んだ大修道院長であった。彼はスモレンスクの町に住んでいた。そこで、彼は我らが神に似たる師父セルギイの暮らしについて耳にして、魂と心が炎と燃えて、大修道院長の職を辞し、名誉と誉を打ち捨て、栄えある町スモレンスクをあとにして、スモレンスクの町とともに故郷、友人、家族、親族、あらゆる知己、親類縁者と別れを告げて、謙抑の身なりを取り、巡礼の旅に出ることを決心した。その地、地の果ての遠き国スモレンスクから、モスクワの近郷、まさにラドネジに向かった。彼は、我らが神に似たる師父にして修道士たちの長であるセルギイの修道院に到着し、大いなる謙抑の念とともに、セルギイが自分を、その堅固な腕のもとで服従と従順のなかで生きることができるよう、受け入れてほしいと懇願した。さらに彼は財産を携えてきており、それを修道院の建設整備のために使うよう修道院長に差し出した。神に似たるセルギイは喜びの念とともに彼を受け入れた。シモンは永の年月のあいだ、服従と従順のうちに、ことに巡礼と謙抑のなかで暮らし、あらゆる善行で満たされていたが、高齢となり人間誰しもそうなることだが、神の御もとに召された。修道士たちの長セルギイは、彼を棺まで導き、兄弟たちとともに尊敬の気持ちとともに葬った。かくのごとくして、彼は永遠の記憶に値するものとなったのである。

#### ステファンの息子イワンについて

ステファンというのは、セルギイの生みの兄であったが、小イワンという自分の年少の息子を伴ってモスクワの町からやってきた。教会に入ると、自分の息子の右手を取り、彼を修道院長であるセルギイにわたし、剃髪を受けて修道士の位階を受けるように命じた。修道院長のセルギイは彼を剃髪し、修道士としての名前、フェオドルを与えた。修道士たちはこれを見てステファンの信仰に驚いた。というのも、彼は自分の息子である少年を惜しいと思わず修道士にしたからであるが、その実、幼少の頃からその息子を、アブラハムが太古の昔に自らの息子のイサクを惜しいと思わなかったように、神に捧げていたのである。フェオドルは幼少のみぎりより、自らの伯父のところ学んだとおりに、齋戒生活のなかで、あらゆる敬虔さと清らかさのうちで養育されており、成人男子の年齢になるまでには、修道士としての善行に満ち溢れてそれらに飾られていた。一〇歳のときに彼は剃髪を受けたという者もいれば、一二歳のときに剃髪を受けたという者もある。このほかの彼の事績にかんしては、また別の機会に書かれるであろう。というのは、そのような物語は別の時を必要とするからである。いまの物語を中断しないために、私たちは私たちの物語に戻らなくてはならない。

さまざまな町、さまざまな場所から、多くの人々が彼のもとにやってきて、彼とともに生きた。命の書には、彼らの名前がある。このように修道院は少しずつ大きくなり、兄弟たちも増え、僧坊が建てられていた。神に似たるセルギイは、兄弟たちが増えつつあるのを見ると、自らも労働に労働を重ねて、自分の群れの手本となった。それは使徒ペテロが言ったとおりでである。「神の羊の群れを牧しなさい、強制されてではなく、自ら進んで世話をし、群れの手本となりなさい」

い<sup>115</sup>。」また、聖なる師父たちの本、すなわち、聖者列伝にもさらにこう書かれている。「聖なる師父たちは集まって最後の世代について預言し、最後の世代は弱くなるだろうと言った<sup>116</sup>。」神は自らのために最後の世代においてセルギイを、太古の聖なる父祖たちの一人のように強めた。神はセルギイを働き手、多くの修道士たちの教導者、数多い兄弟たちの修道院長にして指導者としたのである。

さらに付け加えるべきことがある。誰がこのようなことを予期できたであろうか。すなわち、この場所は、うさぎ、狐、狼、そして、時には熊が徘徊し、場合によっては悪霊たちが跳梁する森であり、密林であり、荒野であったが、その場所にいまや教会が建てられており、偉大なる修道院がそびえ立とうとしており、多くの修道士たちが集まり、教会のなかで、僧坊で、神への称賛と神への祈りが絶え間なくおこなわれようとしていた。これらすべてのことの始まりであり、その原因であったのが、私たちの神に似たる師父セルギイなのである。主は自らの神に似たる者を驚かすと知れ<sup>117</sup>。セルギイは修道院長に立てられると、毎日聖なる聖体儀礼をおこなったのであるが、プロスフォル（聖パン）は自分自身が焼いた。まずはじめに、小麦を挽いて細かくしてから、篩いにかけて、粉を捏ねて生地を作り、発酵させる。このようにして自らの正義の仕事によって神に仕えつつ聖パンを焼き、この仕事をほかの誰にも譲らなかつた。兄弟たちの多くの者たちが聖パンを焼きたかつたのだが、神に似たる人は懸命に教え手となり、作り手となろうとした。自分自身が蜜飯<sup>118</sup>を炊き、捏ねてろうそくを作り、カヌンを作った。

神に似たる我が師、修道院長セルギイは、最高位の修道院長職を受けてはいたが、しかしながら、自らの一介の修道士としての規則を枉げることにはなかつた。それは、「一番先になりたい者は、すべての人のあとになり、すべての人に仕える者となりなさい<sup>119</sup>」とおっしゃった方を覚えていたからである。救い主のこの教訓に向き合い、彼は自らを低め、あらゆる人間の下に自らを置き、自分がすべての者たちの手本となり、誰よりも先に仕事に出てゆき、教会の祈祷歌朗唱においても誰よりも先に現れ、壁にもたれかかることは決してなかつた。そして、この頃からこの場所は繁栄し、兄弟たちの数は増えたのである。

修道院長時代のはじめの彼の習慣はこのようなものであった。彼のもとに来て修道士になりたいと望み、剃髪を受けたいと発願した者は、老いた者であろうと、若い者であろうと、富める者であろうと、貧しい者であろうと、誰ひとり拒むことはなく、あらゆる人々を熱心さと喜びの念をもって受け入れた。しかしながら、彼はすぐに剃髪をおこなうということはしなかつた。まずはじめに発願者にラシャ地でできた丈の長い服を着るように命じ、修道士としての生活のあり方をすべて学び終えるまで、相当の時間、兄弟たちと行動をともにさせた。このあとはじめて、す

<sup>115</sup> 『ペトロの手紙一』5章2-3節。

<sup>116</sup> 引用は不明である。

<sup>117</sup> 『詩篇』4篇4節。

<sup>118</sup> 蜜飯とカヌンは、死者たちの追善のために教会に持ち込まれる食べ物と飲み物である。

<sup>119</sup> 『マルコによる福音書』9章35節。

べての業に熟達したのと見届けてから、セルギイは彼に修道士の服を着せ、剃髪してからマンチヤと修道帽をまとわせたのである。そして、もしもその発願者が、清らかな生活において経験を積んだよい修道士であることがわかったら、そのとき聖なるスヒマ僧の位を受けることを許した。

修道士たちの長である時代のはじまりが終わる頃にはすでに、神に似たるセルギイは自らの場所、「ラドネジにある」と名づけられた修道院で輝きわたったばかりではなく、その名声は到るところ、さまざまな国々、町々に響きわたった。なぜなら、徳というものは徳を身に着けた者のろうそくそのものよりも劣らず、ろうそくを持っているその人を照らし出すものだから。その頃になると、キリストを愛する多くの人々が神への愛のために遠くから彼のもとを訪れて、この世の生の空虚を捨て去り、恵み深い主の軛のもとに自らの首を差し出したのであった。じっさいつねに、セルギイのもとに弟子たちがどんどん集まってきた。というのも、セルギイの恩寵の泉は、魂の水に渴く言葉の鹿たちを呼び招くように、徳高い魂を呼び寄せたからである。

至福の人ははじめからこのような習慣をもっていた。晩禱が終わって夜遅く、というよりも、ほとんど深い真夜中、ことに暗い長い夜のさなかに、自らの僧坊での祈りを終えてから、その祈りのあとにセルギイは自らの僧坊を出て、修道士たちのあらゆる僧坊を見回るのである。自分の兄弟たちを気遣うにあたって、彼らの身体のことだけを考え抜こうとするのではなく、その魂のことにも心を配り、彼らの個々の生活と神に寄せる熱心さを知ろうとした。もしも彼が、誰かが祈っていたり、叩頭を繰り返していたり、沈黙を守り祈りながら仕事をしていたり、聖なる書物を読んでいたり、自分の罪について涙を流し嘆いているのを聞いた場合には、そのような人々のためにセルギイは喜び、神に感謝し、彼らのために神に祈りを捧げ、彼らがいまはじめたことを最後までやり抜くことを祈った。最後まで忍耐する者は救われるからである<sup>120</sup>。

もしも誰かが二人、三人と集まっておしゃべりをしたり、笑ったりしているのを聞いた場合には、そういう人々のために彼は不機嫌になり、こういうことにはひどく我慢できず、自分の手で扉や小窓をノックして立ち去るのであった。そういう人々には、このようなやり方で修道院長が来たこと、彼が訪れたことを知らせて、はっとさせる合図でおしゃべりを止めさせるのである。そうしておいてから、次の日の朝に自分のもとに呼び出して、しかしながら、直ちに禁止するようなことはせず、怒りを露わにして彼らを非難したり罰したりせず、まるで遠くから諭え話でもするように静かさと穏やかさをもって、彼らが神への熱心さや情熱を知るように、彼らを教え諭した。そして、もしも兄弟が従順で謙遜で、信仰と神の愛に熱い心をいだいているのなら、すぐさま自分の罪を認めて謙抑の気持ちとともに地に倒れ伏し、彼に深いお辞儀をして、彼から赦しを乞い求めるのである。もしもその反対に兄弟が従順ではなく、心が悪魔の闇の力に覆われ、セルギイが言っているのが自分のことではなく、自分のことを清らかであると考えているのなら、さしあたり神に似たる人は、忍耐強く彼の罪を認めさせようとするのだった。それは、「主に従

<sup>120</sup> 『マタイによる福音書』10章22節。

う人が私を打ち、慈しみをもって戒めてくださいますように<sup>121</sup>」と書かれているとおりである。あるいは、不服従の兄弟には、自分の罪を十分に自覚していないということで、「悪事を重ねることがないように<sup>122</sup>」懲戒を課することもあった。このようにして、矯正の道を指し示してからこの者を下がらせた。このようにして、この人はすべての者たちに、心をこめて神に祈ることを、晩の祈りのあとは誰とも喋ってはいけないこと、何かよほどのつびきならない用事でどうしても必要な場合を除いては、自分の僧坊から出てほかの修道士たちの僧坊を歩きまわってはならないということ、自分の僧坊では誰もが孤絶のなかで密かに神に祈らなければならないこと、自分の力量に応じて個々の両の腕ができる仕事をしなくてはならないこと、毎日ダビデの詩篇を絶え間なく自らの唇で唱えることを教え諭した。

#### 生活に必要なものがふんだんにあること

この場所が建てられはじめたその一番はじめのころ、極度の貧困と、ここがまったく人の通わない場所であることから、多くの品物が窮乏し、すべての必需品が欠如していた。だから、彼らはどこからも何の支援も、必要なあらゆる品々をも期待することができなかった。というのも、近隣の村も屋敷もなく、ただひたすら荒野であったならば、彼らはどこから必要な何かを受け取ることができただろうか。長いあいだ、この場所に通じる幅の広い道はなかった。道などないと言っていいような、通るのが難しい不便な小道を通って彼らのところに行かなくてはならなかった。大きな広い往來の著しい道はるか遠くにあり、この場所にその道が近づくことはなかった。その修道院の周りは荒涼としていて、すべての方向が森に囲まれていて、まさしく荒野と名付けるべき場所だった。私が考えるに、15年以上の歳月が経るまで、彼らはこのように暮らしていた。

そのあと、いくばくかの時間が経って、私が思うに、イワンの息子、シメオンの弟である大公イワン<sup>123</sup>の治世であると思うが、農民たちがここにやって来てはこの周りの森をめぐり歩き、この場所に住むことが気に入った。多くの人々が自分から望んでこの場所の両端に住みはじめ、森を伐り開きはじめた。それは、彼らがそうすることを誰も禁じなかったからである。そして、彼らは自分たちのために多くのさまざまな村落を創り、何の容赦もなく先ほど述べた荒野を変貌させ、荒野を、私たちが今見るような、大きな広々とした畑に変えたのだった。そして、彼らは村や多くの屋敷を建設し、野に種を蒔き、植物から木の実を取り、限りなく栄え、しばしばやって来て修道院を訪ねはじめ、多くの種類の多種多様な必需品をもってきたが、その数は計り知れないほどだった。しかし、私たちがいまはこの話を止め、まえの物語に戻ろう。この章のはじめで私たちは、必要な物資のあらゆる面における窮乏と不足について話しはじめたのだったが、このことについては話を避けて通ることができない。

<sup>121</sup> 『詩篇』141 篇5 節。

<sup>122</sup> 『詩篇』141 篇4 節。

<sup>123</sup> イワン2世イワノヴィチ美男公(1326-59年)のこと。イワン・ダニーロヴィチ・カリターの2番目の息子でシメオン・イワノヴィチ傲慢公の弟。1353年から59年にかけてモスクワならびにウラジーミル大公。

最初のころ、この場所の建設がはじまろうとしていたころ、わずかな数の兄弟たちがここに住んでいたのだが、ここに来る人も何かをもって来てくれる人も少なかったため、必需品の不足がしばしばあった。朝にパンがないことも何度もあった。我らが師父神に似たるセルギイが経験していた窮乏を十分に書くことができる人はいるだろうか。この場所の建設がはじまった最初のころ、しばしばパンも、小麦粉も、粒の小麦も、そのほかの穀物の粉も欠乏することがときどきあった。ときどき、バターも塩も、あらゆる食材も足りないことがときどきあった。昼の祈りのときに用いるワインも、香を焚くときの薫物もないことがときどきあった。ろうそくをこねて作るための蠟もないこともときどきあり、ろうそくなして白樺や松の小切れを燃やして明かりを取りつつ、真夜中に早朝の祈りを歌うこともしばしばであった。このために、歌の先導をおこなうことも<sup>124</sup>、本を見ながら朗唱することも、自らの僧坊で夜の勤行をすることも困難であった。神に似たるセルギイは感謝の念をもって、これらの窮乏、圧迫、欠如、喪失に耐え、神から大いなる憐れみを授かることを望んでいた。

そして、あるときこのような試練が起こった。なぜなら、試練とともに神の慈悲を授かるものだからである。あるとき、修道院長のもとでパンと塩が足りなくなった。修道院全体でも、あらゆる食物が底を尽きてしまった。神に似たる修道院長のもとでは、すべての兄弟たちに次のごとき戒めがおこなわれていた。もしも試練がやってきてパンもない、すべての食料も払底するようなことがあっても、このために修道院を出てどこかの村や村落にゆき、世俗の者たちに身体のために必要なものを乞い求めてはいけない。ただ修道院に忍耐強く座って神から憐れみを乞い求め、待ち続けるがよい。彼がつねづね兄弟たちに命じ、戒めてきたとおりに、自分自身も先頭を切ってそのように行動し、耐えたのである。そして、彼は三日あるいは四日、なんの食べ物もなしに過ごした。

三日が経ち、四日目に来て夜が明け白んだころ、セルギイは斧を手に取り、彼の修道院に住んでいた、ダニールという名のある長老を訪れて、彼にこう言った。

長老よ、あなたが自分の僧坊のまえに玄関を作りたいと思っていますと、私は聞きました。私はそのために来たのです。私の手が手持ち無沙汰ではないように。私はあなたのために仕事をします。

ダニールは答えて言った。

ええ。私はとても作りたいと思っていて、ずっとまえにすべて必要なものは揃えました。村落から大工が来るのを待っていたのです。ただあなたにお任せするのは、心配なところが

---

<sup>124</sup> レシュタティーヴォ（叙唱）で大きな声で祈祷歌の節々を歌い継ぐこと。このレシュタティーヴォのあとに、合唱が続いていく。

あるのです。いきなり高額な報酬を求めたりするではありませんか。

セルギイは言った。

私はあなたからそれほど大層な報酬は求めません。腐ったパンをお持ちではありませんか。というのは、私はまさにそのようなパンを食べたいのです。このほかに別なものは、私は何も求めませんし、あなたから報酬を求めることもいたしません。私にはもう、そのようなパンさえないので。長老様、自分はお前ではない別の大工を待っているとは言わないでください。私以外のそのような大工をあなたはどこで見つけることができるのでしょうか。

長老ダニルは、腐ったパンのかけらが入ったバスケットをもってきて言った。「もしもあなたがこのようなものが欲しいというなら、わたしはよろこんであなたに差し出そう。これ以上のものは私にはない。」セルギイは答えた。

私にはこれで十分です。これは、私が必要とする以上です。しかし、9の刻までこれを取っておいてください。なぜなら、自分の手が一仕事終わるまで、仕事の報酬は手に取らないことにしているからです。

こう言い終わると、セルギイは自分の腰帯をきつく締め、朝から晩まで働き、木を削りはじめた。板を全部削り出すと、今度は柱を伐り出して据え、神のお助けによって夕方までに玄関を作り、その仕事を終わらせた。すでに遅い時間で、夕刻だった。長老ダニルは、先に述べたパンを入れたバスケットを持ってきて、彼の腕が稼ぎ出したものへの支払いとした。セルギイはそれを受け取り、自分の前に置くと、祈りを唱えてそのパンを祝福し、ただ水だけを伴としながらそれを食べはじめた。というのも、スープもなければ、塩も調味料もなかったからである。昼食と夕食を合わせて彼は食べた。兄弟のなかには、彼がそのパンを食べるときに、何か煙のようなものが彼の口から立ち上ったのを見た者たちがいた。そのとき、彼らはお互いに身を寄せながら、こう言った。

兄弟たちよ、この男の忍耐と抑制はどれほど大きなものであろうか。彼は実際に4日間ものを食べず、4日目の夜遅くようやく腐ったパンで飢えを慰め、和らげたが、それもただでもらったのではなく、高い対価を払って買って、その腐ったパンを食べたのだ。

修道士の一人である、ある兄弟が、そのとき、セルギイに文句を言った。というのも、彼らは2日間何も食べなかったからである。彼らは食べ物なしでおかれてひどく腹を立て、彼のもとに来て、彼を非難し、彼の悪口を言った。

カビの生えたパンしかありません。私たちはどうして世俗の人間たちのところに行ってパンをもらってきてはいけないのですか。私たちは、あなたが私たちを教え諭すのを見てきました。あなたの言うことに従ってきました。ですが、いまはもう飢えのために死にそうなのです。ですから、私たちは朝早く生活必需品を求めてめいめいどこへなりと、この場所を立ち去り、もうここへは戻ってきません。私たちはもうこれ以上、ここで経験するような喪失と窮乏を耐えることができませんので。

しかし、不平を言ったのは全員ではなく、彼らのなかの一人、ある兄弟が不満を鳴らしたのである。

セルギイはこの件で兄弟たちみんなを集めた。というのは、彼らが弱り、落胆しているのを見ていたからである。神に似たるセルギイは、彼らの狭量を忍耐と、柔和ないつものやり方と、柔軟さで矯正しようと望み、彼らを聖なる書物、旧約聖書、新約聖書の言葉で教え諭した。いわく、

「なぜ悲しむのか、兄弟たちよ。なぜ騒ぐのか。神を待ち望め<sup>125</sup>。」なぜなら、こう書かれているからである。昔の人々のことを顧みて、よく考えてみよ。主を信頼して、欺かれた者があったか。主を信じつづけて辱められた者があったか。主を恐れつづけて見捨てられた者があったか。主を呼び求めて無視され、主に蔑ろにされた者があったか<sup>126</sup>。なぜなら、主は仰せだからである。「食べ物を与え、穀物を収穫させ、蔵を穀物で満たすのは私ではないのか<sup>127</sup>。」「全世界を養い、この宇宙に食べ物を与え、すべての肉なるものに糧を与えるのは、私ではないのか<sup>128</sup>。」「時に応じて食べ物を与え、御手を開き、御心にしたがって生きる者を与えるのは、私ではないのか<sup>129</sup>。」また、福音書のなかで主は仰せです。「何よりも、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる<sup>130</sup>。」「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り取りもせず、倉に納めもしないのに、あなたがたの天の父は養ってくださる。信仰うすき者よ、あなたがたは鳥よりも価値のある者ではないか<sup>131</sup>。」「耐えなさい。忍耐が必要です<sup>132</sup>。」「忍耐によってあなたがたは自分の魂を救済しなさい<sup>133</sup>。」「最後まで忍ぶ者は救われる<sup>134</sup>。」

<sup>125</sup> 『詩篇』42 篇6 節。

<sup>126</sup> 『シラ書 (集会の書)』2 章10 節。

<sup>127</sup> 『箴言』3 篇10 節。

<sup>128</sup> 『詩篇』136 篇25 章。

<sup>129</sup> 『詩篇』145 篇15-16 節。

<sup>130</sup> 『マタイによる福音書』6 章33 節。

<sup>131</sup> 『マタイによる福音書』6 章26 節。

<sup>132</sup> 『ヘブライ人の手紙』10 章36 節。

<sup>133</sup> 『ルカによる福音書』21 章19 節。

<sup>134</sup> 『マタイによる福音書』10 章22 節; 24 章13 節。

そなたたちはいま、短いあいだだけ自分たちの試練のために起こった飢餓のために悲しんでいる。しかしながら、そなたたちが信仰と感謝の念をもって耐え忍ぶならば、この試練はおまえたちのためになるだろうし、大いなる利益とさえなるであろう。なぜなら、神への感謝の念というものは、すべての者たちに試練なしには与えられないであろうから。それは『階梯』に言われているとおりである。「試練なしに金は精錬されない。私たちは、悲しみのあとに喜びを待ち受ける。なぜなら、喜びは悲しみのあとに来るからである<sup>135</sup>。」「泣きながら夜を過ごしても、朝には喜び変えてくださる<sup>136</sup>。」そなたたちはいま、パンを切らした。今日あらゆる食べ物の窮乏に苦しんでいる。だが、明日には、あらゆる必要な食べ物が豊富に満ち溢れ、あらゆる食物と飲物の豊穡を楽しむことができるだろう。なぜなら、神はこの場所とそこに住む人々をお見捨てにはならないと、私が信じるからである。

まだこの言葉を言い終わるか終わらないとき、誰かが突然門を叩いた。門番がすばやく小窓を覗くと、生きるのに必要な食べ物がどっさりと運ばれてきたのを見た。見張りは喜びのあまり、門を開けることも忘れた。というのも、門番も非常に腹をすかせていたからである。門番は大急ぎで神に似たるセルギイのもとに駆け戻ると、彼に知らせてこう言った。「父よ、パンを持ってきた者たちを祝福してください。なぜなら、そなたの祈りで、生きるのに必要なたくさんの食べ物がもたらされたからです。これらのものは、門のところにあります。」神に似たる人は命じて言った。「人がなかに入れるように、すぐに門を開きなさい。」門を開けたとき、たくさんの食べ物が荷車に乗せられたり、袋詰めにされたりして修道院に運び込まれるのを見て、彼らに食べ物を与え「飢えた魂を満たす<sup>137</sup>」ために、飢餓の日に彼らを養うために、彼らに食べ物と、この地上で準備された驚くべき夕食<sup>138</sup>を送られた神を讃えた。

神に似たるセルギイは修道士たちに、食べ物をもってきてくれた人たちを食卓に招くように命じ、彼らにこう言った。

あなた方はご自身がお腹をすかせているのであっても、満ち足りた者たちをさらに腹一杯にし、あなた方を養う者たちを養い、あなた達に飲み物を与える者たちに飲み物を与え、彼らをもてなし、敬いなさい。なぜなら、彼らはもてなしと尊敬に値するからです。

セルギイ自身は非常にお腹が空いていたけれども、自分に持ってこられた、料理のできた食べ物に手を付けるまえに、まずはじめに板木を叩くことを命じ、兄弟たちとともに感謝祈祷を歌うた

<sup>135</sup> 第4講話「めでたき、永遠の記憶に値する服従について。」「試練にあった黄金でなければ、きれいになることはない。」「そうしているあいだに、主は、我らの心を沈める悲しみを喜びに変えてくれる。」

<sup>136</sup> 『詩篇』30章6節。

<sup>137</sup> 『詩篇』107篇9節。

<sup>138</sup> 日曜の福音書早課第10 スチヒラ、第6声。

めに教会に入り、長いあいだ、自らのために忍耐した自らの僕たちを放っておくことがなかった神に、大いなる感謝と称賛を捧げた。そして、教会から出ると、兄弟たちとともに食堂に座った。彼らのまえには、たった今もってこられた焼きたてのパンが置かれた。神に似たる人は立ち上がり、祈りを唱え、祝福し、パンを割り、それを割いて、自らの黒衣の僧たちに与え、彼らみなは食べ、腹が満たされ、彼らを養ってくださった神を讃えた。焼きたてのパンがいつもそうであるように、それらのパンは暖かで柔らかかった。味わっていると、なんとも不可解な摩訶不思議な甘さが感じられ、それらのパンはまるで蜂蜜の甘さのような甘みで満たされ、味つけられ、飾られており、種の油でこんがり焼かれて仕上げられ、そのなかには何かの香りの高い香料が仕込まれていて、そのゆえに齋戒の甘みを持っているように思われるのだった。それは太古の昔、イスラエルの民にマンナが神によって送られたのと同じことであった。このことは預言者ダビデがこう言った。「彼らのうえにマナを降らせ、天のパンを与えた。人間は天使たちのパンを食べた。神は飽きるほどの糧を送られた。彼らは食べて飽き足りた<sup>139</sup>。」そして、天から降った食べ物は真に人の手によらないもののように思われた。

そして、かくのごとくして神は、神に似たるセルギイが四日のあいだ飢えと渇きに苦しみながら耐え忍んだことにたいして、セルギイに忍耐と抑制の実りを示したのだった。セルギイは飢えと戦いながら神のために耐え抜いたのだから。それは、預言者ダビデが「貧しい人の忍耐は最後まで死に絶えることはない<sup>140</sup>。」「あなたの手が労して得たものはすべて、あなたの食べ物となる。あなたはいかに幸いなことか。いかに恵まれていることか<sup>141</sup>。」この腐ったパンのかわりに神は、甘い食物をお送りになった。腐ったパンのかわりに、腐っていない焼きたての甘い香り豊かなパンを、朽ちるパンのかわりに朽ちないパンを、地上の福の楽しみを送ってくださった。それは地上の暮らしのなかだけの話であり、来る世では、地上のものかわりに天上のものが、つかの間の福のかわりに永遠の楽しみがあるのだ。それは、使徒が「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心が思い浮かびもしなかつたことを、神は自分を愛し、自分の戒めを守る者たちに準備された<sup>142</sup>」と言ったとおりである。セルギイ一人だけではなく、魂のすべてをかけて神を愛し、神のご意志をおこない、神の戒めを守るすべての者にとって大いなる報償となった。

彼らが食べていたとき、神に似たる人は言った。

あのとき「カビの生えたパンですと？」と不平を言った兄弟はどこにいるのだ。その者がいま見れば、それがカビの生えたパンではなく、こよなく甘い柔らかいパンであることが、真実にわかるだろう。どうして、「なぜなら、私はパンに変えて灰を食べ、飲み物には涙を

<sup>139</sup> 『詩篇』78 篇24-25 節; 29 節。

<sup>140</sup> 『詩篇』9 篇19 節。

<sup>141</sup> 『詩篇』128 篇2 節。

<sup>142</sup> 『コリントの信徒たちへの手紙一』2 章9 節。

混ぜた<sup>143</sup>」とおっしゃった預言者のことを思い出さないわけにいかうか。

そのあと、修道士たちは、これは誰のパンなのか、それをもってきた人々はどこにいるのか、だれがこのパンを送ったのかを、究明しはじめた。そして、修道士たちは互いに他を見遣ったが、神に似たる人が次のように言うまで、修道士たちの誰も、何が起こったかを明瞭に理解することはできなかった。

これらのパンをもってきてくれた人々もパンを食べるように呼ぶように、私はあなた達に言わなかったか。彼らは今どこにいるのだ。なぜ彼らはそもそものはじめから私たちとともに食べていなかったのか。

彼らは言った。

私たちはあなたのお言葉とおりに彼らを呼んでパンについて訊ねてこう言いました。「あなたたちとともにここに送られたパンは誰のものなのですか」と。送られた者たちは言いました。「さるたいへん豊かな、遠くの地方に住む、キリストを愛する方が、セルギイ様と彼とともに住む兄弟たち宛てに、パンを送られたのです」と。

そして、修道士たちはふたたびセルギイのご命令で、昼食に招くために彼ら呼び出した。彼らは来たがらず、別の場所に急いで旅立ち、彼らの目につくところから消えてしまった。誰がこれらのパンをもってきたのか、誰がそれらを送ったのかを、修道士たちがそのときわからず、理解もせず、ただ修道院長のところにやってきて驚いてこう言ったのは、驚くべきことだった。「父よ。なぜ油と香料で焼いた小麦のパンが近い場所からもってこられたものではないのに、暖かかったのですか。」翌日、同じようにたくさんの必需品、食料や飲み物が修道院にもたらされた。その翌日にもふたたび、別の場所から同じように、私たちが以上で語ったのと同じように、必需品が運ばれてきた。

修道院長のセルギイはこれを見聞きし、すべての兄弟たちとともに神を讃えて言った。

兄弟たちよ、御覧なさい。すべてについて気遣ってくださる神はこの場所をお見捨てにならず、この場所で修道士として生活し、日夜神にお仕えし、信仰と感謝とともに耐え忍んでいる、自らの僕たちをお見捨てにならないではないか。

長老は兄弟たちに、使徒パウロによって言われた、次のような言葉を思い出させた。「食べるも

<sup>143</sup> 『詩篇』102 篇10 節。

のと着るものさえあれば、私たちはそれで満足すべきです<sup>144</sup>。」そして、セルギイは次のようにつづけた。

役に立たないことを心配して何になろうか。私たちに食べ物や着るものをくださり、私たちのすべての所業について気遣ってくださる神に望みをかけ、神を見つめるほうがよい。必要なよきこと、私たちの魂と身体に有益なすべての必要なことを、私たちは神から待ち望むことができる。神が私たちに気遣ってくださるように神に祈り、つねに神に期待しよう。なぜなら、神は太古においてかくも酷く不従順なイスラエルの民を、何千ものイスラエルの民を荒野で、そのあとも大勢の彼らを腹のくちくなるまで養ってくださったのだから。「彼らの飢えにマナセを降らせ、天のパンを彼らに与えた。人間は天使たちのパンを食べた<sup>145</sup>。」「民が求めると、ウズラが大群で<sup>146</sup> 飛んだ。」「彼らのうえに肉を塵のように降らせ、翼ある鳥を海辺の砂のように降らせた<sup>147</sup>。」「彼らは食べて飽き足りた<sup>148</sup>。」「神ご自身がいま、私たちのことを気遣ってくださるであろう。神のお力は尽きることがなく、その気遣いは減ずることはなく、かつて太古においてそうであったように、いまこのときも私たちにつね変わることなく食べ物をくださる。

このときから、修道士たちは別の習慣ができた。もはや悲しみや困窮のなかで不平を言うことがなくなった。困窮や欠乏や必需品の不足が起こるようなときも、みなは主なる神に望みをかけ、我らが師父神に似たるセルギイを何よりの拠り所として、熱誠と信仰をもってすべてを耐え抜いた。

セルギイの衣服の粗末さとある農民について

ここの長老たちのある者たちが、神に似たるセルギイについてこう話していた。セルギイ尊師は、新しい衣服が彼の身体を覆ったためしがないし、ドイツ製の美しくて色彩の豊かなラシャ地、あるいは、真っ青な織物、緋色、褐色、そのほかさまざまな鮮やかな色の着物を身にまとったこともない。あるいは、白の服、あるいは、しなやかで柔らかな服を着たこともない、なぜなら、しなやかな服をまとった人は王宮にいるのだから<sup>149</sup>。彼がいつも着ているのは、染めていないラシャ地のもの、毛糸、紡いだ糸を織った羊毛のものであり、ただの布地で飾りもなく、くすんだ色合いのみすばらしいものだった。目の荒い毛糸のラシャ地のものだけを着ていた。古くて繕い

<sup>144</sup> 『テモテへの手紙一』6章8節。

<sup>145</sup> 『詩篇』78篇24-25節。

<sup>146</sup> 『詩篇』105篇40節。

<sup>147</sup> 『詩篇』78篇27節。

<sup>148</sup> 『詩篇』78篇29節。

<sup>149</sup> 『マタイによる福音書』11章8節。

のある、ろくに洗いもせず汚れていて汗の染みついた、ときには継ぎ接ぎのある服を着ていたのである。

ときどきはこのようなことが起こった。あるとき、彼らのもとに出来栄えの悪いラシャ地があった。織り方も悪ければ、みつももないことこの上なく、まだら模様にさえなっている代物で、兄弟たちはみな気に入らず、蔑み、こんな物を身につけるのは嫌だと言っていた。兄弟たちの誰かが手にとっては見るものの、ちょっと触っただけでもとに戻し、投げ捨ててしまった。二人目、三人目、そして、七人目に到るまでそのように目もくれなかった<sup>150</sup>。ところが、神に似たる人は嫌だと言わないですぐさまそれを身につけ、祝福し、それを裁断して縫製し、祭服を作り、それを身につけるのを嫌がらなかった。この人はこれを脱ぎながらなかったし、捨てもせず、その反対に、感謝の念をもって、一年後、その祭服がぼろぼろになってあちらこちらに穴が空き、切れ切れになってしまうまで、自分の身体に着せかけたのであった。このことからわかるのは、謙抑なるあの方が、たとえ乞食のようにさまよい歩くことになったとしても、このような熱情をもっていたということである。

なんといっても、彼が毎日来ている普段の衣服は、非常に粗末なものであった。だから、もしもセルギイを見たことがなく彼のことをまるで知らない者がどこかで彼のことを見かけた者が、このような衣服を身につけた彼のことを見たならば、それが修道院長セルギイその人であるとは思わず、ふつうの修道士であるか、乞食か貧乏人か家のない者か、さまざまな仕事をする作男であると思ったことであろう。もっとかんたんにいってしまうと、彼が身につけていた衣服は、修道士の誰が身につけていたものよりも貧しくひどかった。彼のことを知らない人は、このために間違ったり、戸惑ったりする人もいた。そんな事はよくあったし、かなり多くの人々がそんな経験をしてバツの悪い思いをした。そういう人々のなかから、ある農夫のことを話そうと思う。

この神に似たる人の生活についての噂があまねく知れわたると、この人をひと目なりとも見ようと、さまざまな町や場所から多くの人々がこの人を訪れるためにやってきた。彼に会った人々は家に帰り、たがいにこの人のことを語り合い、驚きを覚えた。このことを耳にして、彼らのうちの一人、キリスト教徒であり農民であるある人間が、その人は土地を耕す人であり、土地と親しむ人であり、自らの村に住み、犁で耕し、自分の労働で糧を得ていたけれども、この場所から遠くに住んでおり、話を聞いてその人に一目会いたいという強い気持ちが起こり、彼に会いに出かけようと思いついた。ある日、彼は仕事を休みにして、このかたの修道院に来た。このときまで、この人はセルギイに会ったことがなかった。このとき、たまたま神に似たる人は、何か菜園に植物を植えるために、スコップを手にもって働き、畑を耕していた。セルギイに会うためにやってきたこの耕作者は、ねばり強くセルギイに会おうと彼を探し歩いて訊ねた。「ここにいらっしゃるセルギイさまはどの方ですか。私が噂を聞いてきた、あの奇跡のような素晴らしい男はどこにおられますか。どうやったら私は彼に会うことができますか。」この耕作者は、兄弟たちの一人

<sup>150</sup> 『マタイによる福音書』22章26節。

一人にしつこく聞いて回り、自分が探し求めている人がどの人であるか、教えてくれるように頼んだ。彼らはこの人に「彼は菜園に一人でいる。たった一人になって土地を耕しておられる。彼が出てくるまでもう少し待ってみてはどうですか」と教えた。この人は大いなる望みを抱いていたので待ちきれず、塀の割れ目から覗いてみるのだが、破れて継ぎ接ぎだらけの粗末な衣服を着て、額に汗して働く至福の人を見ただけであった。この人には、それが、彼が探しに探した、待ち望んだその人であるようには思われず、その人が、彼がその噂を聞いてきたその人であるとは信じなかった。耕作者はふたたび兄弟たちにせつついて憤りを抑えきれずにこう言った。

どうしてあなたたちは私に、私のはるばる遠くからやって、来て跪いて祈りたいその人を指し示してはくれないのですか。私にとってあの方にお会いできることは非常に重要なことなのです。

兄弟たちは言った。「私たちはあなたにそれが誰か教えたではありませんか。あなただつて割れ目からその方を見たでしょう。もしも信じられないというのなら、もう一度行ってあの方を見てきたらどうですか。」耕作者はそれでも意固地になって信じようとせず、どこから来るかわからぬ彼のことを待ちかまえて戸口のところに立っていた。

神に似たる人が自分の仕事を終えて出てきて菜園から修道院にやってきたとき、修道士たちはすぐに土地を耕していたこの人のことを指さして言った。「この人が、あなたが会いたいと思っていた人ですよ。」しかし、この農民は至福の人から自分の顔を背けて笑いだし、あの方に強い嫌悪の念を示して言った。

私は預言者に会おうとここに来たんだ。なのに、あなたたちが私に示したのは孤児じゃないか。ご利益のかわりに得たものと言え、むなしさだけだ。私はご利益をいただくためにはるばる遠方からこの靈驗あらたかなる修道院に来たというのに。おまえたちだつて私を嘲笑ったではないか。私が逆上していると思っているのだろう。私が聖なるセルギイ様の噂を聞いて、誉れであり偉大さであり名誉に包まれたお姿のセルギイ様に見ることができると期待していた。でも私が今おまえたちによって示されたのは、誉れでも偉大さでも名誉でも美しくて高価な衣装でも、彼に仕える隨身でも、すばやく走り回る召使たちでも、多く居並び、甲斐甲斐しく仕え、彼に誉れをもたらす僕たちでもなくて、貧しく孤児のような、みすばらしい人間だ。私は、こんなものはセルギイ様ではないと思う。

この土地を耕す人で、正真正銘の農民であるこの百姓男は、修道士たちにこのように言った。というのも、無知というものは内なる目によっては見ずに、外なる目によって見るからであり、

「人は目に映ることを見るが、主は心によって見る<sup>151</sup>」と、賢きシラが述べているように、聖なる書物を知らないからである。この者は外面を見たが、内面を見なかった。身体にまとう衣服の貧しさ、あの方が耕作の労働をしていることを見てはいたが、長老の徳と貧しさを秤にかけ、彼が噂を聞いたその人がこの方であるとはまったく信じなかった。彼の物思いのなかには、信じない心があった。彼は心のなかでこう考えた。「栄えある名誉に満ちたそのような男が、このように乞食のようで貧困にあえいでいるはずはない。私は、その偉大さ、誉れ、名誉について聞いていたのだから。」

すると、兄弟たちは修道院長に言った。

私たちはそなたに言う勇氣はないし、畏れ多いことながら、栄えある父よ、私たちはそなたを訪ねてきたこの人間を、生意気な礼儀知らずの人間としてここから送りだすことにします。というのは、この男は無知な農民だからです。この男はそなたに跪拝することもなく、しかるべき敬意を払うこともなく、私たちに毒づき、私たちが嘘をついていると考えて、私たちの言うことを耳に入れないからです。私たちはこの男を追い払ってもよいでしょうか。

神の人セルギイは兄弟たちを見て彼らが憤っているのに気づくと、このように言った。

どんなことがあっても、そのようなことはしないでください。彼はあなたたちのところではなく、私の名前のために来たのですから。どうしてこの人を困らせるのですか。この人は私のためによいことをしたのです<sup>152</sup>。私はこの人に咎を見出しません。使徒パウロがこうおっしゃっているのを聞くがよいでしょう。「もしも誰かが罪に陥ったならば、あなたがた聖職者たちはそのような魂を柔和にし、そういう人を謙遜な心で静かに正しい道に立ち帰らせなさい<sup>153</sup>。」

セルギイはこう言うと、この人から跪拝されることを待つことなく、セルギイその人がまえに進み出て、なんの猶予もなく熱い心をこめてこの耕作者に挨拶をして、大いなる謙抑の心をもって耕作者に地に着くまで深いお辞儀をして、キリスト教徒としての大いなる愛をもって彼に接吻し、大いに祝福して、彼が自分のことをそのように判断したことについて大いに褒めた。

セルギイは、自分のことを忌み嫌っている不機嫌で無知な農夫をことさら熱愛したのであるか

<sup>151</sup> 『サムエル記上』16章7節。エピファン・プレムードリイは、『サムエル記上』の主のサムエルにたいする言葉を引用している。そのさい、シラの息子ヨシュアの知恵の書を参照している。「主は地下の海も人の心も究めつくし、その見事な仕組みを知り尽くしておられる。いと高い方はすべてのことに精通し、時の徴に目を留められる。主は過去と未来を告げ知らせ、隠されたものの形跡を明るみに出させる。」

<sup>152</sup> 『マタイによる福音書』26章10節；『マルコによる福音書』14章6節。

<sup>153</sup> 『ガラテヤの信徒への手紙』6章1節。

ら、セルギイが自分の魂のなかにどれほど大きな謙抑の心をもっていたかがわかる。なぜなら、誇り高い人間が敬われ、賞賛されるのを喜ぶように、謙抑なる者たちは自分に対する不敬と非難を喜ぶものだからである。神に似たるこの人はこのように振る舞ったばかりではなく、この農夫を自分の右手に座らせ、食べ物と飲み物を味わうように勧めて、敬意と愛をもって彼をもてなしたのである。この農夫は、セルギイのために悲しい思いをしたと言った。「セルギイに会うために私は苦労に苦労を重ねてここまでやってきたが、私は彼に会いたいという願いを叶えることができなかった」と。神に似たるセルギイはこの人に言った。

悲しんではいけません。神の慈悲というものは、誰一人としてこの場から悲しんで立ち去ることがないほど、偉大なのです。あなたがそのために悲しんでいるもの、あなたが探し求めているものを神は直ちに与えてくださいます。それが、あなたが望んでいるものです。

彼がまだこのことを言い終わらないうちに突然、きわめて誇り高く栄えあるある公が修道院に到着した。多くの兵士たち、大貴族たち、召使いたち、僕たちが彼を取り囲んでいた。先を歩いて道の露払いする公の護衛の兵たちが、自分たちの腕でこの農夫の肩を掴み、農夫を公とセルギイから離れた遠いところに放り出した。まだセルギイから離れたところにいるにもかかわらず、公はセルギイに地面につくほど深々とお辞儀をした。セルギイはこの公を祝福して接吻し、公とセルギイは二人だけで腰掛け、あとの者たちはそのまゝで立っていた。この農夫は、あたりをぐるぐる走り回っていた。以前には洩もひっかけず嫌悪を露わにしていた人間に、今度はどこでもいいから触ろうと、彼のことを一目眺めようとしていたが、そうする場所が見つからなかった。彼は、そこに立っていた者たちの一人を捕まえてこう言った。「公の右手に座っていらっしやるあの修道士がいったい誰なのか、私に教えてくれ」と。「おまえはここに住んでいる人間ではないのか。おまえは神に似たる師父セルギイ様のことを聞いたことがないか。公殿下とお話しているあの人が、そのセルギイ様だ。」彼はこれを聞いて自らを責め、同時に恐れ戦いた。

公が修道院から立ち去ると、この農夫は兄弟たちの何人かを連れて、彼らに仲介者となってくれるように頼み、彼らのまゝでこの農夫は地に着くまで深く修道院長にお辞儀をして言った。

父よ。私は不敬な振る舞いをしました。私は罪を犯しました。私を赦してください。私を不信心からお救いください<sup>154</sup>。父よ、今や私は真実にあなたのことを知りました。私は聞き知っていたことを実際に見ていたのです<sup>155</sup>。

神に似たるセルギイは農夫を赦し、祝福し、農夫と語り合い、魂のためになる慰めの言葉を与え

<sup>154</sup> 『マルコによる福音書』9章24節。

<sup>155</sup> 『詩篇』47篇9節。

て彼を家に帰した。そして、このときからこの人間は聖三位一体と神に似たるセルギイにたいして大いなる信心の気持ちを抱き、それは終生もちつづけた。そして、数年後、彼は自分の村を出、修道院の神に似たる人のところにやって来て剃髪を受けて修道士の位階を受けた。そして、さらに何年か生き、罪の懺悔と改悛のなかで自らを正しながら、神の御もとに召された。

#### 泉の掘削について

愛されたる者たちよ、私はあなた方に、神が自らのお気に入りの者をとおしておこなった、栄えある奇跡についての話を、お耳に入れたいと思う。この偉大な牧者にして賢き人間の荒野への到来について話しながら私たちが言及してきたように、セルギイはたった一人でこの場所で沈黙の行を専一としたかったのであったが、そのとき修道院の周囲には水はなかった。兄弟たちの数は増えると、彼らは困り果て、遠くから水を運んできていた。この原因のために、ある者たちは聖なる人にこのような不平を言った。「どうしてあなたは、何の考えもなしに、近くに水もないこの場所に居を定めて、修道院を建てたのですか。」そして、彼らは何度もこのように非難をこめて言った。聖なる人は彼らに答えた。

というのは、私はたった一人でこの場所で沈黙の行にふけりたかったのだが、神が聖なるご自身のお名前を讃えるために、このような修道院を建立することを欲されたのだ。だから、自らの祈りに専心し、無気力に陥ってはならない。というのも、もしも神が、言うことを聞かぬユダヤの民のために岩から水を吹き出させたのなら、日夜神にお仕えしているおまえたちを、神がお見捨てになることがあろうか。

そしてセルギイは修道士たちを自分たちの僧房に帰らせた。

セルギイご自身は一人の兄弟を伴に連れて修道院を出ると、修道院近くの低地に降りていった。老人たちがはっきり証言しているところによると、そのころそこに水はまったく流れたことはなかった。聖なる人は窪みに雨のあとに少し水が溜まっているのを見つけると、跪いて祈りはじめた。

祈り：

神よ、父なる主、イエス・キリスト様。天と地、見えるものと見えざるものをお造りになられた方。無から人間をお造りになり、罪人たちの死をお望みにならず、その生をお望みになる方。このゆえに、私たち、罪深い、それに値しないそなたの僕どもは祈りを捧げるのです。いまこのとき、私たちの願いをお聞き届けください。ご自身の栄光をお示しください。あなたのたくましい右腕がモーセをとおして砂漠で奇跡をおこなわれたように、モーセがあなたのご意志によって岩から水を吹き出させたように、ここ、この場所でもあなたのお力をお願ひください。というのは、あなたは天と地の造り主なのですから。この場所で私たちに水をお与

えください。あなたがあなたを畏れ、あなたの御名に、父、子、聖霊にいまもつねに永遠に  
誉れを加える者たちの言うことを聞いてくださることを、みながわかるようにしてください。  
アーメン。

聖なる者がこれを言い終わり、この場所に十字を切ると、突然大きな泉が湧きだした。この泉  
はいまに到るまでみなが見ることができるし、修道院のあらゆる必要のために、人々は神とその  
お気に入りの者セルギイに感謝しながら、この泉から水を汲むのである。信仰をもってここに来  
る者たちのたくさんの治癒の業が、この水ゆえに成就され、さまざまな病気を病む人がここで治っ  
た。まさにこの水を汲んだ人が治癒したばかりではなく、遠くから人を遣ってこの水を汲ませ、  
自分のところに持ってきた人々も、自分の病人たちにこの水を飲ませたり、降りかけたりして治  
癒を得たのである。それは一人二人ではなく、数え切れないほど多くの人々がいまに到るまでそ  
うしているのである。そのときから10年か15年ほどその泉はセルギイの泉と呼ばれていた。と  
ころが、深い考えをもったこの人は、誉めたたえられることを嫌って、このために不機嫌になり、  
こう言った。

あなたがたが、私の名前にちなんで泉を名づけたことを、私が金輪際聞かなくてすむよう  
にしてほしい。この水を与えたのは私ではなく、主がそれにふさわしくない私たちに泉を与  
えてくださったのだから。

聖なる人の祈りによって幼児が生き返ったことについて

修道院の近郷に住んでいるキリストを愛するある人が、聖セルギイに大いなる信心を抱いてい  
た。この人の息子は、まだ幼く、彼にとっては一人息子の赤ん坊だったが、病気になってしまっ  
た。赤ん坊の父親は、かの男の善行を知っていたので、修道院の聖なる人のところに連れて行っ  
た。というのは、「もしも息のあるうちに神の人のもとに連れて行けば、この人が必ず元気にし  
てくださる」と考えたのである。赤ん坊を修道院に連れて行って聖なる人に祈ってもらうように  
頼んだ。

だが、この人が熱心に頼んでいるうちに、重い病気を患った赤ん坊はみるみる弱っていき、息  
絶えた。自分の息子が死んだのを目の当たりにしたこの人は、あらゆる望みを失って号泣にわが  
身を委ねた。

ああ、なんということでしょう。神の人よ。私は信仰をもって、涙に暮れ限りない悲しみに  
を抱かれながらあなたのもとに参りました。慰めを得ることができると考えたからです。そ  
れなのにいま、慰めのかわりに大いなる悲しみをただけです。これならば、家においてこの赤  
ん坊を死なせてやるほうがよかった。私はつらい。私は何をしたらよいのでしょうか。これよ  
りつらくこれより恐ろしいことが何かあるのでしょうか。

この人は、死んだ息子をおさめる柩を誂えに出かけ、死人を聖なる人の僧坊に残していった。聖なる人はこの人を気の毒に思って跪いてその死者のために祈りはじめた。すると突然、赤ん坊は生き返って彼の魂は体に戻り、動きはじめた。

赤ん坊の父は、埋葬に必要なもの一式をそろえて戻ってきた。この人を見ると、聖なる人は言った。「人間よ、どうしてそなたは、よく見極めもせぬうちに、急いで行ってしまったのか。おまえの赤ん坊は死なずに生きておる。」しかし、この人は信じなかった。というのは、この人は、赤ん坊は死んだことを確信していたからである。近寄ってみると、聖なる人が言ったとおり、彼は赤ん坊が生きているのを見て、神に人の足もとに身を投げ出し、彼に感謝を捧げた。聖なる人は彼に言った。

そなたは間違っただけじゃ、人間よ。そなたは自分の言っていることがわからないのだ。そなたの赤ん坊は、ここに連れてこられるとき、道中の寒さのためにぐったりなってしまうと、それがそなたには赤ん坊が死んだように思えただけだ。いま赤ん坊は僧坊の暖かさと温まって、それを赤ん坊が生き返ったようにそなたが思っているだけだ。しかし、みなが復活を遂げるときまで、誰も生き返ることはない。

しかし、この人は頑強に言い張った。「いいえ、あなたの祈りによって赤ん坊は生き返ったのです。」聖なる人はこのことを誰にも言っただけとはいけず、こう付け加えた。「もしもそなたがこのことを言いふらしたならば、おまえは間違いなく害を被り、赤ん坊は永久に失われてしまうだろう。」この人は誰にも言わないと約束し、元気になった赤ん坊を受け取って自分の家に連れて帰った。彼は黙っていることもできず、かといって、話して回ることもできず、ただ自分の心のなかで、「私たちの目が見た<sup>156</sup>」驚くべき栄えある奇跡を起こされた神に賞賛を捧げた。この奇跡は、聖なる人のある弟子から聞いたものである。

#### 悪魔に取り憑かれた貴頭について

我らが師父の大修道院から遠く、ヴォルガという名の川のほとりに住んでいた、もう一人の貴頭がいた。いま言った貴頭は、絶えまなく昼も夜も悪魔に酷く苦しめられていた。それは、鉄の鎖も引きちぎってしまうほどであった。どうやっても、一〇人かそれ以上の力のある男たちが束になっても、彼を取り押さえることができなかった。彼にぶん殴られる者もいたし、歯で噛みつかれる者もいた。このようなわけで、この男は追手たちから、荒野の人気のない場所に逃れて、そこでひどく悪魔に苦しめられていたが、ふたたび見つけ出されて縛りあげられ、うちに連れ返された。

<sup>156</sup> 『申命記』10章21節; 『ヨハネによる福音書』1章1節。

彼の親戚の者たちは、あの聖なる人について、神がこの聖なる人を通してどれほどの奇跡をおこなわれたかを聞きつけて相談し、彼を修道院のこの神の人のところに連れてきた。道中、彼を連れてきた人々は多くの困難に遭遇した。この貴顕は悪魔に取り憑かれて、大きな声で叫んだ。

何という乱暴なことをするのだ。おまえたちは私を力づくで、どこに連れて行こうというのだ。私はセルギイなんて奴のことを聞きたくもないし、ましてや見たくもない。俺を自分の家に戻してくれ。

この貴顕が行きたがらなかったが、しかしながら、男たちは力づくで彼を引っ張っていった。彼らが修道院に近づくと、悪魔憑きの男はすべての縛から抜け出してみなに飛びかかり、こう言った。「俺はそこに行きたくない。行きたくはないのだ。俺はもと来たところに帰りたい。」彼が発する叫び声はあまりにも大きく鋭かったので、彼は自分自身がバラバラになりそうで、また、修道院のなかにもその怒号と叫びが聞こえるほどであった。人々はこのことを聖なる人に伝えた。至福の人は木鐸を打つように命じ、兄弟たちが集まってくると、病人のための感謝祈禱を歌いはじめた。これが終わると、悪魔憑きの男は少しだけ落ち着きだした。彼が修道院に連れてこられると、神に似たる人は手に十字架をもって教会から出てきた。彼が十字架をこの悪魔憑きにかざすと、悪魔憑きは大きな声で一声叫ぶと、たちまちいまいた場所から飛びさすった。その場所のそばに、雨水が溜まった水たまりがあったのだが、この病者はそれを見ると、その水たまりの中に飛び込み、こう言った。「この恐ろしい炎のためにどれほど苦しい思いをしたことか。」そして、このときから、キリストの恩寵と聖なる人の祈りのためにこの人はすっかり癒え、理性がふたたび彼のもとに戻ってきて、彼は筋の通ったことを言いはじめた。なぜ叫んだのかと人々が彼に質問すると、彼はこう答えて物語った。

私がこの聖なる人のところに連れてこられて聖なる人が私に十字架をかざしたとき、私は十字架から炎が吹き出し、その炎が私を包むのを見ました。そのとき、私は水の中に飛び込んだのです。というも、その炎のために焼け死ぬと思ったからです。

そしてこのあと、この人は数日の間修道院のなかにとどまったが、キリストの恩寵によって穏やかで折り目正しいままであった。喜びながら神を讃えつつ、また、この聖なる人へは称賛を捧げながら、健康なままで家へと帰った。というのは、かの聖なる人の祈りによって彼は治癒したからである。このときから、高きよりの恩寵によって、セルギイは、偉大なるみんなの教師となった。すでにおびたしい数の人々が、さまざまな場所と町々から合流してきた。ことに齋戒をおこなう身分のあらゆる人々が、自らの修道院をあとにして彼のもとにやってきた。彼とともに修道生活を送り、彼から徳を教わることがより自分のためになると考えたからである。そして、齋戒をおこなう身分の人々や貴顕だけではなく、自分の村で暮らすふつうの人々も含めてみんなが、

彼を預言者の一人であると考えていた。

あるときのことである。この聖なる人は、自らのいつもの決まりにしたがって、一晩中寝ずに兄弟たちについて、主が日々の労働と功業において彼らを助けて下さいますようにと祈っていた。彼は晩方かなり遅い時刻に祈っていたのだが、「セルギイ！」という声が聞こえた。彼は夜中の尋常ならざる呼び声に驚き、お祈りを唱えてから、この声が誰のものかを確認するために僧坊の窓を開けた。すると突然、奇跡のような幻視を見た。夜の闇を追い払うまばゆい光が空から流れ出し、夜が、その眩さにおいて昼間の光をも凌ぐ光によって照らし出された。ふたたび次のように言う声が聞こえた。

セルギイよ。おまえは自分の子らのことを祈っているが、主がそなたの祈りを聞き届けられた<sup>157</sup>。目を凝らしてみるのがよい。聖なる生の源なる三位一体の名のもとにおまえの群れへと合流した、おまえによって教え導かれる数多くの修道士たちが見えるだろう。

聖なる人が目を凝らして見てみると、多くの非常に美しい鳥たちが目に入ってきた。鳥たちは、修道院のなかへばかりではなく、修道院の周りにも飛び集まってきた。すると、次のように言う声が聞こえてきた。

おまえはこれら沢山の鳥を見ていたが、その鳥たちと同じように、おまえの弟子たちの群れは数多くなり、彼らがおまえの足跡を辿ろうと努めるかぎり、おまえがいなくなっても尽き果てることはないだろう。

聖なる人は、このような得も言われぬ幻視に驚いた。このような幻視の目撃者となり、証人となってもうらために、彼は叫び声を上げて先ほど名前が挙がったシモンを呼んだ。この者が近くにいたからである。シモンは長老の呼ぶ声に驚いてすばやくやってきた。しかし、その幻視の全貌は見ることができず、その光のほんの一部を見ることができただけだったが、それでもとても驚いたのである。聖なる人はシモンに、自分が見たこと、聞いたことの事の次第を順を追って物語った。二人は得も言われぬ幻視に震え戦きながら、いっしょに喜んだ。

#### 共住制の導入について<sup>158</sup>

<sup>157</sup> 『詩篇』7 篇10 節。

<sup>158</sup> 修道院というものはそもそも、その内部の構造によって、共住制の部分と非共住制に分けられていた。聖セルギイに到る大部分のロシアの修道院は、非共住制であり、そうした非共住制の修道院では、修道士たちは教会の儀礼のさいにのみ集まるだけであった。それぞれの修道士が自分で、自らの僧坊、衣服、食べ物について心配しなくてはならなかった。聖三位一体修道院は、非共住制の修道院として創建された（「必需品の豊穡について」参照）が、のちに聖セルギイがそこに共住制を導入した。共住制のもとにあっては、修道士たちは財産の私有が

こんなことがあったあと、あるとき、コンスタンティノープルの総主教のもとから、聖なる人のもとに派遣されたギリシア人たちが到着した。彼らはこの聖なる人に跪拝して言った。「全世界の総主教、尊師フィロテオス殿下<sup>159</sup>がそなたを祝福しておられる。」それと同時に彼らは、総主教からの贈り物、十字架<sup>160</sup>、パラマンディアス<sup>161</sup>、スヒマ<sup>162</sup>、それから書簡を彼にわたした。聖なる人は彼らに言った。

あなた方がほかのどなたかのところに派遣されたのではないかどうか、確かめてください。やんごとなき総主教殿下からこのような贈り物を受け取るにすれば、この罪深くそれにふさわしくない私は、何者だというのでしょうか。

彼らは言った。「師父よ、私たちはあなたについて、何も誤りを犯してはおりません。私たちはあなた、聖なるセルギイのもとに派遣されてきたのです。」長老は地に着くほど深いお辞儀をした。そのあと彼は彼らの前に食卓をしつらえ、彼らをよくごちそうし、修道院でよく休息を取るよう命じた。自分自身はといえば、総主教から受け取った書簡を携えて府主教アレクシイのもとに行き、その書簡を彼にわたし、到着した者たちについて知らせた。府主教は書簡を朗読するよう命じた。そこに書かれている内容は以下のとおりであった。

書簡：

神のお慈悲により、コンスタンティノープルの大主教にして全地公会の総主教であるテオフィロスは、聖霊において息子であり、我らが謙抑の仕え手であるセルギイに書簡を送達する。恩寵と平和と我らの祝福が、そなたとともにあるように。我らは、神に拠って徳高きそなたの暮らしぶりを耳にし、神を褒め称え、称賛した。しかしながら、ある重要なことがまだ十分ではない。そなたたちのもとでは、共住修道制が整えられていないのだ。なんとなれ

---

許されなかった。

<sup>159</sup> コンスタンティノープル総主教フィロテオス・コッキノスのこと。1353-1354、1364-1376 年在位、1379 年没。聖セルギイがフィロテオス・コッキノスから書簡と贈り物を受け取ったのは、最初の在位期のことであると伝統的に考えられてきた（ゴルピンスキイ、ボリソフ）。しかしながら、その時期が1364 年から1376 年のあいだであったとする説が歴史家たちから提起されている。とはいえ、それぞれが指摘する具体的な日時は異なっている。たとえば、クロスは1364 年から1365 年のあいだ、ペロブロヴァは1374 年以降、アヴェリヤノフは1374 年夏、クチキンが1377 年としている。

<sup>160</sup> 総主教フィロテオスから恵贈された聖遺物の黄金の十字架は、セルギエフ・ポサド（旧ザゴルスク）国立歴史芸術博物館に所蔵され、現存している。

<sup>161</sup> 「マントに付属するもの」という意のギリシア語に由来する、十字架、キリストが受難したさいのさまざまな道具類、アダムの頭蓋が描かれた四角形の布地。小スヒマ位階をもつ修道士が身につける持ち物で、衣服の下の身体にまとう。セルギイに贈られたパラマディアスは残っていない。

<sup>162</sup> 修道士の祭服。セルギイに贈られたスヒマは現存していない。

ば、そなたもよく知るとおり、あらゆることを理性で把握した、神の父<sup>163</sup>なる預言者ダビデご自身が、「見よ、兄弟たちがともに座っている。何という恵み、何という喜び」という以外の何もをも、強く称賛することができなかつたからである。このゆえに、私はそなたたちにめでたき助言を差し上げる。共住修道制を確立するがよい。そして、神の慈悲と我らの祝福がそなたとともにあるように。

長老は府主教に訊ねてこう言った。「聖なる府主教猥下、そなたはいかようにお命じになりますか。」府主教は長老に答えてこう言った。

神に似たる人よ、そなたはそのような福を受けるに値する。というのも、神は自らを讃える者たちを讃えるのだから。そなたの修道院の名前が遠い国々まで達し、偉大なる全世界の総主教猥下でさえ偉大なるご利益のためにそなたに助言を与えている。私たちも同様に切にそのようにすることを助言し、そなたを心より讃える次第である。

そして、このときから聖なる人の修道院で、共住修道制が調えられた。至福のいと賢き牧者が、兄弟たちにたいして仕事を振り当てた。ある者は財産の管理を、ほかの者たちには厨房とパン焼きを、さらに別の者にはあらゆる精勤をもって病者に仕えることを命じた。教会のなかでは、教会長<sup>164</sup>、その次に副教会長、堂守、そのほかの職を置いた。このようなことすべては、奇跡のようなこの人が上首尾に調えた。彼は聖なる師父たちの教えを固く守ることを命じた。誰も何物も個人的に受け取ってはならなかつたし、自分の所有物であると言ってはならず、すべては共有のものとして所有されなくてはならなかつた。そして、そのほかの秩序についてはすべて、理性に長けた父が、そうあるべきように手際よく取り決めた。しかしながら、これは彼の事績の話であつて暮らしの物語ではない。多くのことを力強く語ることができるが、私たちはここでその話を止めにするにすることにして、もとの物語に戻ろう。

そして、こうしたことすべては奇跡の師父が首尾よく調えたので、弟子たちの数は増えた<sup>165</sup>。弟子たちが増えれば増えるほどますます、善き人々の宝物庫なる神<sup>166</sup>は必要なものを差し出してくださった。修道院での捧げ物が増えれば増えるほどますます、巡礼者たちの数は跳ね上がっていった。何も持たない人が修道院に来たとしても、手に何物も携えずに立ち去ることはなかつた。至福の人が慈善を止めたことはいまだかつてなかつたし、修道院で仕事に就く者たちにも、乞食

<sup>163</sup> 教父文学や儀礼のテキストにおいて、イエス・キリストと血筋がつながる親戚筋の聖書の義人たちに用いられた語。

<sup>164</sup> 教会の建物を管理したり、規則にしたがって教会儀礼がおこなわれているか否かを点検する教会の勤務人。

<sup>165</sup> 『使徒言行録』6章7節。

<sup>166</sup> 教会に儀礼のテキストのなかで、神は「善の貯蔵庫」と呼ばれる。

と巡礼者たちには雨露をしのぐ場所を与えるよう、また、求める者たちには差し出すように教えてこう言っていた。

もしも不平を言わずにわたしの教えを守るならば、主から報いを受けるだろう。また、わたしがこの世の生から立ち去ったあとにも、このわたしの修道院はたくましく成長し、キリストの恩寵によって永の年月のあいだ、毀たれることなく建ちつづけるであろう。

そして、かくのごとくして彼の手は、満々と水を湛えた川が静かに流れるごとくに、求める者たちに差し伸べられた。厳しい寒波や雪交じりの強い風が吹き荒れる冬の寒いときに、誰かが僧坊から出ることができなかつたとしても、こういうことのためにどれだけ長い時間その人が僧坊に閉じ込められたとしても、そんな事が万一あっても、修道院ではあらゆる必需品を受け取ることができた。巡礼者や乞食たちのなかで病に倒れた者が出たとしても、何日も何日も十分な静謐のなかで食べ物を与えられて休むことができたし、そういう人が必要とする者は、聖なる長老の教えにしたがって、何不自由なく受け取ることができた。それは今日に至るまでそのとおりののである。多くの国からここに通じる道が縦横に走っているのだから、公たちも軍司令官たちも数しれぬ兵士たちもみな、必要なときは、汲めども尽きぬ泉のように、然るべき敬意を払われつつ十分な量の必需品を受け取り、道中に立出ることができた。十分な量の必要な食料と飲み物を受け取ることができた。修道院で働く者たちはこのすべてを喜んですべての人々に惜しみなく与えた。人々は、教会のどの場所に食物と飲物があるのか、どこに穀物と調理された食べ物があるのかを知っていたが、このすべては、キリストとそのお気に入りの者である奇跡の人、聖なるセルギイの恩寵によって増えていったのである。私たちは私たちの物語に戻り、次のことを語ろうと思う。

キルジャチ川畔における修道院の創建<sup>167</sup>について

幾ばくかの時が経ってふたたび騒乱がはじまった。この神に似たる人から発出する輝きに耐えきれなくなった、善を憎む悪魔は、神に似たる人が彼を貶めているのを見ると、ある人々の考えにセルギイが修道院長職に留まることを望まない考えを吹き込んだ<sup>168</sup>。そういう日々がつづいたある日のこと、それは土曜日であったが、晩禱を歌っているとき、修道院長セルギイは聖職者の

<sup>167</sup> この事件が起こった日時については、さまざまな説が存在するが、とりわけ重要なものは以下のものである。ボリソフは1355年から1357年までのあいだとし、アヴェリヤノフは1358年とし、クロスは1365年から1373年までのあいだとし、スクリニコフは1371年とし、アヴェリヤノフは1377年としている。

<sup>168</sup> ほかの編集本でセルビア人パホーミイは、セルギイのキルジャチへの退去について別の説明をしている。第3、第4、第5パホーミイ編纂本では、「沈黙」の欠如が原因であるということになっている。しかしながら、拡大版では、パホーミイの初期の編纂本のバージョンが選ばれている。これは、エピファニーのバージョンに最も近かったと考えられる。現実味のある事の真相として取り沙汰されるのは、三位一体修道院の修道士たちが共住制の導入に反対したというものである（ゴルビンスキイ、クチキン、ボリソフ）が、アヴェリヤノフは、セルギイがアレクシイの後継者になることを拒絶したためであると考えている。

祭服を身にまとして至聖所にいた。彼の兄であるステファンが左手の合唱隊のなかにおいて、典礼長<sup>169</sup>に訊ねた。「誰がそなたにこの本をわたしたのか。」典礼長は答えた。「修道院長様が私にそれをおわたしになったのです。」すると、ステファンは言った。「この場での修道院長とは誰なのか。この場所に最初に居を定めたのは、わたしではなかったか。」すると、ほかもステファンは、その場にそぐわない言葉を発した。すると、これを聞いて至聖所にいた聖なる人は、何も言わなかった。彼らが教会から出ていくと、聖なる人は僧坊へと行かず、すぐに修道院をあとにしたが、そのことを誰も知らなかった。彼はたった一人でキネラに通じる道を出立したのである。夜が来ると、彼は荒野で寝た。朝、彼は立ち上がり、自分の道程を進みつけ、マフリシチェにある修道院<sup>170</sup>に到着し、この修道院にいたステファン<sup>171</sup>に、自分に荒野の場所を教えてくれる兄弟修道士を紹介してくれるように頼んだ。あちらこちらの場所を経廻った結果、彼らは最終的にそばにキルジャチという名の川が流れている美しい場所を見つけた。その場所にいまは、いと清らかなる女主人、我らが神の御母の敬虔なる福音（受胎告知）の修道院<sup>172</sup>が建っている。

私たちがすでに言ったとおり、セルギイは修道院を立ち去ったわけであるが、人々は彼を見つけることができなかった。そのとき、みなはびっくり仰天して、彼を探すために、ある者は荒野に、別の者は町にという具合に、あちらこちらに兄弟修道士を送った。というのも、彼らはこのような牧者と別れることができなかったからである。兄弟たちの一人がセルギイのことを知るために、マフリシチェのステファンのところに出かけて行き、セルギイのことを知ろうとした。すると、セルギイが修道院を建てるために、そこからさらに奥地の荒野に去ったと聞くと、ひどく喜んだ。そして、喜びに包まれて彼はこの聖なる人のところに行くことを望んでいたが、しかしながらそうは言っても、聖なる人への心配のために打ちひしがれている兄弟たちを慰めるために、修道院に戻った。兄弟たちは聖なる人についての知らせを聞いて非常に喜び、あるときは二人で、あるときは三人で、あるときにはそれ以上の人数で、彼のもとに通いはじめた。

先に述べた我らが師父セルギイをはじめ、彼らが重い労働から解放されて一休みするために、僧坊を建てた。そのあとでセルギイは、自分の二人の弟子たちを至聖なる府主教アレクシイのもとに遣わして、教会創建のための祝福を求めた。そして、祝福を受けると、はじめに次のような

<sup>169</sup> 祈禱歌の合唱のまえに導きの旋律や祈禱の言葉の最初の数行を朗唱する教会の勤務人。

<sup>170</sup> 三位一体マフリシチェ修道院は三位一体セルギイ大修道院の東、マフラ川がモロクチャ川に流れ込む場所に、マフリシチェのステファンによって創建された。創建の年代は、1350年台とされている。修道院は1923年に閉鎖され、1993年に復活した。現在は、聖三位一体マフリシチェのステファン総主教直轄女子修道院（ウラジーミル州アレクサンドロフ地区マフラ村）と呼ばれている。

<sup>171</sup> 1406年6月14日に没したマフリシチェの聖ステファンのこと。マフリシチェの聖三位一体修道院、三位一体アヴネジャ修道院の創建者で初代の修道院長。三位一体アヴネジャ修道院は、1370年以降に、アヴネジャ川がスホナ側に流れ込む場所、現在のヴォログダ州メジュドゥレチェンスキイ地区に創建され、1764年に廃止された。その三位一体聖堂は地区の教会となったが現存しない。記念日は6月14日（新暦27日）。

<sup>172</sup> キルジャチ福音（受胎告知）修道院のこと。キルジャチ川畔にラドネジのセルギイによって創建され、1764年に廃止され、1995年に聖福音（受胎告知）女子修道院（ウラジーミル州キルジャチ市）として再開した。

祈りを捧げてから、教会を建立しはじめた。

太古において数々の偉大なる奇跡でイスラエルを信仰に導き、自らのモーセに多くのさまざまな徴をお与えになり、ゲデオンには羊毛の助けで勝利の原イメージをお示しになった<sup>173</sup>力の神なる主よ。いまは、天なる主人よ、万物の創造主よ、自らの罪深い奴隷であり、そなたに祈りを捧げる私の言葉をお聞きください。私の祈りをお聞き届けになり、あなたのお許しにより、あなたの栄えと、あなたの聖なる御母への賞賛と誉れ、聖なるその福音（受胎告知）のために、ここでつねにそなたの名前、父と子と聖霊がつねに讃えられるようにと創られたこの場所を祝福してください。

そして、彼は祈りを捧げ終えた。そして、キリストの恩寵によって事は首尾よく進んだ。この事業を助ける人々、修道士たち、世俗の人々がたくさんいて、ある者たちは僧坊を建て、別の者たちは修道院の勤めをおこなった。ときには、公たちも大貴族たちも彼のもとにやってきて、修道院の建立のために銀を惜しみなく差し出した。そして、かくのごとくして、神の恩寵によりまもなく教会は建てられ、多くの兄弟たちが集まった。

聖三位一体のある者たちは、自らの魂の師との長い別離に耐えきれず大いなる愛に燃えて町の府主教のもとに行き、こう言った。

聖なる府主教祝下！尊き府主教祝下であるそなたは、私たちがその魂の師と別れ別れになったことをご存知です、私たちはいま、牧者をもたぬ羊のように暮らしております。修道司祭たち<sup>174</sup>、長老たち、神に集められた兄弟たちは、師父との別離に耐えきれず修道院から退去しております。そして、私たちはもはや聖なる彼の方のご尊顔を拝することができません。このゆえに、神によって私たちに与えられた統括者よ、そなたがもしお許しになるなら、私たちがあの方のことを悲しみ、絶望に落ち込んでしまわないように、あの方に自らの修道院に戻るようにお命じください。

府主教は彼のもとにきた兄弟たちからこのことを聞くと、一刻の猶予もなくただちに二人の掌院、ゲラシムとパーヴェル<sup>175</sup>を遣わした。聖なる書物からいくつかの教えをセルギイに示した。なぜなら、アレクシイは父のように彼を教え、息子へのように訓戒を与えたのである。掌院たちは到着すると、普段どおりにセルギイに挨拶をして、こう言った。

<sup>173</sup> 『士師記』6章36-40節。

<sup>174</sup> 司祭の位階をもっている修道士のこと。

<sup>175</sup> ドゥハニナによれば、1365年に府主教使節としてネージニ・ノヴゴロドに行ったゲラシムとパーヴェルと同一人物である。

そなたの父、府主教アレクシイはそなたを祝福している。アレクシイ尊師はこう言った。「遙かな荒野におけるそなたの暮らしぶりを聞いて、その場所で神の御名が多くの者たちによって讃えられることになることを余は喜んでい。しかし、そなたによって教会が建立され、神によって兄弟たちが集められるだけでは十分である。そなたの弟子たちのなかで、徳行において秀でているとそなたが考える者を、自らの代わりに自らの修道院の導師とするがよい。そして、兄弟たちが長いあいだ、聖なるそなたの神への似姿との別離を悲しみ、修道院から退去しないように、自分自身は聖三位一体の修道院にもどるがよい。そなたを怒らせる者がいないように、そなたを憤らせた者たちはわたしが修道院から追放する。だが、私たちの願いは聞き届けてほしい。神の慈悲と私たちの祝福がそなたとともにあるように。」

これを聞くと、聖なる人は彼らにこのように言った。「わが主人なる府主教猊下に言ってほしい。あなたのお口から発された言葉は、キリストから発された言葉と同じです。私は喜びをもって受け入れ、そなた様に背くことは一切いたしません。」

聖なる人のもとから戻ると、掌院たちは府主教にセルギイが言ったことを伝えた。府主教はこれを聞いて完全なる彼の服従を喜び、すぐに聖職者たちを派遣した。彼らは、聖なる女主人、我らが神の御母の福音（受胎告知）の名において教会を聖別し、その教会はいまに到るまでキリストの恩寵によって立っている。セルギイはロマンという名の自分の弟子たちの一人<sup>176</sup>を府主教のもとに派遣し、府主教アレクシイはかくして、ロマンを祝福して司祭に任じ、新しい修道院の修道院長とした。そして、聖なる人はその場所から聖なる三位一体の修道院へと戻った。

聖なるセルギイが非常に望んだのは、沈黙行者イサアキイ<sup>177</sup>が聖なる福音（受胎告知）修道院の院長になることだった。しかし、この人は、私たちがすでに見たとおり、孤住と沈黙を愛していたので、自分が最後まで沈黙をとおすことを聖なる人に熱心に懇願し、いっさい何もしゃべらなかつた。聖なる人は彼の頼みに答えてこう言った。「我が子、イサアキイよ。もしも沈黙することを望んでいるなら、明日、神の奉事が終わってから、北の扉<sup>178</sup>に行くがよい。わたしがそなたが沈黙することを祝福しよう。」この者は、聖なる人の言葉とおおり、神の勤行が終わったのを見届けると、北の扉に來た。聖なる長老は、手で彼に十字を切つて言った。「主がそなたの望みを叶えてくださいますように。」彼がこの人を祝福すると、なにか巨大な炎が彼の手から出るのが見えた。この炎は、先述のイサアキイの全身を包みこんだ。この日から、この者は、聖なる

<sup>176</sup> キルジャチ福音（受胎告知）修道院の初代修道院長となり、1392年7月29日に没した、キルジャチの聖ロマンのこと。記念日は、7月29日（新暦8月11日）。ウラジーミル、モスクワ、ラドネジ教区の聖人。

<sup>177</sup> 1387年または1388年に没した、沈黙行者聖イサアキイのこと。記念日は5月30日（新暦6月12日）。ラドネジ教区の聖人。「至福のセルギイとともに仕えた天使の幻視について」、「聖なる人を神の御母が訪れたことについて」の章にも言及されている。

<sup>178</sup> 聖堂の真東に位置する正教のイコノスタスの下壇両脇にある、至聖所へと通じる扉（門）の北側のものを指す。王門の扉が2枚両開きであるのにならして、これらの門は1枚片開きである。

セルギイの祈りのおかげで情欲から解放された者として完全な沈黙のなかにいた。もしもときどき小さな声で何かを言いたくなくても、聖セルギイのこの祈りのおかげで、彼はけっして言葉を発さずにすんだ。このように自分の生涯のすべての日々を、「私は聾のように聞かず、啞のように自分の口を開かない<sup>179</sup>」とされているように、沈黙のうちに過ごした。かくのごとくして、彼は自分の体を、あるいは齋戒によって、あるいは徹夜禱によって、あるいは沈黙によって、そしてついには、服従によって、最後の自分の息を吐き終えるまで、自分の身体を抑制しつづけ、偉大なる禁欲の功業を成し遂げたのである。そして、かくのごとくしてこの沈黙のなかで、この人が幼い頃から熱愛しつづけた自らの主に自らの魂をわたしたのである。

修道院に聖なる人の帰還の知らせが伝わると、兄弟たちは彼を出迎えに出た。兄弟たちは彼の姿を見ると、二番目の太陽が輝き出したように思われた。そして、「すべての者たちのことを気遣ってくださる神よ、そなたに栄えあれ」という言葉が、すべての人々の口々から漏れた。その光景は奇跡のようであり感動にふさわしかった。師父の手に接吻を繰り返す者もいれば、その足に接吻する者もいれば、衣服に触れてそれに接吻する者もいれば、彼をただひと目みたいばかりに駆け寄ってくる者もいた。みながともに喜び、自らの師父の帰還について神を讃えた。師父の方はどうだったかと言えば、彼はともに集まった自らの子らを見て、霊によって喜んでいたのである。

#### 主教ステファン<sup>180</sup>について

さらにそのほかの奇跡の成就と預言の賜物について回想する必要があるのだから、私たちは驚くべき物語<sup>181</sup>に戻ることにしよう。次に語られるのは、主教ステファンのことである。ステファンは徳行高い男であり、その暮らしぶりにおいて敬虔であり、子供時代から魂の清らかさにおいて光り輝いていた。これから、この主教ステファンのことが語られることになる、ステファンは、この至福の我が師セルギイにたいして、キリストにおいて大いなる霊の愛を抱いていた。あるとき、ペルミという自らの主教区から、ツァーリの君臨する町、モスクワへと旅をしなくてはならぬ事態が出来た。この主教がたどる旅の道筋は、聖セルギイの修道院からおおよそ一〇ポプリシチェ<sup>182</sup>か、さらに多くの距離を隔てる場所を通っていた<sup>183</sup>。そして、彼は道中を急いで

<sup>179</sup> 『詩篇』38 篇14 節。

<sup>180</sup> 1396年4月26日に没したペルミのステファンのこと。1383年にペルミ主教に叙聖された。記念日は4月26日(新暦5月9日)。「ペルミのステファン伝」は、ペルミのステファンを個人的に知っていた、エピファン・ブルムードゥルイによって書かれた。

<sup>181</sup> この事件は、ステファンがペルミ主教に叙聖された1383年以降のことであるが、ゴルビンスキイは1390年のこととし、ボリソフは1386年のこととしている。

<sup>182</sup> 中世ロシアの距離の単位。ギリシア・ローマのマイル(1マイル約1480メートル)に相当する。

<sup>183</sup> 「必要なものが潤沢であることについて」の章にも言及されている、旧ペレヤスラヴリ街道のことであると考えられる。パホーミイの第3編纂本と第5編纂本が、ここで言及されている距離の半分の5ポプリシチェ(約7.5キロ)としているが、興味深いことに、この5ポプリシチェという距離は、主教ステファンが立ち止まった場所とされる「跪拝の丘」と、修道院の距離に合致している。

いたために、聖なる人の修道院に立ち寄ることは叶わなかったので、帰りの道中でこの神に似たる人の修道院に立ち寄ることに決めた。

この奇跡の主教ステファンが聖なる人の修道院のそばを通りかかったとき、彼は立ち止まって「その故がある<sup>184</sup>」と定められた祈りの言葉を朗唱し、聖なるセルギイが暮らされていたその方向へと深々とお辞儀をして言った。「魂の兄弟よ、そなたに平安あれ。」至福の人はそのとき、兄弟たちとともに食卓についていた。この人はこのとき霊によって、主教ステファンが何をしたのかを悟り、この聖なる人は食卓から立ち上がって少しのあいだ立っていたが、祈りの言葉を唱え、お辞儀をしてこう言った。「キリストの群れの牧者よ、そなたは喜ぶがよい。神の平安がそなたとともにあるように。」兄弟たちは、聖なる人がしきりに背いて、定められた時間の前に立ち上がったことに驚いた。彼らのうちの何人かは、聖なる人が立ち上がったのはたまたまではないことを悟った。なにか幻視を見たのだと思ったのである。食事が終わると、弟子たちは聖なる人に何が起こったかを聞いた。聖なる人は彼らにすべてを物語ってこう言った。「まさにこのときに、主教ステファンはモスクワの町に向かう途上だったのだが、聖なる三位一体修道院にたいしてお辞儀をして、謙抑なる私たちを祝福したのだ。」聖なる人は、その行為がなされた場所を教えた。この人の弟子たちの何人かが名指された場所に赴き、このことを証言をもって確かめようとした。彼らは主教の随員を追いつき、それがほんとうかどうかを訊ねた。聖なる人によって語られたことは真実であることが確かめられた。彼らは、聖なる人が身をもって示したこの預言の才に驚きを覚え、神が自らの聖なるお気に入りの者をとおして成し遂げられた奇跡について、神に称賛を捧げた。

#### アンドロニコフ修道院の創建

ここでは、至福の人の弟子たちによって創建された修道院の数々について話さなくてはならない。これから述べる物語がこのことについて語るであろう。まずはじめに、その名をアンドロニコ<sup>185</sup>という彼の神に似たる弟子の話からはじめよう。この者は、セルギイと同じ町と在所の出身で、若年のころ、この修道院の至福の父のもとにやってきて、彼の手によって修道生活を送るにふさわしい者とされた。永の年月、彼はセルギイのもとで完全なる服従のなかで暮らし、考えられる限りのあらゆる徳で飾られた。そのゆえにセルギイは、その善良な気質、彼において花開いた徳を愛でて、この人をことのほか愛した。そして、セルギイは彼のために、よき人生があるようにと神に祈りを捧げた。多くの年月が経って、この奇跡の男アンドロニコは、修道院を創建し、そこで共住の生活を営みたいという拔ききたい欲求に捕らえられた。そして、彼はこのことについて思案を巡らせ、神に望みをかけてこう言った。「もしもこれが神のお気に召すならば、自分

<sup>184</sup> 正教の祈祷歌。聖なる神の御母の名に捧げられた祈祷歌のなかで最も有名なものの一つ。

<sup>185</sup> 神に似たるモスクワのアンドロニコのこと。1373年6月13日没。救世主アンドロニコフ修道院の創建者にして初代修道院長。ラドネジの聖者会堂における記念日は、6月13日（グレゴリオス暦26日）。

はこれを実行に移せるだろう。」

そして、彼がこう考えていると、あるとき、神に似たるセルギイの修道院に、府主教アレクシイがセルギイを訪れるためにやってきた。なぜなら、アレクシイはいつもこの聖なる人にたいして大いなる愛をもっており、彼と魂の絆で一つになっていて、あらゆることについて彼と相談したからである。彼らが差し向えて話していたとき、府主教の話題がこのことに及ぶと、府主教は聖なる人に言った。「いと愛されたる人よ。そなたにある一つの善行を施してくれるようお願いしたいのだ。あなたの魂の愛が、私にその善行を施してくれるように。」長老はその高位聖職者に答えた。「聖なる猊下。私たちはそなたの手の中におります。聖なる猊下は何ものも禁じられておりません。」大主教は言った。

というのは、神がお助けくださるのなら、私は一つの修道院を創建したいと思っているからだ。というのも、あるとき、私がコンスタンティノープルから、私が府主教を務めるルーシの地に船で旅したとき<sup>186</sup>、海で烈風が吹き起り、大波に襲われて船が転覆しそうになり、すべての者たちが猛り狂う死に脅かされた。そして、船にいた者たちがみな神に祈りはじめた。私も彼らとともにこの恐ろしい災難のなかで、神が私たちを迫り来る災厄から救ってくださるように、全能の神に祈りはじめ、神に誓いを立てた。主が船着場に送ってくださった日の守護聖人の名前のために、自分は教会を建てましょう、と。そして、まさにこのときに、海で波が取り、大いなる静けさになった。私たちは8月16日に船着き場に到着したので、私は自分の誓いを果たしたいと思う。我らが神、イエス・キリストの、人の手で作られたのではない画像のために教会を建立し、キリストの恩寵に抛り立ち、共住生活を確立させたいのだ。そこで、私はそなたの慈悲にすがって、そなたのお気に入りの弟子にして、私のお気に入りの者であるアンドロニクを、私はそなたから賜りたいのだ。

聖なる人は司祭の願いを無下にはできず、アンドロニクを彼に賜った。府主教は修道院に大いなる寄進をおこない、アンドロニクを連れて去った。そして、府主教アレクシイは修道院を建立するのにふさわしい場所をヤウザ川のほとりに見つけた<sup>187</sup>。はじめに偉大なる主にして救世主、我らがイエス・キリスト、尊いその人の手によらない画像の御名において、教会が壮麗に建てられた。アレクシイはすばらしく教会を飾りあげ、コンスタンティノープルから自身がもちかえつ

<sup>186</sup> 府主教アレクシイが黒海で嵐に遭い、無事助かった暁に修道院を建立するという請願したのは、1354年にコンスタンティノープルへの1回目の旅の帰途であったと考えられる。プローホロフ、トゥリロフ、アレクセーエフをはじめ、2回目の旅の帰途だったと考える学者もいる。

<sup>187</sup> アンドロニク修道院の創建についての統一見解はないが、この事件は伝統的に1360年のこととされている。もっとも遅く年代を取る説で、1366年である。この修道院が府主教キプリヤンによって1391年から1392年にかけて創建されたという説があるが、これは明らかに誤りである。

た、金で装飾された素晴らしい尊いキリストの画像のイコン<sup>188</sup>を、その教会に安置した。イコンはいまに至るまでキリストの恩寵によってそこにある。府主教はさきに名前を挙げたアンドロニクに修道院長職を託し、修道院の創建に必要なすべてのものを贈呈し、このようにして共住制を確立した。しばらく経つと、聖なるセルギイが、自分の弟子によっておこなわれたことを見るために、この場所にやってくる、これを見て弟子を讃め、祝福して言った。「主よ、天から目を注いでご覧ください。この場所を訪れてください<sup>189</sup>。この場所は、あなたの御名を讃えるためにあなたのお望みにしたがって建てられたのです。」そして、魂のためになることを教え、自分の大修道院に戻っていった。

そして、到るところ、アンドロニクの奇跡のような修道院についての、盛んな名声が広まったため、多くの人々がこの場所に集まってきた。アンドロニクはすべてを上手に采配し、修道士たちの群れが大きくなればなるほど、より大きな功業を自らに引き受け、大いなる禁欲、終夜の徹夜、齋戒、祈りに没頭した。この栄えある男がどれだけのことを成し遂げたか、誰が語ることができよう。彼は各々を父のように教え導き、みなを賛同を勝ち得、罰し、祈りながら、見えない敵に立ち上がり、すべての者たちの重荷を担った。というのは、彼は、かくも穏やかな教師の、すべてを見透す弟子であり、頑健だったからである。兄弟の絆はますます強まり、神の恩寵と、善行に励む男アンドロニクの努力によって、修道院はますます大きく、栄えあるものとなった。そして、このように神のみ心に叶ってアンドロニクは長いあいだ生きながらえ、神によって彼に託された修道士たちの群れを首尾よく牧した。自分が主のもとに旅立つことを予感しながら、アンドロニクは自らの信徒たちを、サツヴァという名の、その善行によってまばゆく輝く自分の弟子に委ねた。そして、魂のためになることについて教え、若年の頃から激しく愛した主のもとに、七月一三日に旅立った<sup>190</sup>。

同じように、この神に似たる師父にして善行において偉大なるサツヴァ<sup>191</sup>は、自らに委ねられた信徒たちを敬虔の念、清浄さ、大いなる聖性において続べた。そして、その善行のために、奇跡のような義を通した生き方のために、サツヴァは偉大なる公たちによって、あらゆる国々においてすべてに人々によって敬われた。そして、彼の、偉大で尊い善行の男たちの群れは、ますます大規模なものとなり、その修道士たちの多くの者たちが尊い場所で修道院長職や主教位に即いた。そして、そのあと、神のお気に召すような敬虔の生活を送り、主のもとに旅立ったが、死後に奇跡を起こした。そのなかから、一つだけ話すことにしよう。多くの人々がいまに到るまで知っ

<sup>188</sup> 人の手によらない救世主イコンは1356年に、府主教アレクシイによって第2回目のコンスタンティノーブルへの旅から持ってこられた。それが奇跡のような救済の記念であったのか、そのイコンの徴によってアレクシイが助かったのかは、嵐が何回目の旅の途次に起こったかによってその見解が異なる。

<sup>189</sup> 『詩篇』80篇15節。

<sup>190</sup> アンドロニクが亡くなった年として通説となっているのは、1373年である。ほかの年を挙げる研究者もいる。

<sup>191</sup> 神に似たるモスクワのサツヴァのこと。1410年から1420年のあいだに没。救世主アンドロニク修道院の第2代修道院長。ラドネジ宗務会議聖人。記念日は6月13日（グレゴリウス暦26日）。

ている、彼の弟子の一人がで、エフレムという修道司祭<sup>192</sup>が、悪霊によって淫蕩の熱に侵されてしまった。そして、信仰に引っ張られて彼は、神に似たるサツヴァの枢のもとに来ると、ひどく苦しむ自分を助けてくれるように父を呼ぶと、すぐにその場で治癒を得ることができた。

そのあと、この修道院の修道院長となったのは、さきに名前を挙げた修道院長、サツヴァの弟子である、善行に励む男、賢く義を通す男、アレクサンドル<sup>193</sup>である。同様にこの場所には、アンドレイという名の別の長老<sup>194</sup>もいた。アンドレイは尋常ならざるイコン描きで、偉大なる知恵によって衆に秀で、尊い白髪と、そのほかの多くの長所をもっていた。彼らは二人でキリストの恩寵によって首尾よく修道院を治め、神の御加護によって自らの修道院のなかに石の、非常に美しい教会を建立し<sup>195</sup>、自らの師父たちの記憶として、自らの手になる奇跡のようなフレスコ画でその教会を飾った。今日に到るまでその壁画が、神キリストの誉れのなかにあるのを、みなは見ることができる<sup>196</sup>。そして、このように奇跡のごとき永遠に記憶される男たちはすべてをおこない、神の御心にしたがって生き抜き、主の御もとへと、自らの師父たちの修道院へと旅立った<sup>197</sup>。そして、以前の師父たちとともに神は、彼らをも師父たちと天の王国の誉れに与る者とした。このことについては、これですべてである。

#### シーモノフ修道院の創建

かつて私たちはあなたがたに、聖なる人の肉における兄で、12歳になる自らの息子フェオドルを連れてきて、フェオドルを聖セルギイの手に託したステファンのことをお話した。セルギイはこのフェオドルを修道士の形姿にふさわしいものとした。フェオドルは聖なる人のもとで非の打ち所のない従順さで過ごし、善行に満ちた生活を送り、自らの身体を偉大なる禁欲で疲れ果てさせ、多くの人々がこの人について驚きを覚えた。この人について奇跡のごとくであったのは、フェオドルが夜となく、昼となく、自らの心に浮かんだよしなし事を、神に似たる人から隠すこ

<sup>192</sup> 商人家系であるエルモリン家出身のエルモライ=エフレムと同一視されている場合と、ロストフ主教エフレムと同一視される場合がある。

<sup>193</sup> 神に似たるモスクワのアレクサンドルのこと。没年は1427年以降。救世主アンドロニコフ修道院の第3代修道院長。ラドネジ聖人会堂の記念日は、6月13日(26日)。

<sup>194</sup> 神に似たるアンドレイ・ルブリョフのこと。1427年から1430年のあいだに没。有名なロシアのイコン画家。ラドネジ聖人会堂の記念日は、6月13日(26日)、7月4日(17日)。

<sup>195</sup> この記事を根拠にして、救世主アンドロニコフ修道院の石造りの救世主聖堂の建設は、修道院長アレクサンドル(在位1401-1427年)の時代におこなわれたと考えられる。1425年から1427年のあいだに建築時期を限定する考え方もある。このとき、聖堂は絵師アンドレイ・ルブリョフとダニール・チョルヌイ(1427年から1430年にかけて没。記念日は6月13日(新暦26日)、ラドネジ宗務会議の聖人)によって描かれたのだが、このことについては、セルビア人パホームイは言及していない。

<sup>196</sup> 『絵入りセルギイ伝』におけるアンドレイ・ルブリョフについての物語の挿絵では、修道院町の像にエフレムの名が書きこまれている。このことから、聖堂の壁画の描画が完成したのは、アレクサンドルの後継者である修道院長エフレムの時代であるという結論が導かれることがある。

<sup>197</sup> アンドレイ・ルブリョフ逝去の年代は、1427年から1430年まで幅がある。ブリュソヴァは1427年秋(11月17日まで)とし、ウリヤノフは1428年10月17日とし、アレクセーエフは1430年1月29日としている。

とがなかったことである。彼は修道士として完成の域に達し、司祭の位を授かると、彼には場所を見つけて共住式の修道院を建立したいという考えが生まれた。そして、彼は神に似たる人のもとにやってくると、自分の望むことを神に似たる人に話した。そして、それは一度だけではなく、何度も何度もそのようなことがあったのである。聖なる人は、この人がひたむきにこのことを望んでいるのを見て、それは神から贈られた何物かであると考えた。

そして、長い時間が流れ、叡智に長けたこの牧者はフェオドルを祝福し、彼を行かせ、兄弟たちのうちでフェオドルとともに行きたいと望む者は、何人であろうと、彼が望む場所へと付いて行ってよいと言った。彼はモスクワ川沿いに、シーモノヴォという名の、修道院を建立するためのとても美しい場所を見つけた。このことを聞いて、聖なる人はこの場所を見るためにやってきて、この場所が修道院の建立にふさわしいことを見て取ると、フェオドルにここに修道院を設立することを命じた。フェオドルは高位聖職者から祝福を受けると、この場所にいと清らかなる女主人、我らが神の御母の名前において、その靈験あらたかなる生誕の教会を建立した。そして、その後、フェオドルは、すべてを修道規則にしたがってかくあるべきように、非常なる尊厳をもって修道院を建立し、聖なる師父たちの伝承にしたがってしかるべきように、共住制を導入した。神の誉れとなるように妙なる修道院を創設したのである<sup>198</sup>。すると、大勢の兄弟たちがさまざまな国々から集まってきた。なぜなら、フェオドルについての大きい名誉が到るところに広まっていたからである。このゆえに、多くの者がこの場所にやってきては、彼の教え論しから大いなるご利益を受けた。

そして、彼らは、フェオドルが正しく、善行によって輝き、背も高く非常に美男で賢く判断力が長けているのを見た。そして、かくのごとく、その多くの善行によって彼はすべての人々から敬われ、彼についての誉れは日を追って増し加わったので、聖なる長老セルギイは彼の名誉と誉れについてたいへん心配し、絶え間なく神に祈りを捧げ、彼が躓くことなく自らの生の道を成就することを祈った。フェオドルの多くの弟子たちは、その善行によってまばゆく輝いていた。このゆえに彼らは名誉ある修道院長となったり、たくさんの栄えある町の主教となったりした。あるときのことであるが、この妙なる男フェオドルがツァリグラードに赴くことになり<sup>199</sup>、全世界の総主教ニル尊師からいたく敬われ、全ルーシの掌院（大修道院長）のなかで筆頭たる者となり、総主教に従属する至聖なるシーモノフ修道院を創建する運びとなった。そして、その創建のときに別の場所に、掌院フェオドルによって、きわめて美しい石造りの教会が、聖なる神の御母の名

<sup>198</sup> 伝統的な見解にしたがえば、聖なる神の御母の生誕に捧げられた、シーモノフ修道院は、1370年か、1370年ころに創建された。最近の研究では、その創建は1370年代の後半であるとされている。クチキンは1377年の春から秋にかけて、クロスは1375年から1377年の間、アヴェリヤノフは1377年の9月はじめとしている。シーモノフ修道院は大公のものであったとする説も提唱されている（クチキン）。

<sup>199</sup> フェオドルのコンスタンティノーブルへの旅は、1383年から1385年にかけておこなわれている。フェオドルは総主教ニロス（在位1378-1388年）によって、掌院に叙聖され、コンスタンティノーブル総主教に直接的に従属する直轄修道院とされた。

前によってその就寝を記念して建立された<sup>200</sup>。そして、この事がおこなわれると、その場所にキリストの恩寵によって栄えある修道院がそびえ立つことになったのである。その修道院は今日も、すべての人々が見て崇敬することができる<sup>201</sup>。私たちは、いままで語ってきた物語に戻ることにしよう。

幾ばくかの時が経って、聖なる掌院フェオドルは、ロストフの町の主教職に登極することになり、そのあと、長い年月、燭台の熱いろうそくのように<sup>202</sup>、きわめて敬虔に歳月を送った<sup>203</sup>。そして、そのあと、自分に託された会衆を堂々と牧したのちに、六九〇三（一三九四）年、十一月二八日、主のもとに旅立った。この場所で、シーモノフ修道院についての物語を終えて、次の事件についての話に移ることにしよう。

#### 至福のセルギイとともに勤行をする天使の幻視について

あるとき、浄められたるフェオドルがまだ、至福のセルギイの修道院に暮らしているとき、聖なるセルギイは先に名を挙げた自らの肉における兄ステファンと、自分と血を分けた者であるフェオドルとともに神への勤行をおこなっていた。先に名を挙げたイサーキイ沈黙行者が教会に立っていた。私たちが前に述べたように、彼は非常に善行に熱心な男であったため、彼にある啓示が起こった。イサーキイは彼らとともに、至聖所で神への勤めをおこなっている、きわめて妙なる4人目の男を見たのである。その幻視は驚くべきで言葉に表現できないほどのものであり、大いなる輝きのなかにあり、顔は光を放ち、衣服は輝きわたっていた。そして、小聖入<sup>204</sup>のときに、この天使にも似た、栄えある男は、聖なる者たちのあとについて行った。その顔は太陽のように輝いていたので、イサーキイは彼のことを見るができなかった。その衣服は尋常ではなく、素晴らしく輝いていて、そのうえに金で巧みにほどこされた模様が見えていた。そして、イサーキイは、そばに立っていた師父マカーリイに訊ねた。「父よ、これ何という素晴らしい幻視なのでしょう。私たちが見ている、この栄えある男はいったい誰でしょう。」大いなる明るさのなかに照らされた男、マカーリイもこの幻視を見ることが叶えられた者であった。彼は言った。「子よ、私はわからない。というのは、畏しい理解不能なものを、私は見ているからだ。だが、子よ、この男は公とともに来た者であると思う。」そのとき、ウラジーミル<sup>205</sup>がこの修道院に来ていた。

<sup>200</sup> 1379年、シーモノフ修道院は新しい場所に移転され、聖なる神の御母の就寝に捧げられることになった。

<sup>201</sup> シーモノフ修道院は1771年に廃止され、1795年に復活した。1920年に廃止され、1923年から30年にかけては博物館だった。1990年代はじめに教会に返還され、現在は神の御母就寝シーモノフ男子修道院としてモスクワ地域にある。

<sup>202</sup> 『マタイによる福音書』5章15-16節。

<sup>203</sup> フェオドルは、コンスタンティノープルからモスクワに帰ってきたときに、府主教ピメンからロストフ大主教の位を受けた（在位1386-1388年）。

<sup>204</sup> 聖体礼儀のはじめにあたるエナルクシスの最後の部分。当初、小聖入は聖職者たちと会衆が厳かに聖堂に入場する儀礼で、聖体礼儀のはじめの部分だった。

<sup>205</sup> （ドン川の）ウラジーミル・アンドレヴィチ勇敢公（1353-1410）のこと。セルプホフ公（1358-1410）、ドミー

彼らは公の随員たちに、彼らとともに聖職者が来ているかと訊ねた。これらの者たちは、「いいえ」と言った。そして、彼らは真実に、神の天使が彼らとともに勤行をしているのだとわかった。

しかし、そのとき話すことはできなかった。聖なる聖体礼儀が終わったあとで、一人でいる然るべき時間を選んで、この奇しき幻視を見るのにふさわしい者となったその弟子たちは、聖なるセルギイのもとに近づき、それが誰だったのかを彼に訊ねた。セルギイは隠そうとしてこう言った。

子らよ、そなたがたが見た奇しきものとは何か。神の儀式をおこなっていたのは、私の兄のステファンと、その息子、フェオドルと、ふさわしくない私だけで、私たちとともに、いかなるほかの聖職者も神への勤めをおこなってはいない。

弟子たちは粘って聖なる人に、彼が自分たちに秘密を打ち明けてくれるように懇願した。すると、彼は言った。

愛する子らよ。もしも主なる神があなたがたに開示してくださったのなら、私が隠すことができようか。そなたたちが見た者は、主の天使である。今日だけではなくいつも神の恩寵によって、それにふさわしくない私は、この者ととともに神への勤めをおこなっている。そなたたちが見たものは、私がこの生から立ち去るまで、誰にも喋ってはいけない。

弟子たちは非常に驚いた。

これらの話は、聖なる人の弟子たちによる修道院の創建についての修道院についての先の話の続きである。ドエベンカ河岸の修道院について。この修道院についての話はこのようにはじまる。

ママイ<sup>206</sup>への勝利について<sup>207</sup>。ドベンカ川の修道院について。

神が黙過されたので、私たちの罪ゆえに、ハーン国のママイ公が、神を知らぬタタール人のハーン国全体の大軍を集め、ルーシの国に攻めてきた。そして、すべての人々は大なる恐れに囚われた。そのときルーシ諸国を治めていた大公は、称賛に値する勝利をもたらす大公ドミートリ

トロフ公、ガーリチ公 (1371-1389)、ボロフ公 (1378-1388)、ウーグリチ公 (1405-1410)。セルプホフ公アンドレイ・イワノヴィチ公の年少の息子で、大公イワン・カリターの孫。大公ドミートリイ・ドンスコイ公の従兄弟。ラドネジがウラジーミル・アンドレヴィチ公によって領有されていたことから、三位一体修道院の所有者(クチトル)となり、そこをしばしば訪れた。イワン・カリターの未亡人であるウリアナの死後(1372年から74年のあいだ)、ラドネジはウラジーミル・アンドレヴィチの手にわたったと考えられる(クチキン、クロス)。ラドネジは、ウラジーミル・アンドレヴィチ公の父親のものであったとする説もある(アヴェリヤノフ)。

<sup>206</sup> モンゴルの軍司令官、万人長、1361年から1380年まで事実上の金帳汗国の最高統治者。

<sup>207</sup> 通説によれば、この章は1380年9月8日のクリコヴォの野における戦いについて書かれている。B.A. クチキンは、この章は1378年のヴォジャ河畔でのママイとの戦闘について書かれたものであるとしている。

イ<sup>208</sup>であったが、大公はこの長老にたいして大いなる信心をもっていたから、セルギイが自分にたいして神を知らぬ者たちへの進軍を命じるかどうか訊ねるために、聖なるセルギイのもとを訪れた。というのも、セルギイは善行をなす男で、預言のたまものがあることを、ドミートリイ大公は見てきたからである。聖なるセルギイは、このことを大公から聞くと、大公を祝福して、祈りによって守りを堅め、こう言った。「主の人よ、そなたは、神によってそなたに託されたキリストの群れのために尽くすべきなのです。神を知らぬ者たちに立ち向かうがよろしかろう。神の御助けとともにそなたは勝利するであろう。大いなる名誉とともになんの害も被らずにそなたは自らの祖国に戻るであろう。」大公は言った。「もしも神がお助けくださったなら、父よ、私はいと清らかなる神の御母の名前のもとに修道院を建立するでありますよう。」そして、こう言うところまで大公は祝福を受けて修道院を立ち去り、すぐさま帰路についた。

ドミートリイ大公はそのあと、自らの全軍を集め、急いで神を知らぬタタル人たちにたいして出陣した。そして、敵の軍勢がきわめて数が多いのを見て、ルーシ勢は立ち止まって懐疑逡巡した。大部分の者たちが恐怖に囚われて、どうしたらよいのかと思案した。するとそのとき突然に、聖なる人からの書簡を携えた急使が現れてこう言った。「主の人よ、一切の疑念を捨てて勇敢に、彼らの悍猛さに立ち向かうがよい。少しも恐れてはならぬ。神は必ずやそなたたちをお助けになるであろう。」すると、すぐさま大公ドミートリイと彼の全軍はこの大いなる勇猛心に満たされて、神を知らぬ者たちに向かって進軍した。そして、公は言った。「天と地を創造したまいし神よ<sup>209</sup>。そなたの聖なる御名の敵たちと戦う私の助け手となってください。」かくして戦闘がはじまった。多くの者たちが倒れた。しかし、神は勝利をもたらす偉大なるドミートリイを助け、神を知らぬタタル人たちは打ち負かされ、最終的に撃滅された。というのは、呪われた者たちは、神の怒りと憤怒が自分たちに降りかかるのを看取ると、一目散に逃亡したからである。十字架を担った軍旗は、長いあいだ敵たちを追い回し、その数知れぬおびただしい者たちが殺され、ある者たちは負傷して敗走し、ほかの者たちは生きてまま捕虜となった。そして、奇跡の光景が広がり、驚くべき勝利があった。かつては輝いていた武具は、そのとき、異教徒たちの血で朱に染まり、すべての者たちの顔には、勝利の刻印が刻まれていた。そして、ここで預言の言葉が実現したのである。「一人で千人を追い、二人で万人を追うことができたであろうか。」

聖なる人は、上に言及してきたように、預言の賜物をもっていたから、戦闘の起こった場所から遠い距離を隔てられ、何日もかかる道のりの向こうではあったが、そのときすべてのことを、間近で起こったことを見ていたかのように知っており、神を知らぬ者たちへの勝利について兄弟たちとともに神に祈りを捧げた。しばらく時間が経って、神を知らぬ者たちが最終的に打ち負か

<sup>208</sup> ドミートリイ・イワノヴィチ・ドンスコイ (1350-1389) のこと。1359 年からモスクワ大公、1362 年からウラジーミル大公。大公イワン・イワノヴィチ美男公の長男。ドミートリイ・ドンスコイ公の治世に、金帳汗国にたいして数々の軍事的勝利を取め、モスクワを中心にルーシの地が統合されるプロセスが続行し、石造りのモスクワのクレムリが建造された。聖なる敬虔なる大公。ラドネジ、モスクワ、トゥーラ宗務会議の聖人。

<sup>209</sup> 『使徒言行録』4 章 24 節。

されたとき、聖なる人は兄弟たちに起こったことを知らせた。神を知らぬ者たちへの栄えある勝利を取めた、大公ドミートリイ・イワノヴィチの勝利と勇猛を讃え、ルーシの軍勢で戦死した者たちの名前を挙げ、彼らのために慈悲深い神に祈りの勤めをおこなったのである。

称賛に値し、勝利をもたらす大公ドミートリイは、敵の異教徒たちにたいする栄えある勝利を取め、大いなる喜びのなかで華々しく祖国へと帰還した。そして、ドミートリイ大公はただちに聖なる長老セルギイのもとを訪れ、よき助言にたいして感謝を捧げ、この上ない力をおもちの神を讃え、長老と兄弟たちが祈ってくれたことにたいして感謝し、衷心の喜びとともにすべての起こったことについて報告をし、いかに主が自分に憐れみをお示しになったかを語り、修道院に多くの寄進をおこなった。そして、そのあと、大公は長老に真心をこめて自分が約束したことを思い出させ、それをすぐにでも実現したいと言った。すなわち、修道院を建立するのにふさわしい場所を見つけて、いと清らかなる神の御母の名前において修道院を建立することである。長老セルギイは出立して場所探しをおこない、ドゥベンカという名前の川のほとりにふさわしい場所を見つけ、大公の発願にしたがってこの場所に、いと清らかなる神の御母の名前において、我らが女主人、神の御母の就寝の教会<sup>210</sup>を建立した。時を移さずして、大公のなくてはならない援助のおかげで、あらゆるものに満たされた、奇跡の修道院が建立された。聖なる人は、その修道院職をサツヴァ<sup>211</sup>という名前の、善行においてきわめて秀でた自らの弟子に託した。この人は非のうちどころのないやり方で、しかるべきように共住修道制を調べた。そして、多くの兄弟たちが集まってきて、いと清らかなる方のお慈悲によって、今に到るまで必要なものを十分な量だけもっているのである。このことについてはこれですべてである。

#### ゴルトヴィノ修道院<sup>212</sup>について

<sup>210</sup> 一連の年代記（エピファニー版の『セルギイ伝』よりまえに制作された『三位一体年代記』を含む）においては、クリコヴォの戦い以前の1379年の項に、大公ドミートリイ・イワノヴィチの命令によって、聖セルギイがドゥベンカ川のほとりのストロムィニヤにいと清らかなる神の御母の就寝を記念する建立したことが記されている。このこととの関わり合いで、大公ドミートリイの請願によって聖セルギイが建立したドゥベンカ河畔の修道院は、1379年に建立されたドゥベンカ河畔ストロムィニヤ修道院と、1380年か1381年に建立されたドゥベンカ河畔シュヴィキノ修道院の2つあるという説が広まっている。ただし、ドゥベンカ川の修道院はただ一つだけしかなかったという説も、クチキン、クロス、コヴァレフによって主張されている。

<sup>211</sup> この章を採録した第5パホーミ編纂本においては、修道院長の名前はロマンである。ここでの修道院長の名前は、おそらく第4パホーミ編纂本から取られている。ドゥベンカ河畔の修道院の建立が1379年であると記す諸年代記では、修道院長の名前はレオンチイである。ここで言及されたサツヴァは、ふつうストロジェヴァ（ズヴェニゴロド）の聖サツヴァ（1406年没）と同一視されている。サツヴァは、いと清らかなる神の御母の生誕を記念した、ズヴェニゴロドにあるストロジェヴァのサツヴァ修道院の創建者で初代の修道院長である。記念日は、12月3日（新暦12月16日）、遺骸発見の記念日は1月19日（新暦2月1日）、再度の遺骸発見の記念日は8月10日（新暦23日）である。ここで現れたサツヴァは、ドゥベンカ河畔ストロムィニヤ修道院の第2代修道院長である、ストロムィニヤのサツヴァ（1392年没、記念日は7月20日、新暦8月2日）であるという説もある。モスクワ、ラドネジ宗務会議の聖人。

<sup>212</sup> ゴルトヴィノ修道院、現在のボロヤヴレンスキイ・スタロゴルヴィン男子修道院は、主の顕現を記念して、モ

また別のとき、私たちが今話題にしている大公、大公ドミートリイは、聖なる長老セルギイに、彼の領地であるコロムナのゴルトヴィノという場所に来て、聖なる神の顕現の名前のために修道院を建立する場所を祝福してほしい、延いては、セルギイ自身にこの場所を祝福し、教会を定礎してほしいと頼んだ。神に似たる人は、それが彼の常なのだが、徒歩で出かけていった。そして、セルギイは大公の信仰と愛ゆえに大公の意向を受け入れ、大公が愛してやまないその場所を祝福し、聖なる神の顕現の名前で教会を創建した。セルギイは自分の弟子たちの一人を修道院の運営のために与えてほしいと、大公から頼まれたが、それにたいして、セルギイは自分の弟子の一人である修道司祭グリゴリーイ、多くの善行で満たされた敬虔きわまりない男を与えた。そして、このあとまもなく、多くの数の兄弟たちが集まり、神の恩寵によって共住制が敷かれ、すべての公たちと大公によって崇敬され、愛された修道院となった。そして、この修道院は今に到るまであらゆる福に満たされている。それから、時が経つと、石の教会が建立され、現在に到っている。すべてはこのようであった。

#### ヴィソツキ修道院<sup>213</sup>について

ヴィソツキ修道院について沈黙を守るべきではない。この修道院については、この物語のさらなる部分で語ることになろう。あるとき先に名前を上げた栄えある公、ウラジーミルが聖なるセルギイに、同じ様に自分の領地であるセルプホフに来て、ナラ川のほとりに土地を祝福し、いと聖なる御母の懐胎の名前に捧げられた教会を建立するように懇請した。そして、神に似たる人はこれに従った。実にあらゆる公たちが、この人に魂のすべてをもって大いなる信仰を抱いた。というのも、セルギイから大いなるご利益と慰めを受け取っていたからである。聖なる人は、大好きな公の願いを叶えてあげた。その名を挙げられた場所に到着すると、彼はその場所を祝福し、教会を建立した。そして、敬虔なる公は同様に、セルギイが自分の弟子のなかからアフナーシイ<sup>214</sup>という名の者を与えるように頼んだ。聖なる人は、自分にとって、与えようとする弟子が必要であったにもかかわらず、愛のためにこの願いを叶えてあげたのだった。というのは、アフナーシイはその善行において奇跡の男であり、聖なる書物にもよく通じていた。彼が自分の手で美しく書き写した多くの書物が、このことを物語っている。このゆえに、長老は彼のことを愛したのである。聖なる人はアフナーシイを、修道院を創建し、共住修道制を確立するように残し

---

スクワ川がオカ川に流れこむコロムナに建立された。1374年ころに建立されたとする説（ボリソフ、ゴルビンスキイ、クロス）と、1386年に建立されたとする説（アヴェリヤノフ）がある。クチキンは、この修道院の建立にセルギイが関わったことに疑問を呈している。1329年に閉鎖され、1994年に再開された。

<sup>213</sup> いと神聖なる神の御母の懐胎を記念したヴィソツキ修道院（現在は、セルプホフ・ヴィソツキ男子修道院）は、1374年にセルプホフ近郊、ナラ河畔に建立された。1928年に閉鎖され、ぼクロフ聖堂は教区教会となったが、修道院は1991年に復活した。

<sup>214</sup> 神に似たる大アフナーシイ（1407年から1414年にかけて没）のこと。「高台の」神の御母懐胎に捧げられたセルプホフ修道院の初代修道院長。1382年に聖アフナーシイは修道院長職を辞してコンスタンティノープルに去った。記念日は9月12日（新暦25日）。モスクワ、ラドネジ宗務会議聖人。

たが、そのとおりのことが実現したのである。聖なる人の祈りによって、「ヴィソキイ（高台の）」という名前の奇跡の美しい修道院が創建されたのである。そして、多くの数の兄弟たちが、敬虔なる、善行によって飾られた、この尋常ならざるアフナーシイの、有益なる司牧のもとに集まった。この修道院は神の恩寵により今に到るまでこの場所に立っており、すべての人が目にすることができる。細部に立ち入って話が長くならないように、このことについてはこれで終わることにしよう。そして、聖なる人によって植えつけられた霊の果実について、なぜ私たちは多く語る必要があるであろうか。この神の人、物事の見極めに長けた偉大なる牧者がたった一人で、どれだけの修道院を創建されたか、彼の息子たち、その息子の息子たちがどれだけの修道院を建立したか<sup>215</sup>、知られていないわけがない。それらの修道院は、燭台のようにあらゆる場所から見えているのであり、明るい妙なる生活によってすべての者たちがご利益を受けるようあたりを照らしているのである。しかし、私たちはこの話をこの辺で止めて、私たちの物語、この聖なる人がそれ以後、どのような生活を送ったかを語ることに戻ろう。それでは、次のような話をはじめよう。

人々が聖なる人に府主教位を受けてもらうように運動したことについて

至福なる府主教アレクシイは老齢において、自らが弱っており、最期が近づいていることを見て取ると、聖なるセルギイを呼んだ。そして、この人が来て彼らが会話を交わしていたとき、府主教は、パラマン<sup>216</sup>、金、宝石で飾られた十字架を持ってくるように命じ、聖なる人に贈った。聖なる人は謙遜の念をもって跪拝してから次のように言った。「尊者様、どうか私をお許してください。とはいうものの、私は若年の頃から金を身に着けたことがなく、老齢に到ってもなお、貧困のなかで暮らしたいと思っております。」高位聖職者は聖なる人に言った。「愛する人よ、あなたがそのように生きてきたことを、私は知っています。従順になってください。私たちからあなたに与えられた祝福を受け取ってください。」そしてそのあと、府主教は自らの手でその贈り物を、何か約束の徴のように聖なる人のうえに着せかけた。そして、このあと、彼は聖なる人に言おうと思っていたことを言いはじめた。「神に似たる人よ、そなたは、なぜ余がそなたを呼んだのか、余がそなたに何をしようとしているか、わかってほしい。」聖なる人は答えた。「主の人よ、そのようなことをどうして私がわかりましょう。」府主教が聖なる人に言った。

知つてのとおり、余は神のために、余に委ねられたルーシの府主教座を統括している。ところが、余の最期が近づいていることが余にはわかる。余の命の終わりがいつになるかはわからない。余は余が生きているあいだに、余のあとにキリストの群れを司牧する男を見つけ

<sup>215</sup> 聖セルギイ自身とその弟子たちによって、どれくらいの数の修道院が創建されたかにかんしては、様々な議論がある。『セルギイ伝』のなかで語られた修道院のほかにも、ロストフ近郊のボリス・グレーブ修道院、ゴロホヴェツ近郊のゲオルギイ修道院がセルギイ自身によって創建されたと考えられている。聖セルギイの弟子たちによって創建された修道院のリストは、まだ完全なものできていない。

<sup>216</sup> スキマ僧が身につける正方形の装身具。

たいと思っている。しかし、どの人間もふさわしいようには思われぬ。私が選ぶのは、ただそなたひとりだけだ。そなただけが、「真理の言葉を伝える<sup>217</sup>」のふさわしい。なぜなら、すべての者たち、大公から乞食に到るまで、すべての者たちがそなたを望んでいることを、余は真実に知っているからである。だから、まずはじめにそなたは主教になり、余が死んでから我が玉座を受け継ぐのがよからう。

聖なる人はこのことを聞くと、ひどく悲しんだ。というも、このことは自分にとってまったく虚しいことであるように思われたからである。そして、この高位聖職者にこう答えた。

尊者様、どうか私をお赦してください。猊下がおっしゃることは、私の尺度をはるかに超えます。そなたは私にこのことを叶えさせることはできません。私は何者でしょう。あらゆる人々のなかでもっとも罪深く、もっとも劣った者ではありませんか。

高位聖職者は聖なる人にたいして、多くの言葉を聖なる書物から引用し、その言葉によって彼が自分の意志に服従するように仕向けたのであった。謙遜を地でゆく者は、どうしても首を縦に振ることはなく、こう言っただけであった。

聖なる尊者様、もしもそなたが貧しき私を、私がそなた様のお言葉を聞かなくて済むように、追い払いたくないとお思いでしたら、取るに足らぬ私にこのことをこれ以上話さないでください。また、ほかの誰にもこのことを私に話させないでください。なぜなら、誰も私にこのことを叶えさせることはできないのですから。

高位聖職者は、聖なる人がこのことにまったく乗り気でないことを見て取ると、これ以上彼にこのことを話すのをやめた。聖なる人が腹を立てて、荒野の奥深くに立ち去ってしまい、このような巨星を失うことを恐れたからである。そして、彼は霊の言葉で聖なる人を慰め、彼を自分の修道院に返した。

しばらく経って六八八五(一三七八)年、府主教アレクシイはこの世を去った。そしてふたたび、身分の高い公の面々は、聖なる人に高位聖職者の位を受けてほしいと頼んだのだ。しかし、この人は硬いダイヤモンドのように、どうしても肯わなかった。玉座に登ったのは、高位聖職者にあつたある掌院のミハイルという名の者で、大胆不敵にも府主教の衣装を身にまとい、我が身に白い修道帽を被った。この男は聖なる人に戦いを挑みはじめた。というのは、神に似たる人が高位聖職者の位を得たいと思って、自分の大胆不敵な振る舞いを妨害しようとしていたと考えたからである。至福の人は、ミハイルが自分を脅かしていると聞くと弟子たちに、この聖なる修道院を脅

---

<sup>217</sup> 『テモテへの手紙二』2章15節。

かしているミハイルという男は、傲慢さに打ち負かされているから、望むものを得ることができないだろうし、ツァリグラードを見ることも叶わないだろうと言った。その予言どおりのことが起こった。ミハイルが船でツァリグラードに近づいたとき、身体の病気に斃れ、逝去した<sup>218</sup>。そして、すべての者たちはセルギイを預言者の一人である<sup>219</sup>とみなした。

神の御母が聖なる人を訪れたことについて

あるとき、至福の師父がわれらが主イエス・キリストの御母のイコンのまえで、いつもの決まった僧坊の定め<sup>220</sup>をおこなっていたのだが、そのとき、頻繁にイコンを見遣ってこう言った。

いと清らかなるわがキリストの御母よ、仲立ちをしてくださる方よ、守り手よ、人間たちの誠実なる助け手よ。それにふさわしくない私たちのために、仲立ちとなってくくださる方よ、いつも自らの息子であるわれらが神に、神が、その神聖なるお名前の名誉と誉のために永久に造られた、この聖なる場所をお見守りくださいますように、お祈りください。というのは、いとも甘美なるキリストの御母であるそなたに、私たちは仲立ちとなる者であってほしい、祈る方であってほしいとお願いいたします。なぜなら、そなたの僕たちは、すべての者たちにとって救いの安らぎであり、隠れ家であるキリストに、そなたが勇敢に向き合ってくださいることを願っているからです。

そして、このように彼は祈り、いと清らかなる者への感謝のカノン、すなわち、アカフィストを歌った。定めを歌い終わり、少しだけ休息をとろうと座ると、彼はミヘイという名の自分の弟子にこう言った。「子よ、目を覚ましてシャキッとするがよい。なぜなら、私たちはいま、奇跡の驚くべきご訪問に与ろうとしているのだから。」そして、このとき恐ろしくなり、突然、このように言う声を聞いた。「いまここに、いと清らかなる方がいらっしゃる。」聖なる人はこれを聞くと、すばやく僧坊からプルスト<sup>221</sup>、すなわち、玄関に飛び出した。すると、どうだろう、太陽よりもまぶしく輝く、目がくらむような光がこの人を照らし出し、この人は、照りわたる得も言われぬ輝きのなかに、二人の使徒、ペテロとパウロをひき具した、いと清らかなる方を見た。そして、聖なる人がこの方々を見ていると、この光に照らされているのに耐えることができず、うつ伏せに倒れてしまった。

<sup>218</sup> ミハイル・ミチャイは1379年、府主教への叙聖のために訪れようとしていたコンスタンティノープルへの途次で逝去した。

<sup>219</sup> 『マタイによる福音書』16章14節; 『マルコによる福音書』6章15節。

<sup>220</sup> 教会での合同の祈りのほかに、規則正しく定めにしたがって毎日、正教キリスト教でおこなわれている祈祷の集成。

<sup>221</sup> 玄関の外側部分。プリトゥヴォール。プルストという語は、ギリシア語を介してスラヴ語に伝わったラテン語の語彙である可能性が高い。『セルギイ伝』は、この語が現れるロシア語テキストのなかでもっとも古いものである。

いと清らかなる方は、自分の手でこの聖なる人を触ると、こう言われた。

恐れることはない。私の選ばれたる者よ。私はおまえに会いに来ました。自分の弟子たちのために捧げたそなたの祈りはかなえられました。弟子たちのためにそなたは祈っていたでしょう。また、この修道院のことも祈っていましたね。これ以上、悲しむことはありません。というのは、これからはこの修道院はすべてのことにおいて豊饒が授けられるからです。そなたが生きてるときばかりではなく、そなたが主のもとに召されたあとも、私はそなたの修道院を見捨てることがないでしょう。すべての必要なものを豊富に与え、庇護し、守り抜くでしょう。

これだけ言うと、神の御母は見えなくなった。聖なる人は畏怖のあまり頭が混乱して茫然自失となり、ぶるぶると震えあがった。そして、間もなく正気に戻ると、自らの弟子が恐怖のあまり死人のように倒れ伏しているのを見つけて、彼を助け起こした。この者は、長老の足元に跪拜し、こう言った。

父よ、主にかけて私におっしゃってください。これはいったいどんな奇跡の幻視だったのでしょうか。なぜなら、あの光り輝く幻視のために、私の魂は体から切り離されそうだったのですから。

聖なる人は魂が喜びでいっぱいになった。このため、その顔は喜びで光り輝き、何も答えることができずに、ただこう言っただけであった。「子よ、こらえるがよい。なぜなら、私のなかでも私の魂が奇跡の幻視に打ち震えているからである。」

彼らは立ち尽くし、心のなかで大いに驚いていたが、ついに聖なる人が自らの弟子にこう言った。「子よ、イサアキイとシモンを私のもとに呼びなさい。」そして、彼らが来ると、彼はすべてを、どのように自分が使徒たちをひき具した、いと清らかなる方を見たのか、いと清らかなる方が聖なる人にどのような約束を与えたのか、そのすべてを順番に物語った。彼らはこれを聞くと、得も言われぬ喜びではちきれんばかりとなった。そして、そのあと、すべての者たちが神の御母へ感謝祈禱をささげ、神を讃えた。聖なる人はその夜一夜を眠らずに過ごし、得も言われぬ幻視について考えつづけた。

#### 聖なる人に会いに来た主教について

ある時間が経って、ある主教がコンスタンティノーブルからツァーリの君臨する町モスクワにやってきた。この人は聖なるこの方について多くのことを耳にした。この方についての喧しい評判が、ツァリグラードに到るまで、どこにもかしこにも鳴り響いていたからである。しかし、件の主教は聖なる人への不信仰に捉えられてこう言った。「どうしてこんな国で、しかもこんな時

代に、そのような偉大な聖職者が現れるなどということがあろうか。」そして、彼は修道院に行き、至福の人に会うことに決めた。彼が修道院に近づくと、彼は恐怖を感じはじめた。そして、彼が修道院に入り、聖なる人に会うと、目がまったく見えなくなり、彼は動転した。神に似たる人は彼の手を取り、自らの僧坊に導いた。この主教は涙ながらに聖なる人に懇願し、不本意ながら自らの不信仰について物語り、自分のことを呪われている者、正しい道から逸脱した者と呼び、また目が見えるようにしてほしいと頼んだ。悪意をもたぬ謙抑の活動者であった聖なる人は、見えなくなった瞳に触れた。すると、たちまち目からウロコのようなものが落ち、突然目が見えるようになった<sup>222</sup>。

神に似たる人はこの主教に言った。

これはあなたへの罰なのです。いとも賢き教え手よ。どう振る舞ったらよいのか。高ぶらず、謙抑な人々にたいして威張り散らさぬことです<sup>223</sup>。物を知らず無知な私たちにたいして、あなたはどんなご利益をもたらしてくださるのでしょうか。私たちの無理解を試すためだけに、あなたはやって来たのです。しかし、正義の裁き手は、すべてをご覧になっておられます。

以前には不信仰に捕らえられていた主教は、固い信仰をもって大きな声で、この聖なる人は真実なる神の人であると言明し、次のように言った。「神はわたしにお恵みくださり、今日、天の人、地の天使を見ることを叶えてくださった。」このあと、彼は神に似たる人からご利益を受け、然るべき賜物を受け取り、自らの旅路についた。彼は神とその弟子である聖なるセルギイを讃えた。

聖なる人の祈りによって治癒した男について

聖なる人の修道院の近郷に住んでいた、ある一人の人間がいたが、この人は非常に重い病にかかってしまった。20日のあいだ、ひどく苦しみ、食べることも眠ることもできなかった。この人の肉における兄弟たちは、この人のことで、この人が長いあいだかくのごとき苦しみに悶えていることにたいして、悲しみに捕らえられた。すると、めでたき思慮が彼らの心を訪れた。彼らは言った。「神はどれほどの奇跡を自らのお気に入りの者、聖なるセルギイをとおして成就されたことだろう。もしかして、彼は私たちに憐れみを垂れてくださるかも知れない。」そして、そのあと相談して、病人を聖なる人のもとに連れていき、彼の足元に座らせると、この病者のために祈ってくださるように懇願した。聖なる人は聖水を取り上げ、祈りを捧げてから病人にふりかけた。するとたちまち、病者は自分の病気がとても軽くなったことを感じ、まもなくその病者は、長い眠りに落ちた。その眠りは、病のための不眠を補って余りあるものだった。そして、このあと病者は健康になり、その時から食べ物を受けつけはじめた。そして、喜びながら自分の家に帰

<sup>222</sup> 『使徒言行録』9章18節。

<sup>223</sup> 『ローマの信徒への手紙』12章16節。

り、自らのお気に入りの者をとおして驚くべき栄えある奇跡を起こされた神に、大いなる感謝の気持ちを捧げた。

送り届けられた食べ物を食べたことを見透かしたことについて

そして、このことも忘却に任せてはいけない。あるとき、さきに述べた敬虔なる公、ウラジミルは、この神に似たる人へ大いなる信仰と愛をもっていたので（聖なる人の修道院は彼の領地内にあり、公はしばしば彼の人を訪れていた）、このように自らの従者たちの一人にさまざまな食物と飲物を贈り物としてもたせて、神に似たるこの人のもとに遣わした。遣わされた者が聖なる人の修道院に向かう道すがら、この人間は、悪魔の誘惑に屈してしまった。使わされた食べ物を少しばかりつまんで食べてしまったのである。同様に飲み物も聞こし召した。そして、そのあと、神に似たる人のところにやって来て、敬虔なる公が愛をもってこの聖なる人に遣わした贈り物があることを知らせた。しかし、奇跡において透視の力をもつこの男は、この人間が罪を犯したことがわかってしまい、贈り物を受け取ろうとはせず、起こったことについてこの人を責めて言った。「兄弟よ、どうしてそなたは悪魔の言いなりになり、誘惑に屈して、祝福を受けるまではそなたが食べてはいけなかった食べ物を食べてしまったのか。そなたはしかと食したのか。」そのとき、聖なる人に悪を暴かれたこの男は、自分が罪を犯したことを悟り、心ならずも自分の悪事を白状して、聖なる人の足もとに身を投げ出し、自分のおこないについて赦しを求めて泣きはじめた。聖なる人は、今後はこのような不敵な行動は取らぬように十分に注意を与えたあと、彼を赦してやり、贈り物を受け取ってから彼を放免してやり、食べ物と飲み物に祈りを捧げ、キリストを愛する公には祈りと祝福を捧げたことを伝えるように命じた。このことについては、以上のとおりである。この話の以前に、以下のようなことが起こった。

ある欲張りな人について

聖なる人の修道院のそばに暮らしている人がいて、この人は非常に貪欲な性格の持ち主だった。実に現在に到るまで、強い人々が貧しい人々に辛く当たることがあたりまえのようにおこなわれている。この人は、その隣に暮らしている隷属民の一人に次のような無法を働いた。この貧乏人が、自分が食べるために飼っていた豚を取り上げ、代価を払わず、この豚を屠殺するように命じたのである。不当な扱いを受けたこの人はやって来て、聖なる人の足下に身を投げだして、悲しみ涙に暮れながら、助けを求めて聖なる人に懇願した。悲しみのなかで慰めを与え、乞食たちを守り、貧しい者たちを助けるこの憐れみ深い魂は、この無法者を呼び寄せ、その行為を非難しながらそのようなことは止めるように言った。

そなたは信じておるか。神がましますことを。正しき者たちと罪人たちの裁き手、復讐をも厭わない孤児らと寡婦たちの父である神がましますことを。あの方の手に落ちることは恐

ろしい<sup>224</sup>。どうして私たちは震えることなく、略奪をおこない、暴力を振るい、無数の悪をおこない、神に与えられた恩寵に不満をもち、年がら年中別のものを望み、神がじっと堪えておられることをなんとも思わずにいることができるだろうか。そのようなことをする者たちは、私たちが見ているまゝで乞食になっていくのを、私たちは見ないであろうか。そして、彼らの家は荒れ果て、多くの裕福な者たちは忘れ去られ、彼らの来世ではかぎりない苦しみが待ち構えているのだ。

そして、多くの訓戒を聖なる方はこの者に与え、貧しいその人に代価を払うように命じてこう言った。「貧しい人たちに不正を働いて苦しめるものではない」と。この者は恐怖を感じて気性を改めて正しい生活をはじめ、不正に苦しむ人に代価を払うことを約束した。そして、この人は自分の家に帰った。

ところが、彼は間もなく聖なる長老の教えを忘れ、貧しい人に代価を支払わないことに決めた。彼はこのようなことを考えて、いつものように自分の貯蔵庫に入っていくと、この豚の切り分けられた胴体全部にぎっしりと蛆がわいていた。それもそのときは冬だったにもかかわらずに、である。そして、猛烈な恐怖が彼を捕らえ、自分が聖なる長老の言うことにしかなかったことでひどく震えわなないた。というのも、何事もこの方から隠し遂せることはできないのに、何の顔あつて彼に見えることができようか。そして、すぐさまお金を払うのを拒否していた相手に支払いをした。この豚の胴体は犬や鳥が食べるように放り投げられたが、犬や鳥もそれに触れようとはしなかった。金儲けを好む者たちの罪が暴かれ、そのあとも彼らが他人を迫害することがないように。この男は恥ずかしさのために聖なる人の面前に出ることができず、彼が以前にはあれほど貪欲に欲しがっていたものは、渋々ながら見るのさえ嫌がったのだった。

#### 神の炎の幻視について

このことのあと、あるとき、至福の人は神の儀礼を執り行っているとき、聖なる人の弟子のシメオン教会長がいた。この人のことは、私たちがすでにその話をしたことがあるし、多くの徳において完璧で、この人については聖なる人自身が、彼の暮らしぶりは非の打ちどころがないと語っていた。そして、このシメオンが奇跡の幻視を見たのである。彼が語るところによると、聖なる人が勤めを執り行っていたとき、彼シメオンは、玉座を歩き、至聖所を守り、あらゆる芳香から奉献台<sup>225</sup>を取り囲む炎を見た。聖なる人が聖体を拝領しようとしたところ、その神の炎は布地か何かのように巻物ようになって聖餐杯のなかに入り、そのあと、聖なる人は聖体を拝領した。シメオンはこれを見て恐怖と震え戦きに捕らえられ、自分ひとりで驚きに打ちのめされていた。

<sup>224</sup> 『ヘブライ人への手紙』10章31節。

<sup>225</sup> 聖卓、あるいは、玉座のこと。至聖所の真ん中にある卓のこと。高位聖職者がこの卓のうえで、パンとワインをキリストの身体と血に変える、聖体礼儀の秘蹟をおこなう。

奉献台を離れると、聖なる人はシメオンがなにか幻視を見たことがわかり、彼を呼び寄せるところ言った。「子よ、おまえの霊はなぜ恐怖に打ちのめされているのか。」この者は答えた。「主の人よ。私は奇跡の幻視を見たのです。あなたとともに働く聖霊の恩寵を。」聖なる人は彼にこのことを話すのを禁じて言った。「主が私からこの世の生を取り上げなされるまで、そなたは見たことは誰にも話してはいけない。」そして、そのあと、彼らは一緒に主に称賛を捧げた。このことについては以上である。

#### 聖なる人の逝去について

聖なる人は長の年月、完璧な禁欲と労働のなかに生き、理解することも言い表すこともできぬ、数々の奇跡の事績を示し、相当な老齢に達したが、神の祈祷歌の朗唱や儀礼の勤めを怠ったことはなかった。年を取れば取るほど、熱心さは堅固なものとなり、増し加わり、神の功業においても勇氣と情熱に満ち溢れて、老齢によって負けるようなことはまったくなかった。しかし、まるで一段一段、神のほうに近づいていくかのように、日毎に彼の足は円柱のようになっていった。彼は六ヶ月前に自分の逝去を予見した。兄弟たちを呼んで、修道院長の位を自分のもつとも親しかった弟子に引き渡した。その人は徳行において完璧で、あらゆることにおいて聖なる人に次ぐ者で、知恵があり、白髪で総身真っ白に見える人で、この人を奇跡をあらわす人として示すときに、まさにこの物語が物語ることになるのだが、その名前はニーコン<sup>226</sup> といった。セルギイはニーコンにキリストの群れを熱心に正しく牧するように、自分のためではなく多くの者たちのために心を配るように命じた。信仰において敬虔きわまる、微睡みを知らぬ守り手、枯れることのない泉、望まれた名前であるこの偉大なる功業者は、沈黙の行をおこないはじめた。

そして、九月には体の病気に陥り、自然に借金を返すために、愛しいイエスに霊を引きわたすために、まもなく自分は神のもとに行くことを悟ると、聖なる兄弟たちとあらたに選び出された呼び集めると、ふさわしい談話の時をもち、魂のためになることを教え、躓くことなく正教に踏みとどまるように言い、たがいに思いと心をつにすること、魂と身体の清浄と偽りのない愛を保つこと、邪悪で汚らわしい欲望から身を護ること、いまここにある食物と飲み物に不平を言う事なく満足すること、ことに謙抑によって我が身を飾ること、旅人をもてなすことを忘れぬこと、口答えを控えること、この世の名誉と誉を何物とも思わず神からの報いを待ち望むこと、天上の永遠の福を楽しむことを遺言した。そのほか多くのことを教え諭し、こう言った。

神が私をお呼びになっているのだから、私はあなたたちのもとから逝く。私はあなたたち

<sup>226</sup> 神に似たる、ラドネジのニーコン (1352-1428年11月17日) のこと。ラドネジのセルギイの弟子で、三位一体修道院の第2代修道院長。セルギイの逝去のあとまもなく、ニーコンは沈黙の行に専念するために修道院長職を離れた。彼に替わったのが、ストロジェヴォのサツヴァである。6年後、ニーコンはふたたび三位一体修道院の修道院長となり、死ぬまで修道院長職にあった。記念日は、7月7日(新暦20日)と11月17日(30日)。その聖者伝は、パホーミイ・ロゴフェトによって書かれた。

を全能の神と、いと清らかなる神の御母の手にゆだね奉る。神の御母がそなたたちの逃げ場所となり、悪魔たちの投網と彼らの奸計から身を護る壁となつてくださいますように。

彼が肉体の桎梏から解放されるはずの死の直前に、彼は主の身体と血を拝領したが、そのときは弟子たちの腕が彼の力のない四肢を支えていた。彼は空に両手を高く伸ばし、祈りを唱えると、自らの清らかな聖なる魂をその祈りとともに主に差し出した。六九〇〇（一三九二）年九月二五日のことである。この神に似たる人は、七八年の歳月を生き抜いた<sup>227</sup>。

このとき、聖なる人の身体から大いなる得も言われぬ芳香が流れ出した。兄弟たちはみな集まって、啼泣と慟哭のなかで悲嘆にくれ、寝台のうえに経験な労働を愛したその遺骸を、峻厳な気持ちで詩篇と埋葬の祈祷歌を歌いながら横たえた。弟子たちの涙の泉は流れてやまなかった。舵取りを失い、導き手を喪失し、父との別離に耐えることができず、彼らは泣きながら、もしもできることならこのとき、彼と一緒に死んでしまいたいと望んでいた。これにたいして、聖なる人の顔は雪のように輝いていた。死んだ人々においてふつうにあるようなことは起こらず、生きた人間か、あるいは、神の天使に起こるようなことが生じ、それは彼の魂の清浄さとその労働ゆえに神から報奨が与えられたことを示していた。その敬虔なる遺骸は、彼によって創建された修道院に葬られた。彼の逝去にさいして、彼の逝去ののちにいかなる奇跡が起こったのか。また、起こっているのか。彼の柩に近づくだけで、力の萎えた四肢が回復し、人々は狡猾な霊から解放され、盲が目が見えるようになり、せむしの背が伸びた。聖なる人は存命中も死後も、賞讃を望んではいなかったけれども、神の堅固なる力は彼を讃えたのである。彼が逝去したのち、天使たちが空で彼を先導し、彼のまえて天国の扉をひらき、天使たちの光のなかで望まれた至福へと、正しき者たちの平安へと彼を導き入れた。そして彼は、彼がつねに望んでいたものを見、聖なる三位一体の輝きと、斎戒者にふさわしい修道士たちの飾りを受け取った。

師父の生涯は、賜物は、奇跡の成就是、存命中においても死後においても、かくの如きものであり、書き表すことは不可能である。なぜなら、このようなことはすべて、いまに到るまですべての者たちが見ているからである。

太古の昔に輝きし者たちを私に示したまえ。彼らを、その暮らしの徳行と叡智において、セルギイと比べてみよう。私たちは、この人が真実にどの点をとっても旧約の神のごとき男たちに勝るとも劣らないことがわかるだろう。偉大なるモーセ、彼を継いだヨシュアのように、あの方は多くの人々の指導者であり、牧者であった。真実にヤコブの罪のなさとおブラハムの巡礼者への

<sup>227</sup> 神に似たる、ラドネジのニーコン（1352-1428年11月17日）のこと。ラドネジのセルギイの弟子で、三位一体修道院の第2代修道院長。セルギイの逝去のあともなく、ニーコンは沈黙の行に専念するために修道院長職を離れた。彼に替わったのが、ストロジェヴォのサツヴァである。6年後、ニーコンはふたたび三位一体修道院の修道院長となり、死ぬまで修道院長職にあった。記念日は、7月7日（新暦20日）と11月17日（30日）。その聖者伝は、パホーミイ・ロゴフェトによって書かれた。

優しさを受け継ぎ、法の新しい制定者となり、天の王国の継承者となり、彼によって統括される者たちの真実の統治者となった。じつにこの人は、荒野を多くの福なる気遣いで満たさなかったか。共住制の統括者である偉大なるサツヴァはたしかに理性をもっていたけれども、実にこのセルギイも、かの者と同様に、善き理性をもち、共住制の多くの修道院を創建しなかったか。実にこの人は、この人以前の讃えられし者たちと同様に、奇跡成就の賜物をもってはいなかったか。神は大いに彼を讃え、この地上のすべてにおいて名のある者とされたのである。私たちがこの人を誉め讃えるのは、この人が称賛を望んでいるためではない。この人が私たちのために祈りを捧げてくださっているからである。なぜなら、あらゆる点で自らを苦行に捧げたこの人は、キリストを真似たからである。だが、私たちはこれ以上無用に物語を長くするのはやめよう。なぜなら、誰がその美点においてこの聖なる人を十二分に誉め讃えることができるだろうか。

神に似たる我らが師父セルギイへの賞讃の講話。この講話はその弟子である修道司祭エビファーニイによって創作された。

父よ、祝福したまえ。

ツァーリの秘密は守らなくてはなりません、神の業は賞讃しつつ宣べ伝えなくてはなりません。というのは、ツァーリの秘密を守らないことは破滅的で危険ですが、栄えある神の業について沈黙することは、魂に不幸をもたらすからです。このゆえに私も、主人からタラントンを受け取ったにもかかわらず、それを地中に埋め、運用しなかった有名なる僕の苦しみを思い出しながら、神の業について沈黙することを恐れているのです。内なる思いが清められていない人間は誰でも書くのにふさわしくありません。情欲に掴まれ、たくさんの罪の連鎖に縛りつけられた私もそのような者にほかなりません。私はこのような栄えある仕事に触れるべきではなく、ただ私の無法を悔い改め、私の罪のことだけを考えるべきなのです。しかし、願望が私は強くとらえ、私はそれにふさわしくないにもかかわらず、黙っていることができないのです。私の罪が、重い積み荷のように、私のうえに重くのしかかっています。私は何をしたらよいのでしょうか。このそれにふさわしくない私は、思い切ってはじめなくてはならないのでしょうか。なにをしたらよいのでしょうか。話しはじめるべきなのか。これを禁じるべきなのか。それにふさわしくない私は呪われた自分のことを泣くべきなのだろうか。神に似たる人について私の心に到来した至福の思いに耳を傾けるべきなのだろうか。

父よ、あなたご自身が私をお助けになり、それにふさわしくない私わが心を曇らさぬようにしてください。私がこれを書くとき、あなたご自身が私を教え諭し、私を教え導いてください。私が自分自身の考えのなかで書くことができないときには、考えがあなたを賞賛する方向に立ち上がってくれますように。心の中で何度も私は自分の欠点を数え上げ、その欠点のために涙を流し、もしもあなたが私に助けの手を差し伸べてくださらなかったならば、自分がはじめたことを、自分の願望を遂げられないと恐れていました。私はおのれの長所によってあなたへの賞讃を歌い

あげることができるということではありません。偉大なることからほんのいくつかをお話しできるだけです。ですが、私が、憐れな私のために我らが神キリストへ祈りを捧げてくださるあなたを讃えることをお助け下さい。もしもほかの者たちがふさわしくても、私はふさわしくありません。私は選ばれたる者たちの食卓から落ちるパンくずを受け取ろうと懸命になり、それを望むでしょう。たくさんのパンくずが飢えた魂を満腹にすることはありうることです。とくに霊父たちの教えと魂に有益なる言葉は身体だけではなく、魂自体をも強くし、霊の功業のために飢えを満たしてくれるものです。というのは、私たちの神聖なる師父たちについての明るく甘く光を放つ記憶は私たちに向かって輝いているからです。なぜなら、明るい空焼けと誉れによって光を放ちながら、彼らは私たちを照らし出しているからです。彼らの明るい記憶は真実に光を放ち、神からのあらゆる恩沢と喜びに値するものですが、愛された息子たちの父親のようにあなた方の神を愛する魂をいま霊の喜びへと呼び招き、愛された息子の父のように、この明るい教会のなかで喜びに満ちて受け入れ、愛とともに喜びに咽びながら、甘い神の言葉、天使の食物に満たされるのです。霊の言葉は聖書のなかで、魂が楽しみ、心が耳を傾ける天使の食物と名づけられています。身体が食べ物によって強くなるように、魂は言葉によって強くなります。言葉の甘さを味わってダビデは驚きながら神にこう言っています。「あなたの仰せを味わえば、私の口に蜜よりも甘いことでしょう。あなたの命令から叡智を得た私は、どのような偽りの道をも憎みます<sup>228</sup>。」私たちの太古の師父たちも、齋戒において讃えられるそのほかのすべての者たちもかくのごときでした。

彼らの足跡をたどり、彼らの生活を真似びながら、私たちが以前に書かれた言葉で思い起こし、私たちがいまここで誉め讃えている人、私たちの神に似たる父セルギイは虚偽の道を憎み、真実を熱愛した。彼は真実に驚嘆に値し、彼のことは讃えるべきであります。というのは、彼は私たちに似た人間であつたけれども、私たち以上に神を愛し、この世のあらゆる美を塵のように斥け、軽蔑し、熱意をこめてキリストのあとを追ったからです。神は彼を愛しました。というのは、彼は神のお気に召そうと一生懸命努め、神は彼を偉大な者とし、讃えたからです。こう言われています。「私を重んずる者は私を重んじ、私を侮る者を私は軽んずる<sup>229</sup>。」神が讃えられた人の偉大さを誰が隠すことができましょうか。私たちは真実にしかるべき威厳をもって彼を讃え、誉めなくてはなりません。というのは、私たちのセルギイへの賞讃は彼のためになるようにおこなうのではなく、私たちにとっての霊の救済にほかならないからです。このゆえに私たちのもとでは、聖なる人の善行が忘却の深みに沈ませぬように、聖なる者への神からの恩沢は、次に来る世代のために書物のかたちで伝えるという有益な習慣が定着したのです。わかりやすい言葉でその善行について物語りながら、それらの善行が聞く者たちにご利益をもたらすことができるように、それらについて伝えなくてはならないのです。

---

<sup>228</sup> 『詩篇』119 篇103-104 節。

<sup>229</sup> 『サムエル記上』2 章30 節。

善行についての物語は多くの人々の心を感動させ、まるで針のように魂を傷つけて清らかな生活によって神のもとに行くように促すものです。このようにして神に似たる我が師父聖なるセルギイは、自らの清らかな咎のない生活によって多くの魂を神の御もとへと導きました。あらゆる善行によって飾られた奇跡の長老、もの静かな柔和な気性の持ち主であり、謙遜で気性も人あたりもよく、心が優しくほっとさせてくれ、声が甘く、物柔らかかで慈悲深く決して怒らず、謙虚な知恵をもち、清廉で信心深く乞食を愛し、客あしらいがよく平和を愛好し神を心から愛しているこの人は、師父たちの師父であり、教師たちの教師であり、統率者たちの指揮者であり、牧者たちの牧者であり、修道院長たちの教導者であり、修道士たちの長であり、諸修道院の創建者であり、斎戒者たちの誉れであり、沈黙行者たちの支えであり、司祭たちの美であり、聖職者たちの壮麗であり、神の統率者であり、嘘偽りなき教師であり、よき牧者であり、正義の教師であり、買取できぬ教導者であり、賢い統治者であり、喜ばしい指導者であり、真実の舵取りであり、労を惜しまぬ医者であり、素晴らしい庇護者であり、清浄にする神聖な人であり、共住制の創造者であり、喜捨を与える人であり、労働を愛する功業者であり、祈りにあつて強き者であり、純潔を保つ人であり、清廉の手本であり、忍耐の円柱でした。彼は地上にあつて天使の生活を生き抜き、ルーシの地においてまばゆき星として讃えられました。偉大なる彼の善行は、多くの人々にご利益をもたらし、多くの人々にとって救済であり、多くの人々にとって魂の成就であり、多くの人々にとって支持であり、多くの人々にとって支えでありました。彼は、敬虔なるルーシの大公にとって、正教の教師でありました。貴顕たちにとって、千人長たちにとって、そのほかの長たちにとって、すべての宮廷人たちにとって、敬虔なるあらゆる軍勢にとって、信仰心の擁護者でありました。大主教たち、主教たち、そのほかの聖職者たち、掌院たちにとっては、魂のためになる知恵めでたき庇護者かつ裁き手であり、欺瞞のない修道院長たち、長老たちにとっては逃げ場であり、修道士たちにとっては天の高みに通じる階段のようでありました。孤児たちにとっては慈悲深い父親であり、寡たちにとっては熱い保護者であり、悲しむ者たちにとっては慰めであり、悲嘆に暮れ、嘆く者たちにとっては喜びであり、戦い、怒る者たちにとっては和解であり、弱い乞食たちにとっては無尽蔵の宝物であり、毎日の食べ物をもたぬ貧しき者たちには大いなる慰めであり、病気に苦しむ者たちにとっては鎮静させる者であり、疲労困憊する者たちにとっては強めであり、臆病な者たちにとっては支えであり、不幸な者たちにとっては守り手であり、侮辱を受けた者たちにとっては助け手であり、暴力を振るう者たちや略奪者たちの罪を暴き、けじめをつける者であり、虜囚にある者たちの救済者であり、労働のなかで疲労困憊する者たちの解放者でありました。牢屋のなかで枷に嵌められた者たちにとっては救済者であり、債務者たちにとっては身代金であり、求める者たちにとっては施し物であり、酔っ払いにとっては酔い覚ましであり、誇り高い者たちにとっては純潔であり、他人の持ち物を盗む者たちにとっては抑止であり、高利貸しに対しては禁止であり、悔い改める罪人たちと、癒しの泉に来るように彼のもとに来るすべての者たちにとっては、誠実なる助け手でありました。

みなが見ていたのはこのようなことでした。彼の誠実なる外貌は、天使のような白髪において

素晴らしいものであり、斎戒によって飾られ、禁欲によって輝き、兄弟愛によって花開きました。視線は柔和で、歩き方は決して急がず、顔には感動を湛え、心は謙遜そのもので、徳高い生活によって高められ、神の恩寵を授かっていた。彼は神を敬い、このために神は彼を重んじ、神の大なる誉れを彼に与えたのでした。彼は神を讃え、神はこの地上において彼を讃えました。それは聖なる福音書のなかで主が仰せられているとおりでした。「あなた方の光を人々のまえに輝かせなさい。人々が、あなた方の立派なおこないを見て、あなた方の天の父を崇めるようになるためである<sup>230</sup>。」また主は同様に仰せです。「山のうえにある町は隠れることができない。また、灯を灯して柵のしたに置く者はいない。燭台のうえに置く<sup>231</sup>。」そのほかのことです。

この自らのお気に入りの者、神に似たる我らが師父、至福なるセルギイのことを神は重んじられ、讃えられたので、彼の祈りのおかげで多くの者たちが病から癒され、多くの者たちが治癒を得、多くの者たちが悪魔から救われ、さまざまな誘惑から清められました。このように神は聖なる者が暮らす場所だけではなく、ほかの町々、ほかの国々でも、海から海に到る場所で居住するあらゆる民族のあいだでも、ツアリグラードだけではなく、エルサレムでもこのお気に入りの者を讃えたのでした。ただ正教徒たちだけではなく、信仰をもたぬ多くの者たちが神に似たる人の善行に満ちた生活に驚き、信仰をもたぬ多くの人々が彼の至福の生活に驚愕を覚えました。実に彼は彼の心すべてで神を愛し、自分自身を愛するように自らの近い神を愛しました。実に彼はすべての者たちを同様に愛し、すべての者たちに同様に善を施し、すべての者たちは彼に感謝しました。彼はすべての者たちに愛を抱き、すべての者たちは彼に愛をもち、彼を心から敬いました。多くの者たちが彼のもとにやって来ては、近い場所からだけではなく遠くから、遠くの町々や国々から、彼に会い、彼の教えを聞こうとやって来て、彼の教えとおこないから大なるご利益と魂の救済を受け取りました。彼は、『使徒言行録』のなかで「イエスがおこない、教えたからである」と言われているように<sup>232</sup>、教え、おこなったのです。イエスが言葉でお教えになったことを、自分自身が実際におこなったのです。

彼の教訓がご利益をもたらしたばかりではありません。多くの場合、彼のことを一目見ただけで多くの人々が彼の顔をまじまじと見ることからご利益を得たのです。彼は魂のためになる言葉で多くの人々を教え導き、神に対する悔い改めへと向かわせ、多くの人々を救い、修道士の形姿を、天使の姿を纏わせ、彼らの敬虔なる遺骸に自らの手で衣服を着せ、埋葬へと委ねました。彼は多くの人々の魂を神のもとへ導き、魂のためになる彼の言葉と教訓を思い出しながら、多くの人々が彼の教訓によって救われたし、いまも救われているのです。彼は、神を崇拜する心のなかで、真実のために、あらゆる点で自らの弟子たちの手本となって、神によって自らに委ねられた群れを牧しました。彼はこの世において、年端の行かぬ幼年の頃からはじまって深き老齢まで、

<sup>230</sup> 『マタイによる福音書』5章16節。

<sup>231</sup> 『マタイによる福音書』5章14-15節。

<sup>232</sup> 『使徒言行録』1章1節。

自らの人生のあらゆる歲月、修道士としての規則から外れることなく、主の気に入られた、清らかな、欠点のない生活を送りました。彼は決して怠惰に過ごすことなく、無気力に陥ることなく、はじめたことをやり遂げました。勇気をもって神聖にはじめたことを、揺るぎなく奇跡のように終えました。喜びをもってはじめたことを、神への畏れのなかで神聖なる生を成し遂げたのです。「叡智の極みのはじまりは主への畏れである<sup>233</sup>。」彼は豊穡に信仰を、希望を、愛をもっていましたから、彼は敬虔にはじめ、敬虔に生き抜き、神聖に生を終えました。彼は平常心をもって生の流れを終え、信仰を保ち、正義の桂冠を受け取り、彼が地上において成し遂げた自らの労働と行動のゆえにそれに見合うだけの報償を受け取り、偉大なる功業を成し遂げ、大いなる困難を克服し、昼間の熱の重みを堪え、真昼の酷暑を勇敢に耐えぬぎ、冬の凍れに苦しみ、耐えがたい猛烈な寒さを神の名において忍耐しました。このゆえに彼はそれに見合う報償と偉大なる慈悲を受け取ったのです。

どうしてこの私は長々と喋っているのでしょうか。私はそのもてる資質から言っても、この善良なる主の人、聖なる長老の生活を書き留めることができないのに、かくあるべきように彼の名前を呼び、それにふさわしく彼を誉め讃えることさえできないのに、話を増やし、言葉を継ぎ、物語を続けてどうしてしゃべり止まぬのでしょうか。しかし、彼のほかの善行については別の場所で話すことにしましょう。そのたくさんのおこないについては別の場所でお知らせしましょう。神が私に理性をお与えくださるなら、聖なる長老の祈りによって力をお授けくださるなら、私たちは彼に賞讃を捧げましょう。しかし、いまは理性の欠如と私の知の貧しさのためにその時間はないのです。

これを私が詳しく書くのは、すべてを真実に知っている人々、彼の生活をほんとうに知っている人々のためではありません。そのような人々には、この物語を必要としておりません。そうではありません。私は新しく生まれてくる幼児たちのために、若い子供たちのためにこのことを思い出し、そして知らせるのです。子どもの知恵しかもっていない彼らが成長し、一人前の大人になり、進歩を遂げ、成熟の年齢に達し、理性の完成が成し遂げられ、セルギイのことを訊ねあうときに、彼らがこれを読んでわかり、ほかの者たちに聖書で次のように言われていることを知らせるために書くのです。

そなたの父に訊ねるがよい。そなたの父はそなたに告げるであろう。そなたの長老たちに訊ねるがよい、長老たちはそなたに告げるであろう。私たちが見たこと、聞いたこと、知ったことを、私たちの父たちは私たちに告げた。このことが彼らの子供たちに隠されぬように。彼らが自らの子供たちに語り継ぐように。未来の世代、生まれ来る息子たちが知り、彼らがこんどは自らの息子たちに教えるように。神の事績が忘れられぬように<sup>234</sup>。

<sup>233</sup> 『箴言』1 篇7 節。

<sup>234</sup> 『申命記』32 章7 節；『詩篇』78 篇3-7 節。

この偉大なる聖なる長老に仕えた人々、彼の事績をまじかに見た人々、その弟子たち、友に功業をおこなった人々、ことに自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の手で彼に触った追随者たち、彼と食卓を共にし、彼の教えを満喫し、彼の徳を享受した者たちは、私たちの子の貧しい話は必要がありません。彼らは自分自身でほかの人々を教えることができますからです。またとりわけ、私自身の話を訂正し、知恵を与え、正しい道を指し示すことができますでしょう。しかし、セルギイに会ったことがなく、セルギイのことを知ることがなかった人々、そのほかのすべての人々、はじめたばかりの修道士たちにとって、この話は有益であり、必要であります。聖なる人の静かな穏やかな悪意のない生活が忘れられないために、彼の清らかな咎のない騒がしきのない生活が忘れられないために。彼の徳高い奇跡のような素晴らしい生活が忘れられないために。多くの彼の善行と偉大なるおこないが忘れられないために。彼の善き習慣とよき手本が忘れられないために。彼の甘き言辞と知恵ある言葉が思い出されずにいることがないように。このような驚くべき慈悲が思い出されずにいることがないように。その慈悲によって神は彼を讃え、このような聖なる男、偉大なる師父が私たちの時代を生きただけを、私たちが見ることを叶えてくださったのです。

おお、愛されたる者たちよ。できることなら私は彼の多くの善行を沈黙に委ねたいと思っていました。私の内なる欲求が、しかしながら、私をして語らしめ、一方、私の至らなさは私に沈黙することを命じています。私の貧しい考えが、私に語ることを命じながら、まえに進んでいきます。知恵の欠如が私の口をふさぎ、私に沈黙することを命じています。しかし、私は二つの欲求に取りつかれ、打ち負かされています。すなわち、私の心を騒がせるたくさんのもの思いから少しでもよいから解放されたい、安心を得たいがためによりよく話したいという欲求です。私はこの聖なる人の人生について少しばかりのことを、たくさんのなかからわずかなことを話すことを決意しました。私は、聖なる命の源なる三位一体といと清らかなる神の御母への名誉と誉れのために、神に似たる我が師セルギイの賞讃のために、自らの貧しい理性と朽ち果てた知恵によって、私たちの貧しい賞讃のなかでここですべてを取りあげ、書き、封印したいと思います。私は疑念に満ち溢れていますが、至福の方の祈りに望みをつなげて、それでもあえて書くのです。なぜなら、彼の生活は徳高く、完璧であり、彼は神によって讃えられていたからです。私は恐れていました。というのは、粗野で邪悪な私は無力なだけからです。しかし、どんなに詳細に書いてみたところで、彼のことを最後まで完全に知り尽くすと言うことは不可能なのです。この神に似たる師父、偉大なる長老のことを誰かがすべてを汲みつくして書いたとしても、です。この人は私たちの日々、時代、歳月を、私たちの国で、私たちの民衆のただなかで生きました。この地上で天使の生活を生き抜き、穏やかな忍耐と堅固な禁欲のなかで、童貞のなかで、清らかさと清浄さのなかで鍛えられ、神の聖なることに到達し、神の恩寵を授けられました。というのは、彼は若いころから、聖霊の神殿となるように清められ、かの使徒にしたがって自らを、神がそこに住まう選ばれたる聖なる器としたからです。かの使徒はこのように言っておられます。「兄弟たちよ、

そなたたちは、神が「私がそこに住む」と仰せられた、生きてる神の教会である<sup>235</sup>。」

この神に似たる我らが師父セルギイは子供のころから、若年のころから、物心のつきはじめた頃から、神に自らを委ねました。襦袢をしたころから、神に捧げられ、若いころから教会を愛し、しばしば教会に通い、聖なる書物によって教え導かれ、神の書物を覚えきり、それらを喜んで聞き、預言者ダビデが次のように言ったように、それらの書物で学びました。「その人は、夜も昼も学ぶであろう。その人は、流れのほとりに植えられた木。時が来れば実を結ぶ<sup>236</sup>。」というのは、若いころから彼は修道士の衣服を熱愛してそれに身をくるみ、若いころから、さまざまな善行において一生懸命潔斎し、彼の心のなかでは恩寵の光が輝きました。彼の考えは霊の恩寵において光彩を放ち、そのおかげで彼は徳高い生活に邁進できたのでした。

彼は偉大なる禁欲を、謙遜、清浄、あらゆるものに対する嘘偽りのない愛を保ちました。彼の誉れと彼についての噂はあらゆるところに広まり、彼の話聞いた人々は遠くから彼のもとにやって来ては、偉大なる福、大いなるご利益、救済を彼から受け取りました。主は実にあらゆる理性を彼にお与えになり、その理知は悲しみに暮れる者らを慰めました。彼の熱意は、彼の知が地上のいかなるものにも、生活のいかなる煩いにも向けられることがないように用いられました。彼は地上の所有にいかなる執着ももちませんでした。朽ち果てた富からいかなる財産ももたず、金も銀も宝物も、明るく高い神殿も家も素晴らしい村も、高価な衣装ももちませんでした。これらすべてのもののほかに彼は、しかしながら、真実の無所有と貧困を、富の代わりに霊に満ちた貧しさを、偉大なる謙遜とすべての人々に等しく注がれる嘘偽りのない愛をもったのです。彼は選ぶことなく、裁くことなく、人間の課をお見つめることなく、誰に対しても尊大な態度を取らず、非難することもなく、中傷することもなく、怒りを抱かず、憤怒に身を任せず、残酷さも酷烈さももたず、すべての人々を等しく愛し、等しく敬いました。彼は誰に対しても悪意をもちませんでした。彼の言葉は恩寵のなかにあつて、心地よさと愛は塩となって味をつけていたのです<sup>237</sup>。

この人の甘美な答えを聞いて、いまだかつて誰がこの人の言葉の甘さを味わわなかったことがありましようか。彼の顔を見て誰が喜ばないことがありましようか。この人の聖なる暮らしぶりを見て、誰が悔い改めないことがありましようか。この人の穏やかさと悪意のなさを見て、誰が感動しないでありましようか。傲慢のなかで驕り高ぶっているいかなる猛獣が、この人の気高い謙遜を目の当たりにして打ちのめされないことがありましようか。いかなる放蕩者が、彼の清らかな生活を見て、淫蕩な生活を止めようとしなないでありましようか。抑制のきかぬ憤怒に打ち負かされやすいいかなる者が、彼と話して穏やかな人間に変わらぬことがありましようか。というのも、我らの日々、いまこの時代、我らの歳月に、私はこのような男、あらゆるめでたき事績において完璧なる、あらゆる面であらゆる徳行で飾られたこのような男を見たことがないからで

<sup>235</sup> 『コリントの信徒への手紙二』6章16節。

<sup>236</sup> 『詩篇』1篇2-3節。

<sup>237</sup> 『コロサイの信徒への手紙』4章6節。

す。というのも、神はほかの聖人たちの誰を、この神に似たるセルギイほど熱愛したでありましょうか。

彼は私にとって、いまの時代の最初の人間であり、最後の人間であった。神はこの世の終末をまえにした最後の時代にあつて、最後の世代である私たちにこの方を賜ったのです。神は七千年紀の最後にルーシの地で彼を讃えました<sup>238</sup>。暗闇と闇のなかでいかに明るい巨星が輝いたことでしょう。沈まぬ星のように、ひそかに光り輝く光線のように、地の割れ目の百合のように、芳香を放つ香炉のように、よい匂いのリンゴのように、香り高い野ばらのように、塵のなかの黄金のように、七回溶かされ鍛えられ清められた銀のように、素晴らしい石のように、高価な真珠と明るいサファイヤのように、ナツメヤシの棕櫚のように、茨と棘のなかでいかに素晴らしい花が開いたことでしょう。それはあたかも水辺の糸杉のようであり、レバノンのセイヨウスギのようであり、実がなるオリーブの木のように、よい匂いのアロマのようであり、滴る聖油のようであり。輝く果樹園のようであり、たわわに実をつけた葡萄畑のようであり、豊かな房のようであり、閉じられた菜園のようであり、鍵のかけられた庭園のようであり、隠された甘美な泉のようであり、選ばれたる器のようであり、高価な聖油の入ったアラヴァストル<sup>239</sup>のようであり、毀たれがたい町のようであり、動かぬ壁のようであり、堅固な要塞のようであり、たくましく誠実なる息子のようであり、教会の基礎のようであり、揺るがない円柱のようであり、栄えある桂冠のようであり、霊の富をいっぱい詰め込んだ船のようであり、地上の天使のようであり、天上の人間のようでありました。

この長老は主のために深い老齢において逝去したのです。それはあたかも徳行のなかで、真実と清浄のなかで、謙遜のなかで、あらゆる清らかさと聖性のなかで息抜き、霊の日々を生き終わり、あらゆる精勤と抑制とともに、怠惰に決して打ち負かされることなく、元気に決して酩酊することなく過ごした七八年のこの世の生から旅立たれたのでした。自らの労働と忍耐において我らの時代のあらゆる修道士たちを凌ぎ、自らの徳行と振舞いにおいて多くの人々を凌駕したのでした。この聖なる人の功業とそのほかの徳行に較べれば、私たちの生は何だというのでしょうか。私たちの存在は何だというのでしょうか。この方と較べれば、私たちの修道士としての生活も何ものでもなく、私たちの祈りもこの方の祈りの残影にすぎません。東と西がかけ離れているように、私たちがこの至福の正しき男の生活に到達することは難しいのです。この方の生活はこのようなものであり、この方の労働は、おこないは、功業は、苦行は、たくさんの患いはこのようなものでありました。私たちは功績を誇るために彼について語るのではないし、長所をひけらかそうとして書くではありませんが、たくさんのことのなかから少しのことだけを物語ろうとしたのです。

あの方の最期の時が来たとき、あの方は自らの弟子たちに教訓を与え、彼らに自分のことを教

<sup>238</sup> 「地上における人類の歴史の最期が近づいているときに」の意。中世期には、天地創造から数千年が過ぎると最後の審判の時が訪れるという考えが広まっていた。

<sup>239</sup> 香料を入れるために用いられた、首の細い金属の容器のこと。

会に葬ることをお許しになりませんでした。あの方は、自らをほかの兄弟たちとともに教会の外に葬るようにお命じになったのです。兄弟たちは聖なる人からこれを聞いて非常に悲しくなり、このことを至聖きわまる大主教にお伺いを立てたのでした。そのとき栄えある名にし負う偉大な都市モスクワで、女宰なる我が至聖なる栄えある女主人様の玉座<sup>240</sup>を飾っていたのは、聖なる府主教キプリヤン<sup>241</sup>でした。至福の人がどうやってどこに葬られるべきか、キプリヤンは心のなかで考えかつ判断し、兄弟たちを祝福したのち、彼を教会のなかの右側に安置するように命じました。そして彼らはそのとおりにおこないました。神に似たる人の遺骸は、彼自身が建立し、聳え立たせ、設え、基礎を置き、あらゆるしかるべき飾りで飾り、聖なる、命の始原なる、分かちがたい、単一の本性の三位一体の誉れのために名づけられたその教会のなかに安置されました。それは彼の神聖なる修道院のなか、名にし負う大修道院のなか、偉大なる境内のなか、彼自身が聳え立たせ、建立し、設えた栄えある古刹のなかでした。この場所であの方は兄弟たちを、キリストの言葉の群れを集め、救われた群れとして自らの心の善良さのなかでその群れを司牧し、理性のために教えを垂れたのです。この場所で、あの方ご自身が修道士の形姿を、天使の形姿さえも授かり、数え切れぬほどの何千という労働を成し遂げ、数限りない功業をやり抜いたのでした。この場所であの方は、絶え間ない祈りを捧げたのでした。この場所であの方は、毎日の、そして夜の祈禱歌の朗誦を感謝の念のなかで捧げ、神への讃め歌を歌い上げたのでした。この場所であの方は、長年にわたる多くの苦しみに耐えぬいた自らの生を終え、のびきならないよほど特別な用事がない限り、自分の場所からほかの土地へと立ち去ることなく、この偉大な功業を成就したのでした。

あの方は、この呪われた理性を奪われた私と同様に、ツァリグレードにも、聖山<sup>242</sup>にも、エルサレムにもいきませんでした。ああなんということか。私はつらいのです。私はここでもかしこでも這い回り、ここにもかしこにも船で往来し、この場所からあの場所へと動き回っています。神に似たる人はこのように放浪に身を任せず、讃えられるべき沈黙のなかに留まり、自分の心にじっと耳を澄ませたのでした。たくさん場所に行くわけでもなく、遠いところにも行かず、一つの場所でじっと暮らして神を讃えていたのです。というのは、あの方は、必要のない空虚で難しいことを探し求めたりせず、魂を救うために、何にもましてただ一つ真実なる神へと邁進したからです。「求めよ、されば見いださん。叩けよ、されば開かれん<sup>243</sup>」と言われていたとおり、それはあの方にあつては首尾よくいったのでした。誰が昨今、この神に似たる師父のように、全知全霊をもって神へと邁進し、魂の奥底から神を愛しているでしょうか。それは預言者がこのように言っているとおりです。「私は私の全知全霊であなたを探しました<sup>244</sup>。」またこのように言われ

<sup>240</sup> モスクワのクレムリの神の御母就寝聖堂のこと。

<sup>241</sup> 1381年から1382年にかけて、1390年から1406年にかけて全ルーシ府主教であった。

<sup>242</sup> アトス山のこと。

<sup>243</sup> 『マタイによる福音書』7章7節、『ルカによる福音書』11章9-10節。

<sup>244</sup> 『詩篇』119篇10節。

ています。「私は主を探しました。主は私の言うことを聞いてくださいました<sup>245</sup>。」

セルギイさまの最期の時には、たくさんの民衆がさまざまな町から、多くの場所から集まり、それぞれの者たちが彼の敬虔なる遺骸に何としても近づき、触れ、その衣服から何がしかのものを自分の祝福のために持ち帰ろうと躍起になったのです。長老はしばらく病み、そのあとで主の御もとに、永遠の修道院へと旅立ったのです。それは自らの身体を齋戒と祈りですっきり干からびさせ、肉を疲れ果てさせ、地上の身体のあらゆる部分を殺し、肉体の情欲を霊に従わせ、霊の邪悪に打ち勝ち、生の甘さを踏みにじり、地上の気遣いを斥け、欲情のほとぼしりを抑えつけ、この世の美しさ、黄金、銀を軽蔑し、この世の誘惑的な財産を忌まわしいものとして撥ねつけ、蔑んだ。あの方は、この世の生の濁った大海をいともかんたんに泳ぎわたり、霊の賜物を満載した魂の船をまったく損なわずに船路をわたした。船は何の損害もなく静かな船着き場へとたどり着き、そこに到達して霊の翼で理性への高みへと舞い上がり、欲情から解放された桂冠で飾られ、主のもとに出立し、死から生へと、労働から平安へと、悲しみから喜びへと、功業から慰めへと、思い煩いから陽気さへと、空虚な聖から永遠の生へと、瞬く間に過ぎゆく世界から終わりなき世界へと、腐敗から不朽へと、力から力へと、誉れから誉れへと渡っていったのです。修道院に来た者たちみんながその場であの方を思って泣いたのです。

公たちも貴族たちも、ほかの貴顕たちも、敬虔なる修道院長たちも、司祭たちも輔祭たちも、夥しい数の修道士たちもほかの人々も、ろうそくと香炉をもってあの方の神聖なる多くの苦患を耐えた遺骸を敬虔な気持ちで運び、彼のうえで定められた祈りの歌を歌い、埋葬歌の歌いながら感謝を捧げ、心ゆくまで祈り、うえに述べてきたように、彼に身じまいをさせ、しきたりをきちんと守ってあの方を納棺したのです。何時間も彼の遺骸のうえで人々は絶え間なく泣きつづけ、ようやく各々の家に帰ろうとしてもまだ涙を滂沱と流し、悲しみに暮れたままであります。なかでも絶え間なく涙を流し続けたのが、彼の年老いた弟子たちであり、彼の群れで生き、彼から愛された追隨者たちでした。みんなが悲しみ、嘆き悲しみながら歩き回り、ため息をつき、号泣し、謙遜な者たちは呻き、涙で顔をくちやつくちやにして、悲しみ、心を揺さぶられ、うなだれ、口々にこう言うのです。

父よ、許してください。キリストにおいて愛された兄弟よ、私たちを祝福してください。いま善良で至福なる我らが長老が私たちのもとから、私たちの孤児にして、主のもとへ旅立っていきました。自らの所業のゆえに大いなる報いと褒賞を受け取る場所へと立ち去っていきました。平安とともに、若いころから熱愛した主のもとに旅立ちました。永遠のあの方にふさわしい眠りのなかで安らぎを得ました。永遠の平安のなかで主に抛り立って眠りにつきました。私たちは孤児として残されてしまいました。このゆえに私たちはいまあの方を惜しみ、泣いているのです。私たちはあの方なしで取り残され、おそろしいほど心貧しくなったから

<sup>245</sup> 『詩篇』34 篇5 節。

です。私たちは孤児になり、小さくなってしまったからです。私たちは謙遜し、蔑まれてしまったからです。私たちは悲しみのなかで貧しくなったからです。私たちは周章狼狽し、何をしたらよいかわかりません。群れからは牧者が奪われ、船からは舵取りが失われ、果実をたわわにつけたぶどう園からは見張りがいなくなり、病人は医者から見捨てられてしまったからです。私たちは困惑し、爪はじきにされてしまいました。

このような言葉、これに似た言葉を人々は言って、彼を思って悲しみ、彼を思って泣いたのです。

あの方が生きていたいだけだけでなく、死んだあともあの方への信仰と愛をもち、彼の柩にいつも来て、畏れとともに駆け寄り、信仰とともに訪れ、愛とともにひれ伏し、感動とともに近づき、両手で敬虔に畏敬の念をもって抱きしめ、両目で見つめ、額づいては愛をもって彼の柩に接吻し、清らかな唇でキスし、信仰に満たされ、大いなる愛とともに熱い情熱によって彼と生きたる者と話すように会話を交わす多くの人々が、涙を滂沱と流しながら彼にこう言うのでした。

祈り：

おお、聖なる神の人よ。救世主のお気に入りの方よ。キリストに選ばれたる神に似たる者よ。神聖なる男よ、神に似たる偉大な師父セルギイよ。私たちを、そなたの貧しき者たちを最後の最後まで忘れないでください。そなたの聖なるめでたき主への祈りのなかで私たちのことを思い出してください。そなたご自身が司牧された、自らの群れを思い出してください。自分たちの子供たちを訪れることを忘れないでください。神聖なる父よ、私たちのために祈ってください。ご自分の霊の子供たちのために祈ってください。というのは、そなたは天のツァーリのまえで大胆さをもってくださっているのですから。私たちのために主の名前を呼びながら、決して黙らないでください。信仰と愛をもってあなたを敬う私たちを見捨てないでください。全能の神の玉座でそれにふさわしくない私たちを思い出してください。私たちのために神キリストに祈ることを止めないでください。というのは、私たちのために祈るという恩寵がそなたにお与えられたのですから。あなたの身体は私たちにとって死んでしまいましたが、私たちはそなたが死んだと思っていません。霊において私たちから遠ざからないでください、私たちの善良な牧者よ。あなたの遺骸を収めた柩はいつも私たちの眼前にあります、あなたの聖なる魂は見えませんが、天使の軍勢とともに、肉体のない天使たちの集まりとともに、天の軍勢とともに、全能の神の玉座のおそばにあって、素晴らしくそなたにふさわしく喜びに満ちているのですから。というのは、私たちはあなたが亡くなられたのちも生きておられることを知っているのですから。

実に預言者によってこのように書かれているのです。曰く、

義人たちの魂は神の手にあり、責め苦が彼らを脅かすことはない。彼らの希望は不死で満

ちいる。というのは、神は彼らを試し、彼らのご自分のふさわしいことを確かめられたからである。黄金のように彼らを試し、捧げ物として彼らを受け容れたのである。というのは、恩寵と慈愛は神の選ばれたる者たちとともにあり、神は自らの選ばれたる者たちを訪れるからである<sup>246</sup>。

義人たちは永遠に生きる。彼らには主から報いがあり、いと高き方から配慮をいただく。このゆえに義人たちは主の両手から美の王国と善の桂冠を得る<sup>247</sup>。義人たちの記憶は賞讃とともにある。主の祝福は義人の頭上にある<sup>248</sup>。義人はたとえ死んでも安らぎのなかにある。というのは、老年の誉れは長寿にあるのではなく、年数によって測られるものではない。人の思慮深さこそが白髪であり、汚れない生涯こそ長寿である。神に喜ばれた人がいた。彼は神に愛され、罪びとのなかで暮らしていたときに、悪が理性を変えてしまわないように、偽りが彼を暗くしないように逝去した。短いあいだに彼は多くの歳月を生きた。というのは、彼の魂は主のお気に召されたからである。このゆえに主は義人を愛し、彼を守られ、彼の命を大切にされた。彼はこの地上で至福の者であった。義人はけっして動揺することはないだろう。神は自らの神に似たる者に腐敗を見させることはない<sup>249</sup>。主は高くいまし、謙遜なる者たちを高める<sup>250</sup>。主は柔和なる者たちを受け容れる。主は真実のなかで自らを呼ぶすべての者たちの近くにおられる。主は自らを恐れる者たちの願望を叶え、彼らの祈りに耳を傾け、彼らを救いたまう。主は自らを愛するすべての者たちを守られる<sup>251</sup>。主は義人たちを心で愛される。咎なき道を歩む者たちみなが主には心地よい。主は彼らの骨のすべてを守ってくださる。そのどの一本も損なわれることはない<sup>252</sup>。義人が褒められると、民は喜ぶ<sup>253</sup>。かくして、主を畏れる人は祝福され、いと高き方に身を寄せ、天の神の陰に宿る人は安住の場所を得る<sup>254</sup>。神の館に、我らの神の屋敷の庭に植えられた人は花開き、レバノンの杉のように茂る<sup>255</sup>。義人たちよ、主に抛り立って喜べ。賛美は義人たちにふさわしい<sup>256</sup>。義人はとこしえに記憶される<sup>257</sup>。義人たちの種族は祝福されるだろう<sup>258</sup>。神よ、あなたの友人たちは私にとって

<sup>246</sup> 『知恵の書』3章1-9節。

<sup>247</sup> 『知恵の書』5章15-16節。

<sup>248</sup> 『箴言』10篇6-7節。

<sup>249</sup> 『詩篇』16篇10節。

<sup>250</sup> 『詩篇』113篇4-7節。

<sup>251</sup> 『詩篇』145篇18-20節。

<sup>252</sup> 『詩篇』34篇21節。

<sup>253</sup> 『箴言』29篇2節。

<sup>254</sup> 『詩篇』91篇1-2節。

<sup>255</sup> 『詩篇』92篇13-14節。

<sup>256</sup> 『詩篇』33篇1節。

<sup>257</sup> 『詩篇』112篇6節。

<sup>258</sup> 『詩篇』112篇2節。

いかに貴いことか<sup>259</sup>。彼らの力はいかに揺るぎないことか。

それは使徒パウロの言ったとおりです。「兄弟たちよ、主において喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい<sup>260</sup>。」義人<sup>261</sup>はこう仰せられています。

私が身を低めたので、主は私を救われた。このゆえに私の魂はあなたの平安に帰った。というのは、主は魂に善を施されるからである。というのは、主は私の魂を死から、私の目を涙から、私の足を躓きから救われたからである。私は生きてる者たちの国で主のお気に召すように生きた。これは私の永遠の平安、私はここで喜ぶ<sup>262</sup>。罪びとたちの村で暮らすより、私は主の屋敷の敷居にいることを望む<sup>263</sup>。祝祭のざわめきの喜びと祝福の声とともに<sup>264</sup>、私はいつ神の御顔のまえに行き、神の御顔を仰ぐことができるのか<sup>265</sup>。このゆえに私は死なずに生きながらえて、主の御業を語り伝えよう。主は私を厳しく懲らしめられたが、死に引き渡すことはなさらなかった。正義の城門を開け。私は入って主を讃えよう<sup>266</sup>。「主よ、力の神よ。あなたのいますところは、どれほど愛されていることでしょうか。あなたの庭を慕って私の魂は絶え入りそうです。なぜなら、あなたの庭で過ごす一日は千日に優ります<sup>267</sup>。なぜなら、主よ、あなたの目をまえにしての千年は、それが過ぎてしまったときの一日のようです。鹿が水を求めて泉に引き寄せられるように、私の魂はあなたに引き寄せられます、神よ<sup>268</sup>。喜ぶ者たちすべてにとって、あなたのいますところは命の泉です。いかに幸いなことでしょうか。あなたの家に住むことができるなら<sup>269</sup>。彼らは常しなえにあなたを讃えるでしょう。柔和な者たちは幸いです。なぜなら、彼らは地を継承し、それを領有するでしょうから<sup>270</sup>。」

義人たち、柔和な者たち、心において謙遜な者たちが、静かで沈黙しているが、つねに喜びに満ち、楽しむ地を継承するのは、身体だけではなく、いついかなるときも得も言われぬ愉悅で満たされている魂そのものをも継承するのは明らかなことです。彼らはこの地上でつねに喜び祝うでしょう。

<sup>259</sup> 『詩篇』139 篇17 節。

<sup>260</sup> 『フィリピの信徒への手紙』4 章4 節。

<sup>261</sup> パウロを指す。

<sup>262</sup> 『詩篇』132 篇14 節。

<sup>263</sup> 『詩篇』84 篇11 節。

<sup>264</sup> 『詩篇』42 篇5 節。

<sup>265</sup> 『詩篇』42 篇3 節。

<sup>266</sup> 『詩篇』118 篇17-18 節。

<sup>267</sup> 『詩篇』84 篇11 節。

<sup>268</sup> 『詩篇』42 篇2 節。

<sup>269</sup> 『詩篇』84 篇5 節。

<sup>270</sup> 『マタイによる福音書』5 章5 節。

かくのごとくして、神に似たるこの師父我らがセルギイはこれがゆえにこの世のすべての惑わしを蔑み、沈黙のなかで安らぐ地、あらゆる慰めで満ちている素晴らしい地を望み、そのような地を熱心に探し求めたのです。それは、真実そのものが聖なる福音書で言ったとおりなのです。「門をたたきなさい、そうすれば、開かれる。高価な真珠を探しなさい、そうすれば、見つかる<sup>271</sup>。」高価な真珠を探し求めるとは、我らが主イエス・キリストを探し求めることであり、イエス・キリストから天の王国を受け取ることなのです。私たちみな我らが主イエス・キリストの恩寵によって天の王国を受けることができますように。イエス・キリストこそ、始原なきその父と聖なることこのうえない至福の命を生みなす聖霊とともに、いまも常しなえに世々に、あらゆる賞讃、誉れ、跪拝に値する方です。アーメン。

### 〔おわりに〕

『中世ロシア文学図書館』は現在まで、本作品を含み 26 集が出ている。15 集までの掲載作品については、16 集に一覧がある。ここでは、16 集以降 25 集までの掲載作品を掲げる。

(XVI) 「佯狂者アンドレイ伝——翻訳と解題」Waseda RILAS Journal 7, 2019, pp.301-314.

(XVII) 「府主教フィリップ伝(上)——翻訳と注釈」『文学研究科紀要第 65 輯』(2019 年度)、2020 年、311-325 頁。

(XVIII) 「アポクリファ③、幻視の文学① 神の御母の憐み」『古代ロシア研究』25 号、45-85 頁、2021 年、《神の御母の地獄へのご訪問》、《洗礼者ヨハネの地獄への降下にまつわる講話》、《神の御母受胎告知教会の長司祭、テレンチイの《ある霊的な男に現れた幻視》》、《ヴェリーキイ・ノヴゴロドで修士ワルラームに現れた幻視》、《別の幻視》、《フトゥイニの堂守タラーシイの幻視》

(XIX) 欠番「ラドネジのセルギイ伝——翻訳と解題(2)」『エクフラシス』10 号、2020 年、79-164 頁。

(XX) 「佯狂者アンドレイ伝(完結) 曆聖者伝 10 月 1 日ポクロフについての講話」Waseda RILAS Journal 8, 2020, pp.301-312.

(XXI) 「府主教フィリップ伝(下)」『文学研究科紀要第 66 輯』(2020 年度)、2021 年、421-436 頁。

(XXII) 「中世ロシアの説教④、アポクリファ④」『エクフラシス』11 号、2021 年、125-162 頁、《スモレンスクのクリメントの説教》、《ローマのマカーリイの物語》、《我らが師父、アガーピイの物語》

(XXIII) 「ノヴゴロド点景そのほか」『ロシア文化研究』20 号、2021 年、1-17 頁、《エビヴァーニイ・プレムードルイの、トヴェーリのキリルへの書簡》、《ノヴゴロド勢とスーズダリ勢の戦闘についての物語》、《悪魔に乗って旅した、ノヴゴロドのイオアンについての物語》

(XXIV) 「ワッシアン・リュロのウグラ川への書簡」『ロシア文化研究』21 号、2022 年、1-16 頁。

(XXV) 「ウグラ河畔での対峙についての物語」『エクフラシス』12 号、2022 年、51-58 頁。

<sup>271</sup> 『マタイによる福音書』7 章 7 節。